

オйкаイワタチ 完

—新しい地球 鏝球王国完成—
—レタマヤの世の終わり—



衣と一身に
 美服はまろくとこ
 それ自ら神の
 眞意を看る
 かすがの袖のまん
 すん三
 大気の如く
 よろこびは万物の
 歌に満ち
 満ちる



— 山本麗湖画歴 —

二才より人物画を描き以来日本画に専心、父、南出木洲の指導をうけ寺ら博物館、
 神社、佛閣の宝物模写等を研究。昭和七年大津より東京に移居、川合玉堂先生の
 門人となり長流画塾に入門、玉堂先生の懇切なる指導をうける傍ら洋画故熊岡美
 彦先生の研究所にてデッサンの研究、丸の内にて個人展を数回開催する。
 昭和二十年五月、戦火で郷里滋賀県大津市に滞り大津市比叡山版室谷安楽律院に
 て得度し神佛に仕え現在に至る。 本名 麗子
 住所 大津市上田上平野町二七〇番地





月
来果二任
何も
今宵は
月の教を
得た



使命をよめる
ワシガラー
苦しみは
まことを知りて
かがやける行き
うしろいよ
雲のしり
打ち振りて
踊る
うしろい
うしろい
うしろい
邪気を被う



印

オイカイワタチに寄せて

近江神宮宮司 横井時常

高次元の通信録と呼ぶか、新世紀の到来を告げる靈感書と云うか、渡辺大起大人が親しく筆を執られた、題名「オイカイワタチ」の第四巻目に当る完結編に対し、その序文を小職が書くようにと御言葉を頂いた。まことに、思いもかけぬ格段の知遇を蒙り感激すると共に、反面余りにもひどい買い被られ過ぎ方ではないかと反省した次第。

然し、嘗って頂戴した「オイカイワタチ」第一巻に「神の靈感を受けるには、無我にて、神様に身も心も全託し、心の礼儀と、のんきな心……」と示されていることを思い出させて頂いて、序文と云う栄光の筆を持たせて頂くことにした。

吾国の古典として有名な古事記、日本書紀には、今日の言葉で云えば、宇宙に当てることの出来る「高天原」から皇統をはじめ吾々国民の多くの祖先が、この地球に天降って来たと伝えて、天の鳥船とか、天の磐船と称する飛行船か、航空機の如きものが存在していたように記している。

唯、この古典では太陽と、月とのことは語られているが、星のことは日本書紀だけに、悪神、邪神として「香香背男」の名があり、天孫降臨に徹底して反抗し最後に服従したことになっている。

ここで、考えさせられることは、今日まで書き伝えられて来た歴史と云うものは、勝者に都合よく書かれたもので、敗者のことは抹殺か、或は曲筆されていることである。

一番よく判ることは大東亜戦争で敗れた今日の日本歴史書と、戦前の歴史書との差異の甚しいことで

ある。もう一つの顕著な例は、『頃は元禄十四年』と浪曲等で語られる、『忠臣蔵』も、徳川時代には政治犯として実録の公表は許されず、時代を替え、仮名や、変名で伝えられ、漸く明治になってから実録が流布したものである。

これと同様に、小職奉仕の近江神宮御祭神である天智天皇の皇太子大友皇子のことも、古事記の序文では、『凶徒』と呼んで居り、その後約千二百年を経た明治三年になって、はじめて弘文天皇の贈諡があり、歴代天皇の皇位に加列された程である。

星神、香香背男も悪神として、弘文天皇と類似の厄に遭い、吾国の伝承からは滅却されて来たのではないかと思ふ処である。

この度小職が序文を書かせて頂くことも、神代以来、今日まで吾々の祖先と共に不知不識のうちに犯して来た、星神に対する罪の御詫びにつながるのではないかと思つている。

星神を邪神、悪神として来たことは、この地球を不幸と混乱に導いた一因ではないかとまで思うが、オイカイワタチ別冊一、二では、不幸や混乱に陥入つているこの地球の大浄化を行う除幕の儀式が、既に去る昭和五十二年三月廿日に執行されたとしている。

このことは次元の高い周波数の世界での出来事で、現在の地球での肉眼では勿論、普通の霊眼では見ることも出来ない高次元のものであるが、何れは全人類に知らされる時が来るとのことである。

『オイカイワタチ』第一巻の終りに『今までの予言者、あるいは多くの方々が語る、『世の終り』は、その殆どが、阿鼻叫喚の世の終りである。この方々は、地球のカルマが残り、明るい世とならない、苦

しみが残る世の終りを言っているのだ(中略)しかし、今回の地球の『世の終り』はそうではない。地球のカルマが解け、明るい世となり、神様の讃美を頂ける新生地球となり、人々は神様より死の靈感を頂いて、感謝の念の中で肉体の死を迎えるのである(下略)』とある。

この最後の『肉体』のことは、去る一九一四年に日本に一寸立寄つた、ヨガの大聖者パラマン・ヨガナンダの自叙伝で、人間には三つの魂体があり、第一が想念体、第二が精神や感情の座となる幽体、第三が粗末な肉体とし、現世の人間は一般に肉体的感覚に依り、幽界の住人は意識と、感情と、電子以上の微妙な理解力を持つ幽体で活動、第一の想念体の人間は一番至福な想念の世界に棲むとし、人間は順次に、この想念体の世界へ導かれることになる」と説いている。この導く役目の方々こそ、『カルマ』の掃除役、『ワンダラー』と拝察させて頂き、なんとありがたいことかと思ふ。

猶、昭和十九年六月十日千葉県麻賀多神社で突然自動書記をした画家岡本天明氏の『日月神示』にも『早く掃除せんと間に合はん、何より掃除が第一』『口と心と行と三つ揃つたまことを命と云うぞ、神の国の臣民みな命になる身魂、掃除身魂、結構』とあることから、此の全四巻の重大さを痛感する。

又、オイカイワタチ別冊三に、『この地球を悪く変えたものの象徴として、貨幣と剣(権力と自我の象徴)のカルマのことを思います』と示されている。

この『剣』のことは男性の表徴にもなるが、古典では素戔嗚大神の再生と云う日本武尊が、草薙剣を熱田神宮に留められて、白鳥に化して昇華され香川県白鳥神社に御鎮りである。

同社の随神門には白鶴が左右に阿吽の形で待立している。『鶴』とは、『剣』の持つカルマの『ギ』を

除いたもので、**平和**とか**真**の表象である。更にオイカイワタチ別冊三には**剣**の世から、**鏡**の**み世**に変わるのが、**鏝球王国**であるとの靈感が述べられている。

剣の極とも見るべき今日の原子爆弾はこの地球を崩潰せしむるに至ると聞く。

この度の完結編では、人類が真に目覚めることによって、従来の**古い地球の地軸と、赤道の位置が**新らしい地球、神の国の地軸と赤道の位置に変化する。いや、天の神様が変化させて下さるのであると教えて下さっている。まことに有難いことである。

オイカイワタチでは、太陽系の惑星にはまだ未発見のものが三個あるとしているが、現在の天文界では**九大遊星**としている。

太陽から一番遠い処が冥王星、その次が海王星で、夫々が楕円形に廻る関係から、向後約廿年間位は、冥王星の方が海王星の軌道の中に入り込んで廻り出したと発表している。

冥には死者が行く処の**冥土**、**冥途**があり、反面、神佛の援助とか加護を蒙る**冥利**、**冥加**の熟語がある。

この度の完結編は、**古い地球、古い世の葬送**と云う冥途へのことでもあるが、**この地球**全人類全動物、一切のものが、全て救われる。新らしい第一頁が始ると結ばれている。まことに意義深い**冥利**への門出の書である。

茲に、宇宙時代の到来に相応しい聖典であることを確信して、御神縁のある各位の御被見を御奨めして止まない処である。

目次

第一部 鏝球王国の国造成る

―万たるワンダラー誕生―

第一章 **「たましいの世界」聖戦終わる**……………9

第二章 **鏝球王国「形の世界」誕生**……………14

―万たるワンダラー(本の心)誕生―

第三章 **輝かしい世の終わり**……………22

―月での聖戦終わる―

第四章 **ワンダラー初心に帰る**……………32

第五章 **鏝球王国建設の足蹟を創る**……………58

―万たるワンダラー(本の気)誕生―

第六章	古い世の卒業式……………	72
第七章	鏝球王国の国造り成る……………	86

第二部 天孫降臨

第一章	始まりの儀式……………	103
第二章	天孫降臨……………	130
	―新しい地球 鏝球王国完成―	
	―エクアドルの戦いの準備―	

第三部 エクアドルの聖戦

	―レタマヤの世の終わり―	
第一章	レタマヤ……………	171
第二章	エクアドルの儀式……………	191

第三章	エクアドルの戦い……………	227
	―レタマヤの世の終わりの儀式―	
	―この地球の浄めの儀式―	
	―全世界の浄めの儀式―	
第四章	古い地球の葬送の儀式……………	236
終章	(あとがきにかえて)……………	244

附・年表	オйкаイワタチの歩み(概説)……………	256
------	----------------------	-----

はしがき

「オйкаイワタチ」別冊(三)に、「天において、別冊(三)までをもって、本書『オйкаイワタチ』としての使命は終わった。」とある。しかしその後、「真」の判る、奉仕の使命を持たれた多くの読者の方々から、「形の世界」における聖戦、「その時」に至るまでの続刊の要望が沢山よせられた。よってここに、「オйкаイワタチ 完」の発刊に至ることとなった。

本書、別冊(一)、(二)、(三)に述べられてあるこれまでの経過を振り返って見ると、大周期を迎えたこの地球において、「世の終わり」と「新しい地球の誕生」が次のような「世界」において行われて来たことが判る。

「無の世界」

「霊の世界」(注 適切な言葉が見当らぬが、神界とでも申そうか。)

「たましい(魂魄)の世界」(注 純粹のたましいの世界。)

聖戦はこの順序で行われ、それぞれの「世界」において、新しい地球は完成した。

いよいよ聖戦は「形の世界」に移行した。「オイカイワタチ 完」は、「形の世界」における聖戦の始まった昭和五二年一〇月から昭和五三年一月までのオイカイワタチ、ワンダラーの戦いの、心と意識と魂の足蹟を記したものである。

私達がここでいう「形の世界」とは、心、意識、肉体（形態）を指すと同時に、霊界、幽界、現界をも指すのである。「形」という言葉からはこの肉眼で見えるもののみを想像がちであるが、ここでは、心、意識、あるいは霊界、幽界といった、今の地球では眼に見えぬものとされている世界をも含むことに注意して頂きたい。

「新しい地球」は、別冊(三)までに述べてある通り、古い地球の良いところを引き継いだり、古い地球を改良や手直してなおししたのではない。「新しい地球」は、「無の世界」においても、「霊の世界」においても、「たましい（魂魄）の世界」においても、それぞれ以前の古い地球のものを一切引き継ぐことなく、「無」から完全に新しく創られていったのである。

したがって、「形の世界」においても当然そのようであらねばならない。つまり、心、意識、肉体（形態）、また霊界、幽界、現界においても、今までの古い地球のものは一切切り捨てられ、全くの「無」から誕生する新しい形の世界を創り上げていかねばならないのである。

この建設が、只今ワンダラーによって着々となされているのである。

ワンダラーの心と意識の世界でカルマが解かれ、新しい世が創られて、はじめて「変わる湧玉」を天の神様のみ手にお渡しすることができる。そして、これによりはじめて地球は正しい本当の「世の終わり」を迎えることができるのである。

そして、この正しい本当の世の終わりこそが、「天の神様のレタマヤ（大愛）の世の終わり」と呼ばれるものである。

「レタマヤの世の終わり」が迎えられることはワンダラーにとって、また地球と人類にとって、これ以上ない喜ばしいことである。と同時に、喜びに満ち溢れた「新しい世」の出現でもある。

これは、この遊星つまり地球とそして全人類の最大の喜びと感謝の時である。また同時に、吾々の太陽系の、さらには、全宇宙の喜びの時でもある。

しかし、この喜びを受けるためには、人類は厳しい生みの苦しみを通過せねばならない。そして、この時は、決して遠い先にあるのではない。もう目前に迫っているのである。

私は、奉仕と使命を果たされておられる方たるワンダラーの方々に、真の愛と真の心を込めて、本書（完）を捧げるにあたり、本書のストーリーのみに囚われしないで、その奥の奥にある目に見えない「真まこと」を靈感でくみとって頂きたいと切に希ねがう次第である。

第一部 鏐球王国の国造り成る

―方たるワンダラー誕生―

第一章 たましいの世界 聖戦終わる

一九七七年（昭和五二年）一〇月一日。

去る九月八日の有珠山大臼山神社における儀式によって「すべての人々、全人類、全動物、一切のすべてのもの」の「本の気」を誕生して頂いた事ことに關し、お礼とその後の御報告に再び行かねばならないという気持ちが数日前からW氏とMさんの心の奥より湧き上がって来る。

この心は、再び有珠山へ行こうと決めたその日（九月三〇日）まで続いた。

この日（一日）の夜半、Mさんが天の神様に感謝の祈りを捧げていると、眼前に、「巨大な臼わんを伏せるように伏せられた」光景が靈視された。

これを見たMさんは、この巨大な臼（大臼山神社）はすべてのものの「本の気（魄）」をまだすっかり生み出し終わっておらず、再び有珠山に行くことによって、残りのものの「本の気（魄）」が完全に生み出し終えられるのであるということの象徴であると直感した。

一〇月二日、午後四時、Mさんは太陽を見た。まず太陽の左側に三角の雲が現われ、続いて右側にも同様の三角の白い雲が現われた。するとこの二つの三角の雲は太陽を中心にして接し、正三角形となり、その中に太陽が輝いている形となった。(△●) これを見た時、次の靈感を受けた。

「鏝球王国は着々と整い建設されて、不動の鏝球王国が出来て行くのである。」

一〇月五日、朝九時、W氏は、出勤時、庄内川堤防にて、前回(九月二七日)と同じ場所で、同じ時刻に、前より数は少ないが、それでも幾百、幾千とも知れぬ「トンボのつがい」が大集団をなして西方に向かって続いて行くのを目撃した。そして、再び行く有珠山の大白山神社での儀式と関係があると思ったのであった。(別冊(三)P 264参照)

一〇月七日。

翌八日の儀式のため北海道に向かったW氏とMさんは、飛行機が北海道の上空近くにさしかかった時、窓より西空の雲海を眺めた。雲海の上は美しい夕焼空である。その中に真丸い美しい虹がある。

この美しい夕焼と丸い虹のある天空に、一つの大きな雲があった。その雲は、沢山の人達

が乗っている姿をしている。この雲を挟んで前と後に、この雲に乗った多くの人達(新しく誕生した方々)を見守るように、動物達と人間を表わす雲がいくつもあり、大きな雲に乗った人々を新らしい地球、鏝球王国へ案内してゆくのだと判るのであった。これらは静かに西の方向に進んで行った。

この一連の光景を見た時、二人は、今もなおこの「本の気(魄)」を完全に生み出すという明日の儀式の重要性を再確認したのであった。

一〇月八日。

札幌から洞爺駅に向かう途中、天空に巨大なVの形を画いた雲が突然現われた。

有珠山大白山神社にて次の儀式の祈りが捧げられた。

祈り。

天の神様、サナンダ様、神々様、地の神々様ありがとうございます。

有珠山大白山の神様ありがとうございます。

去る九月八日、すべての人々、全人類、全動物、全草木一切のすべてのものの「本の気

(魄)」を誕生して頂き、すべて安産に生み出して頂きましたことありがとうございます。

本日ここに、残るすべてのものの「本の気(魄)」を全部生み出し終わって頂きましたこと

ありがとうございました。

去る七月二二日、沖繩ひめゆりの地にて誕生しました「本の心（魂）」と、有珠山にて生み出して頂きました「本の気（魄）」とが、去る九月二三日、富士山の湧玉の池にてワンダラー集い、^{つど}「鏝球王国の儀式」により、ここに結ばれ、清められ、「たましい」となり、生命力溢れ、生き生きとした働きが始まりましたこと、ここに御報告とお礼に参りました。

有珠山の大白山の神様、元の位置にお戻り頂き、新しい地球、鏝球王国をお守り下さいますようお願い申し上げます。ありがとうございました。

儀式を終えたあと、Mさんは次のテレパシーを受けた。

「この役で、この地へ来ることは全て終わりました。」

W氏とMさんは、重い荷物が一度に降りたように、身も心も軽く、大変さわやかな気持ちになったのであった。

この役ではこの地に来ることは終わったが、別のお役で再び有珠山に来る必要の時があるかも知れない。しかし先のことは全く判らない。ワンダラーは神様から頂く靈感のままに進めば良いのである。

一〇月九日、未明、Mさんの霊夢。

そこには二人の自分が居る。一人の自分は馬に跨り、^{またが}地（球）に居るもう一人の自分手を振りながら意気揚々と天空の宇宙の彼方へ馬で駆けて行くのであった。

この時、Mさんは、去る七月二二日に始まり昨一〇月八日までに行われた数々の儀式（たましいの世界における聖戦）が終わったことを神様の処へ御報告に行くのであると理解したのであった。

この日（九日）、午後四時、札幌から空港に向うバスの中で、Mさんは次の光景を見た。天空は曇り空であるが、一部が明るく光り輝き、そこから太い大きな光の柱が数本、地上に向かって降りている。これを見た時、Mさんは次の靈感を受けた。

「地の神々様は（新しい地球、鏝球王国の「たましいの世界」が誕生したことを）安堵され、これからのワンダラー達の働きを勇気づけられるのである。」

（本章は別冊(三)の続きである。）

第二章 鏢球王国「形の世界」誕生

―万たるワンダラー（本の心）誕生―

一〇月一九日、ワンダラー〇〇氏はこの道を二〇年近く歩み続けながらも、以前のカルマによる迷いの心のために、最後の一步を踏み出せない状態であった。そこでこの一步を踏み出すために次のように宣言したのである。

「私はかつて〇〇家の息子としての役を持つワンダラーでありました。しかし、この役が終わってしまっても十数年間、私は以前の役によるカルマのために迷っておりました。

しかし、今、私は、一切の迷いを断ち切り、目覚め、新しい役目を頂いた、新しく生まれ変わったワンダラーとしての道を進んで行くことを宣言致します。」

一〇月三日、ワンダラー二一名が集い、「鏢球王国「形の世界」への儀式」が行われた。

一〇月二六日、未明、Mさんは外国へワンダラーとしての使命を果たしに行った夢を見た。そこには殆んど建物らしいものは無く、なにか砂漠を思わせるような処であった。その時、日本でのお役が終われば、役は世界に移って行くのであろうと思ったのである。

一〇月二八日。

Mさんは一週間ほど前の夜から連日、次のような光景を霊視するようになった。

真丸い球がある。その色は、大変に汚れた濃緑色である。そして、その廻りをピンクとオレンジ色が包みこむようにとりまいている。

この日（二八日）午後二時三〇分、この霊視の意味が霊感によって解けたのである。

「汚れた濃緑色の球は現在の地球（形の世界）を表わしている。廻りを覆っているピンクとオレンジ色は、地球のカルマを浮き上がらせ、燃えつくさせる準備をしているのである。」

一月五日、ワンダラー八名集まり、夜を徹して語り合った。

Mさんはこの途中（夜一二時頃から翌朝六時にかけて）、テレパシーで「土星の音楽」を数回聞いた。

註 Mさんは、「土星の音楽」のレコードはこれまで一度も聞いたことが

なかった。後日、W氏からこのレコードを聞かされて、始めてテレパシーで聞いた音楽と旋律が同じであることを知ったのであった。

続いて次の靈感を受けた。

「今年中に大事な、しかも大きなことを果たさねばならない。」

一月八日、未明、W夫人の霊夢。

「山に登れるだけ登りなさい。」という天の声を聞いた。夫人は大きなお腹を抱えてその高い山の頂上まであえいで登った。そこで夫人はとても可愛らしい赤ちゃんを生んだのであった。

この霊夢の意味は後日に至り明らかとなった。つまり、赤ちゃん（万たるワンダラー）が高い山に登る途中ではなく、山の頂上に達した時に生まれたことは、万たるワンダラー全員が無事に最良の時に生まれることを象徴的に示されたのである。

一月一二日、未明、Mさんは次のテレパシーを受けた。

「沖繩のひめゆりの地にただちに行きなさい。」

「ひめゆりの地に行く目的は」と問うと、

「自分で考えなさい。」

一月一六日、夜半、Y画伯は次の光景を霊視した。

「沢山、沢山の可愛らしい赤ちゃんが誕生して、赤ちゃんで天空は一杯である。」

これは、「万たるワンダラー」誕生の光景を見せられたのであった。

一月一七日、沖繩のひめゆりの地における儀式は一月二六日、午前七時と決定された。この時、次の靈感を受けた。

「万たるワンダラー誕生祝事の儀式。」

一月二〇日、Mさんは次のテレパシーを受けた。

「沖繩の地における儀式の準備はすべてここに整いました。」

一月二二日、この日、ワンダラー十数名集まり、来る二六日の「沖繩ひめゆりの地」における「万たるワンダラー誕生祝事の儀式」について全員の心を一つにした。

この日（二二日）、高知のN夫人は次の光景を霊視し、かつテレパシーを受けた。

白い三角形の雲に乗られた天の神様のお姿を拝した。そのあとには御二人の神様がおられる。天の神様はいつものお顔に大変よろこばしいやさしさを込めて次の宣言をなされた。「世の終わりの輝かしい道は整いました。」

一月二十六日、午前七時。

昨夜来の雨で清められた沖繩ひめゆりの地において、夜明の静寂と表現しがたい素晴らしい靈気を全身に受けながら、次の儀式が行われた。

「万たるワンダラー（本の心）誕生祝事の儀式」

祈り。

天の神様、サナンダ様、神々様、地の神々様ありがとうございます。

去る九月二三日、富士山の湧玉の池にて行われました「鏝球王国の儀式」により、ここに「形の世界」に移行して下さいましたことありがとうございます。

天の神様、サナンダ様、神々様と地の神々様と大きく結びかれて、ここに「万たるワンダラー」を誕生して下さいましたことありがとうございます。

大地を大きくゆすり、明るく生命力の満ち満ちた世界となり、鏝球王国が成就致しますようお守りとお導き下さいますようお願い申し上げます。

神様の永遠に降り給う地、ひめゆりの地に「湧玉の地」をお移し下さいますようお願い申し上げます。

天の神様、サナンダ様、神々様、地の神々様ありがとうございます。

ここに万たるワンダラー「本の心（魂）」が誕生したのである。

この祈りを捧げている時、Mさんは次の光景を靈感と共に霊視した。

「天より数限りないまるまるとふとった可愛らしい赤ちゃん（ワンダラー）がつぎつぎと降りて来る。この赤ちゃんをMさんは両腕りょうかいなに抱きかかえる。すると赤ちゃんはすーっと消えるように彼方に去って行くのである。この光景が暫くのあいだくりかえされた。これはまさに万たるワンダラーの誕生であると判った。」

この日（二六日）の朝六時四七分、W夫人は次の光景を霊夢で知らされた。

夫人は、夢の中で「これに乗りなさい」という神様のお声を聞いた。それは円盤であった。夫人はその円盤に乗って沖繩のひめゆりの地に着いた。一人で祈りを終えて、しばらく道を歩いているうちに広い場所に来た。その広場は一杯の人達（万たるワンダラー）であふれている。ある人は手を振り、ある人は万才と叫び、ある人は日の丸の旗を打ち振り、皆大変う

れしそうである。その中には夫人の知っている方々が十数人いた。

夫人はその人達に語りかけた……。

「あなたたちもここにお詣りに来たのですか。でもこの一杯の人出は何事かあるのですか？」

するとその中の一人が次のように答えた。

「今日（二六日）朝七時に皇太子殿下がお詣りに来られますので、私達はお出迎えのためにこの広場にいるのです。でもこの広場に入るには切符がいりません。」

夫人は円盤でここに来たため、切符（夫人は飛行機の切符と間違えていた。）を持っていないので困ってしまった。その時耳元で、「旅行鞆を開けなさい。」と声がした。鞆の底には帰りの飛行機の切符三枚と皇太子殿下をお迎えするため広場に入る切符が入っていた。

丁度この時、皇太子殿下がこちらに向かって来られ、ひめゆりの地に入られるところであった。——ここで夫人は目を醒した。時刻は午前六時四七分であった。直ちに起き、洗面、着替をすませて我家の神前に坐ったのが午前七時一分前であった。そして、七時に「儀式の祈り」を捧げたのであった。

一二月四日、ワンダラー二二名集まり、次の儀式が行われた。

「鏝球王国、形の世界、誕生の儀式」

この儀式は、万たるワンダラー（本の心）が誕生したことにより、行われたのである。

なお、この儀式の場において、来る昭和五三年一月三日、富士山の湧玉の池にて、「輝かしい世の終わりの儀式」、「湧玉の池を沖繩ひめゆりの地に移して頂く儀式」を行うことが決定された。

第三章 輝かしい世の終わり

一月での聖戦終わる―

一二月六日、未明、Mさんは霊夢とも霊視ともいえる状態で、富士山にそっくりの形をした山を見た。最初は富士山であると思った。その時、意外にも「四国に行かねばならない」と靈感で判り、口で「四国ですね」と叫んでいる自分に気付いたのである。だがこの意味については理解できず、十数日にわたって考えさせられたのである。

一二月一六日、Mさんは次のテレパシーを受けた。

「今は静かに、身の廻りを注意し、良く考える時。」

一二月一八日、未明、Mさんは次のテレパシーを受けた。

「ワンダラー（万たるワンダラー）誕生は決して楽なものではありません。」

これから起こること、すべては皆が心して受け、真まことの心で処理して行かねばならない。この日（一八日）、午後二時、

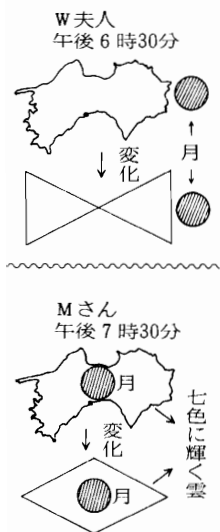
「身の廻りでまだ立ち遅れている人がある。」

一二月二〇日、午後六時三〇分。

W夫人は西の空に雲で形造られた地図を見る。その右横にとても明るく美しい月が輝いている。夫人はその地図が「四国」であると判った。すると、その雲は変化して向い合った二つの三角形に変わったのである。

同じ日（二〇日）、午後七時三〇分。

Mさんは西の空に七色に輝く美しい雲で形造られた「四国」の地図がある。暫くすると四国の形は変化して菱形に変わった。月は、四国の時も菱形の時もそれぞれの中心に美しく輝いていた。



二月二十七日、去る六日より静かに考え続けて来た「四国」行きについて、W氏とMさんは次の通り決定した。

「昭和五三年一月四日、四国の金刀比羅宮にて儀式を行う。」

しかし、この時はこの儀式の意味、目的は判らなかつた。

この日（二十七日）の午後七時三〇分、Mさんは次のような天のしるしを見た。

東の空に巨大な雲で明確にMの文字が画かれた。午後七時四〇分このMの文字は巨大な手のひらの形に変化した。しかも、この手のひらの中には四国の形に雲がぬけて、天空にたつたように透き通っている。これを見たMさんは、「四国行が決定したことによる天のお喜びのしるし」であると直感した。



この頃、ワンダラーY氏から次の文章が送られて来た。

「来る一月三日の儀式によせて。」

去る一二月四日の儀式において、展開は形の世界へと移行しました。これはたしかにひとつの大きな区切りであるといえるでしょう。これからは、古い地球のカルマの消滅と共に、

明かる湧玉、即ち鏝球王国が現われてくるでしょう。

しかし、さまざまな儀式を経て地球が現在のような明かる湧玉となることができた根幹は、一九六〇年代より現在に至るまで唯一筋のマコトがゆるぎなく保たれて来たということ、これにつきますのであります。これなくしてはいずれの儀式も行い得ず、したがって今日のような明かる湧玉としての地球はあり得ませんでした。我々はこのことを決して忘れてはならないと思います。

今までのさまざまな儀式は、湧玉の地で、天の神様と共に、すべて行われて来たのであります。そしてそのため絶対的、根本的条件は、一九六三年一月に地球の湧玉が、かわる湧玉となったこと、まさにこれであります。この変わる湧玉において行われたのでなければ以後の儀式は全てあり得なかつたでしょう。

これは宇宙において遊星のカルマが解かれる場合の根本原則であります。

したがって、今日この日を迎えて、我々は“変わる湧玉”を成しとげられた“特別の手段”カミラ様に、全ワンダラーをただ“忍”をもって統帥してこられたAZ（サナンダ）様に、そしてさまざまな天の方々に、また幾多の苦難を経ながらも現在までマコトを守り抜いて下さった地のワンダラーの方々に、さらにはすべての存在の源泉であられる天の神様に、限りない感謝を捧げなければならないと思います。

と同時に、我々のこれからの歩みもまた、現在まで守り抜かれてきたマコトから一步もはずれるものであってはいけないのは当然であります。我々はこのマコトを受け継ぎ、守り育ててゆかねばなりません。そして、この天の神様からいただいたマコトによって変わる湧玉を形の世界へあらわしてゆくこと、これこそが我々のこれからの使命ではないでしょうか。



昭和五三年一月三日。

富士山の湧玉の池にワンダラー一九名集まり、次の儀式が行われた。

「輝かしい世の終わりの儀式」

「湧玉の地を沖繩ひめゆりの地にお移しいただくお願いの儀式」

祈り。

天の神様、サナンダ様、神々様、地の神々様ありがとうございます。

去る一月二六日、沖繩ひめゆりの地にて行われました大御業により、万たるワンダラー（本の心）を誕生して頂きましたことありがとうございます。

去る一二月四日、鏝球王国（形の世界）を誕生して頂きましたこと、ありがとうございますました。

ここに、「世の終わりの輝かしい道は整いました。」ありがとうございます。

ここ湧玉の地において、今までの永い永い間のお役とお働き下さいましたこと、深く感謝申し上げます。この地での湧玉の御使命は終わりましたことを、ここに感謝とご報告を申し上げます。

新しい地球、鏝球王国の湧玉の地を、沖繩ひめゆりの地にお移し下さいますようお願い申し上げます。

天の神様、サナンダ様、神々様、地の神々様に申し上げます。

ここに、世の終わりの輝かしい道は整いましたので、輝かしい世の終わりを行って下さいますようお願い申し上げます。

私達ワンダラー全員をお守り、お導き下さいますようお願い申し上げます。

天の神様、サナンダ様、神々様、地の神々様ありがとうございます。

Mさんは、儀式の終わった時、次のテレパシーを受けた。

「ここに輝かしい世の終わりを迎えられました。これから湧玉の世に移る時、古いものと新しいものとの入れ替えが行われる。この時に摩擦と混乱が生じる。ワンダラーの心の入れ替え（生まれ変わり）も当然行われる。その時は心して一つ一つを処理して行く心が大切で

あります。」

高知のN夫人は、この儀式の日（三日）に、次のような体験をした旨を手紙で知らされて来た。

午前八時三〇分、今日の湧玉の地での儀式がよく行われますようにと祈って居りますと、次の光景を霊視し、宣言を聞きました。

富士山の頂上の中央に輝く太陽があり、それを取りまく七色の光りの虹が太陽を幾重にも包み、そのやわらかな光の光芒が富士山の頂きを包みました。その時、天より宣言が響き渡りました。

「ここに世の終わりの儀式を終了致します。」

暫くして光景は変わりました。太陽は沈んだのでしょうか、富士山の稜線に沿って炎のように燃える金色の輝きが見え、頂上に金色の雲が×を画き、富士山は真黒の姿となりました。この時麓から富士山に向かってワンダラー達の声がひびき渡りました。

「沢山のお役目を果たされました富士山ありがとうございました。沢山のお役目を果たされました地球の国土ありがとうございました。」

それは荘厳な美しさに輝いていました。この霊視は九時まで見られました。

一月四日。

四国の金刀比羅宮にて次の儀式が行われた。

「月での聖戦終了の儀式」

「新しい地球の神々お立ち上がりの儀式」

儀式のあと、Mさんは金刀比羅宮の展望台より讃岐富士をなげなく眺めて驚いた。

讃岐富士を中心として、その讃岐富士と同一の山が最初に右側に現われ、続いて左側に現われ、さらに前に、後に、そしてまた左右前後に、次々と同じような山が現われては消え去る光景を霊視したのであった。その日は小雪の降る寒い日だったが、天空からは物凄い数のビームがこちらに向かって降りそそいで来るのであった。この時、次の霊感を受けた。

「新しい世の地の神々様がお立ち上がりになりました。」

去る一二月六日、Mさんが霊視した「富士山とそっくりの山」は 讃岐富士であり、「四国に行かねばならない」との靈感も今にして深く理解されるのであった。

また去る昭和五二年七月二二日、沖繩ひめゆりの地にての儀式のあと太陽の中に現われた山々が、今日霊視した山々と全く同じ姿であったことにも、Mさんは気付いたのであった。続いて次のテレパシーを受けた。

「月での聖戦終わる。」

一月五日、四国の金刀比羅宮よりの帰途、Mさんは次の光景を見て、テレパシーを受けた。午後四時三〇分、西の空は極めて美しい夕焼となった。その光景は、別冊(三)の口絵を描かれた山本画伯の絵画、「鏝球王国誕生」と全く同じような素晴らしい天のしるしであった。夕焼の中に、亀の大小が二匹、円盤の形をした雲が数々、さらに種々様々な動物達を表わす雲が天空一杯に浮かんでいる。この時、次の靈感を受けた。

「新しい地での働きをなされる神々に全てが移行された。」

午後四時四分、続いて次のテレパシーを受けた。

「湧玉の世となり、湧玉の世が成就されるまでには、暫く時間的経過を必要とする。」

一月二〇日、「オイカイワタチ」別冊三、印刷、製本出来上がる。

二月二日、滋賀県のK氏がW氏を訪れて次のように語るのであった。

去る一月四日の日のことである。彼(K氏)は、W氏とMさんが儀式を行う少し前に金刀比羅宮へ行って、なすべきお役があると思えてならないのであった。そこで、彼はこの日、一番の汽車で金刀比羅宮に向って出発した。車中、静かに今日のお役について考え瞑想した。すると、次の自覚を得たのである。

「金刀比羅宮は新しい地(球)の神々様の集まるところである。」

「自分はここに行き、新しい地(球)の神々様に、本日ここにお集まり下さるようお願いをするのである。」

「ご集合下さった新しい地(球)の神々様に、今日これからここに来られるW氏とMさんの言葉(祈り)をお聞き下さるようであらかじめお願いするために、自分(K氏)は一足先に行くのである。」

第四章 ワンダラー初心に帰る

二月一日、ワンダラー二十数名集う。

この日は、ワンダラーが「初心に帰る」（地球に神様の国を建設することを神様に誓って出陣した時の気持に帰る）ことについて、真剣な語り合いがもたれた。

またW氏は、最近の経過を語り、そしてワンダラーの方々から送られて来た手紙と受けられた靈感について、次のように紹介した。

浦和市のF嬢よりの手紙。

——これまでの長い間聖戦を行なって下さいましたオイカイワタチの方々、ワンダラーの方々ありがとうございます。皆さんのご苦労、ご努力で私達はワンダラーとして再び世に出ることが出来ました。本当にありがとうございます。——

去る一二月一〇日頃のことですが……、心の目に富士山とみのりの刈り入れの終わった田

園の光景が浮かんできました。その時は意味が理解出来ず記録しませんでした。この光景はあとになってみてもずっと心にかかっています。ところが、一月三日、富士山の湧玉の池にて行われました「輝かしい世の終わりの儀式」により、富士山の湧玉の地のご使命の終わりを知らされたものであったと今にして判ったのです。

一月九日。

「新しい世を迎えるのにまだ心が整わない。」というテレパシーを受けました。

私の心の中に新しい世の到来、輝かしい世の終わりの認識が薄いのでしょうか。これから「形の世界」に現わされてくる御業の中で冷静に日々の生活をすごすには、魂の目覚め、心の目覚めの修業を積みなくてはならないようです。

④ このテレパシーはF嬢だけを指したのではない。ワンダラー全員を指しているのである。

一月二一日。

私の心の中に次のことが湧き上がって来ました。

私の魂の故郷である遊星を出発した時のことを少し思い出しました。

神様の御前で決意を述べたこと、使命遂行を誓ったこと、遊星の長老に激励されたことなどうすぼんやりと思いついて出されて来ました。

来る二月一日になにかあるのでしょうか、そんな気がします。（編著者注、二月一日多くのワンダラー集まり、「初心に帰り」使命遂行の決意が語り合わされた。F嬢もこれに出席した。）

別冊(三)ありがとうございます。素晴らしい御本ですね。ご本を読んでいますと、神様は私達を覚醒させんと本当に沢山の靈感を与えて下さっていることが判ります。

昨年八月二三日に名古屋屋にお伺いした時の〇〇様のお言葉を思い出しました。私には今、はっきりと判りました。

ご本を頂くまではっきりとした確信が持てませんでしたのは、私が靈感に対して心の礼儀を持っていなかったためです。

なんでもないように思っただけでやりすごしてしまうような中に大きな意味を持つ靈感があるということとは、反面こわいことだと思いました。

なんと多くの人が神様の靈感をやりすごしてしまうことか。心の礼儀がないと、靈感だと判らずにやりすごしてしまうのです。そして後になって思い出して悲しい思いをするのです。

近況をご報告致します。

一月二八日、朝の夢です。「富士山の湧玉の池が埋められる。」という知らせを受けたの

で様子を見に行きました。富士山の湧玉の池につきますと、そこはもう埋められていました。すると男性の声で……、

「長年地球の中心であったこの地もその役を終えて、今ノ埋められます。国民の感謝と共に……。」

埋められたとはいっても湧き出る水はあたりを湿地のようにして、やはりもとの川の方へ流れて行きます。けれども前のような透明な水ではありません。

家に帰って暫くすると、〇〇様がいらしてこれから一緒に湧玉の地(田) 新しい地球の湧玉の地のこと。)へ行きますようにおっしゃいました。

一月三一日。

「方たる生まれしワンダラーよ、集い来たれ、湧玉の地に。」という靈感を受けました。続いて、「あなたに愛を送ります。おめでとう。」というテレパシーを受けました。

二月一日。

この地球と故郷の遊星のことを考えておりますと、次の靈感を受けました。

「ワンダラーが使命を果たして明るい遊星となった星は皆故郷である。ワンダラーが使命を果たして来た。そしてこれからも果たして行く遊星は、使命を果たした時、故郷となる。宇宙は一つである。」

二月四日。

一五時一分頃、「火をともせ」という靈感を受けました。

ここ数日、〇〇様のところへ伺うようにという思いが湧き上がって来ます。目的なものもはっきりしておりませんが、近いうちに伺うようにと天から言われています。

二月五日、このこと（伺う目的）について天にお聞きしますと、「行けばわかります。」と言われました。肉体をもって伺った方が良いでしょう。

註 F嬢は二月二日の会合に参加。

二月六日。

二三時一五分頃、次のテレパシーを受けました。

「種をまく人がみえました。一粒一粒丹念に植えています。」

「良いカルマは地球を浄める炎となり、道を照らす灯となる。」

徳島県阿南市のT氏よりの手紙。

——前文略——「オйкаイワタチ」別冊(三)、二月一〇日に着きました。心よりの送りもの、誠にありがとうございます。厚くお礼申し上げます。

別冊(三)を読んでいいるうちに、今まで私の心の中にありました不安に思っていた事が明らか

になり、これまでの不安はなくなりました。

最初私は、「オйкаイワタチ」に書かれていることは、世間一般にいわれる霊能者、靈感者や超能力者の集まりだろうと思ったり、また、本の中には、修業したり、悟りに達する心の訓練や行^{ぎょう}などして神様につながるといことが書かれていないので、なにか別のものがあるかなと思っていました。今回もう一度「本書」、「別冊(一)」、「(二)」と「別冊(三)」を読み返してみ、霊能者や超能力者の集まりでなく、宇宙創造神の、み心につながった、高い次元の宇宙の彼方から使命を持ってこの地球に来られた方々の集まりであると感じました。そしてこの方々は日々の実生活の中で学び、心の反省と訓練をして真の魂に目覚め、心の窓を開き、神様の御心につながって地球での使命を果たされる方々であると思いました。今まで私は皆様に對し誤った心と考えでいましたことをお詫び申し上げます。

さて、最近私の感じましたこと、受けました靈感、見ました天のしるしなど簡単にお知らせ致します。

昨年一月一八日。

この日、一日中全身を包むとても柔らかい素晴らしい感じの中にひたりました。夕方、東の空に「王」という文字の雲を見ました。暫くするとそれが「主」という字に変化した。その時、「王の主」と直感しました。

一月一九日。

この日も前日と同様なんとも表現しがたい素晴らしい柔らかい靈気を感じる。この時、「神の心に皆帰る。」と直感しました。空には非常に沢山の人の喜びの顔が雲で画かれている。雲で形造られた「天の鳥」が飛んでいるのを見る。

一月二〇日。

早朝、「新しい次元へ歩み始めた。新しい世へ歩む。」と直感する。また夕方、「新しい世が始まる。」と強く直感した。

一月二五日。

夕方、「人々はもう自然に自ずから悟る時期が来た。」と靈感を受ける。

一月二六日。

雲の形で作られた「天の鳥」（今にして思えば錦鶏、即ち鏝球王国の象徴）の雛鳥が北の空に現われ、東の空へ向かって行くうちに中成鳥と成長して天に羽ばたこうとするのを見た。一月一八日。

午後四時頃、東北の空に雲で画かれた日本列島の地図が現われる。暫くしてその上空に形の違う日本の地図が現われた。これを見ている僅か数秒間のうちに、後に現われた日本列島（新しい日本）に、今の日本列島の地図は吸収され、細くなり、薄くなり消滅してしまった。

私は、これを見た時、現日本（地球）が高次元の日本（地球）に変化して行くさまを見せられた。それは、あつ／＼という間の出来事です。この時、私は次のように直感しました。

「現地球が高次元の地球に変転した。」

昭和五十三年一月一日。

午後四時頃、天空に巨大な十字架の雲を見た。この時、イエス・キリストと直感した。するとこの十字架は散って行くように姿を変えて普通の雲に変化した。

一月五日。

早朝、天空に巨大な「天の鳥」が飛んでいる。また、小さい「天の鳥」が天空一杯に、それは大変な数の「天の鳥」が飛んでいるのを雲で画かれているのを見た。

二月八日。

これは早朝に見た夢です。

いつの間にか私はどこかの学校の中にいるのです。教室に通じる通路や廊下、階段を美しい和服姿であねさんかぶりした美しい女性の方々が、ほうき箒ではいたり、みが磨いたり、床は鏡のように美しく掃除しているのが見える。勿論教室の中も同じように美しく掃除されています。二階へ昇る階段を私はピョンピョンと飛ぶように上った。二階も同様に女の方々が美しく掃除していられる。二階の教室の入口附近と教室の教壇と出入口との間には、

沢山の本や教材が山のように積まれています。

私はこの様子を見て、「新しい世の高次元の学校（新しい地球）への入学の準備は整えり。」と直感しました。

暫くして、私は二階の階段の降り口の手すりにもたれかけてなにげなく下の方を見ますと、下の方から明るい楽しい笑い声と共に、心から明るいうれしそうな男の人達、女の人達（入学する生徒達）が和気あいあいと軽ろやかに、階段を三々、五々と上がって来るのが見えます。

次に掲げるのは、T氏が一九六〇年当時活躍されたあるワンダラーに送った手紙（昭和五年一月）の一部である。

前文略

・「湧玉のマコト」

天の神様の前に立ち、私達は、自分の並み並みならぬ決意を披瀝し、誓って、お許しを得、ワンダラーとして地球の肉体を頂き、使命を果たしに来たのである。

天の神様の前に立った時に持っていた決意、誓いの心、それが湧玉のマコトであります。それは炎のように燃え上ってやまないものであり、湧き上って止まない泉のようなものであります。

ります。

ワンダラーであるか、ないかの証は、湧玉のマコトがあるか、ないかであります。

・「ワンダラーが造るカルマ」

ここでいうカルマは、オイカイワタチとして神様から頂いて来たカルマのことを指すのではなくありません。

ワンダラーが自から造り出すカルマの中で最大なものは、地球の肉体を持つことによって、天の神様の前にて頂いた湧玉のマコトを保持することが出来なくなり、見失ってしまったことを因としてこれにより生み出されて来た諸々の言、行動です。

これがため、修業に走り、悟りに走り、そして世の終わりを待つ心になります。

神様とワンダラーは湧玉のマコトを通じて連らなり、これによって御心を知り、本物を知り、神様の御手足となって働くのであります。

神様の御業は人間の作った法則や宗教知識の中にはありません。この中にあてはめて御業を受け取り、見ることはカルマを造る道であり、まさしく天に対するマコトの欠如であります。これではワンダラーとしての役はなにな一つ果たせないのであります。

ワンダラーは、靈感のままにその時その時の役を果たしつつ、新しい世への道を一一つ積み上げて行くのである。この目には見えないが、神様のみ心のままの道を通り、その道に

地球のすべての方々をお通し出来る大路を踏み固めて創って行くのであります。

この積み上げがなく、どうしてワンダラーの役が突果たせましようか。

「神の国は地のワンダラーが天と共に整えるのである。」

宇宙人が変化を地球に与えるのではない。神様の助けを頂いて、ワンダラーが地球のすべてを整え、整え終わってお願いするのである。

このお願いにより天の神様は地球の変化、世の終わりを起こして下さるのである。ですから、変化によるすべての結果のことはワンダラー自身の責任として、自分の身で受ける心がいます。

そこに、地球のすべてのもの（人類、万物一切のものに至るまで）に対しての涙と愛、思いやりの意識の心が湧き上がります。

変化によって落ちこぼれる人の出た場合、どこまでも、地の果てまでもついて行き、救わずにおかないという責任を持つ心が芽生えます。

ワンダラーには、救うことはあっても、救われる心は必要のないことです。それは、すでに救われてワンダラーとして働きに出て来ているからです。

ワンダラーの役は修業や悟りに達すれば出来るという考えが間違っていることには既にお気付のことと思います。修業や悟りに向う心は大切ですが、ワンダラーにとって必要な事では

ありません。

ワンダラーの真の道は、真に目覚めて、湧玉のマコトで、天の神様のお命じになられたまま、即ちみ心のままに与えられた役を果たして行くことにあります。それがどんな姿形をとろうとも厭いといはしません。

ワンダラーに世の終わりを待つ心があってはなりません。頂いた役を果たして行くだけです。

私達一人一人は頼るところをただ神様だけにおいています。たとえ〇〇さんや〇〇さんが倒れることがあっても、この道は永遠に変わらず、私達はワンダラーとしての役を果たして行くことでしょう。

——以下略——

次は、Y氏が、仲間の一人で長い戦いに疲れ果てて来たあるワンダラーに送った励ましの手紙である。

——前文略—— 先日はいろいろお世話になりました。どうも有難うございました。久し振りにゆっくりとお話することができまして、かつての戦いのこと（一九六〇年当時のこと）、そして今おこなわれている戦いのことなどいろいろ思い、また改めて考える良い機会をもったと思います。起しております。

私達ワンダラーにとってきびしく思える環境、境遇の一切は、やはり天の神様のかけられるクカタカタ（宇宙語、誤ちを正して真の道を示す働き。）ではないかと思えます。我々は、このクカタカタのきびしさを礼儀をもって受け、味わい、目覚めをより深く深くしてゆかなければならないのではないのでしょうか。

以下、最近考えていることや、靈感をもって感じたことなどを書きつらねさせて頂きます。私自身これらのことを書いてみると大変学びになりますので、貴兄がお付合い頂ければ幸いです。

◎ ワンダラーの決心（誓い）について。

・ワンダラーの決心（誓い）というものを軽く考えてはいけません。
 ・ワンダラーの決心（誓い）というものは、多少のことで崩れる（たおされる）ものではない。

・取るか、また負けるか、というときには、必ずこの決心（誓い）が身を救います。
 ・ワンダラーは、この決心（誓い）を天に捧げることによって、はじめて天からテレパシ、靈感をかけていただけるのです。

・今が、取るか、また負けるか、というときであることをしっかりと見すえること。
 ・ワンダラーは、天の神様の前で、役目を果たしますと誓って、命を受けてこの地球へ来

たのである。（思い出して下さい！）

・このときのワンダラーの決心（誓い）というものはものすごいものであって、少しばかりの迷わし、苦しみぐらいで崩れる（たおされる）ものではありません。

・調子良くいつているときでも苦しいときでも、常にこの決心（誓い）を思い出し、この誓いに立ち戻って（初心に還^{かえ}って）まわりのすべてのこと、自らのことを考える。

・この決心（誓い）、これが即ち湧玉のマコトであります。紅^{くれない}のマコトであります。

・この決心（誓い）に常に立ち戻ることによって、「岩をも通す信念」が形成される。

・精神的高揚感是他からのライマカタ（テレパシーや人々の語る言葉、おだて等々）によっても容易に生じるが、この決心（誓い）は自らの内より湧いてくる天の神様への誓いである。（純粹といえればこれほど純粹なものはない。）

・精神的高揚感がなくなり、心身共に苦しみのどん底にあえいでいる時でも、この決心（誓い）だけは残る。また必ず残さねばならないものである。

・この決心（誓い）を捨て去ると、ワンダラーとしての働きは全く出来なくなる。

・この決心（誓い）をなくす時は、自分から捨てるのである。即ち、自らの我の心がこれを捨て去るのである。

◎ たかるカルマについて。

- ・ たかるカルマが我の心を芽生えさせる。
- ・ また、我の心がたかるカルマを生み、吸い寄せる。
- ・ たかるカルマは決して心の中に入れてはならない。
- ・ たかるカルマは我の心にとっては都合の良いものである場合が多い。したがって、我の心は何物も省りみず、ただひたすらにこのたかるカルマを心の中に呼びこもうとする。
- ・ ワンダラーは、いかに苦しくとも心に防波堤を築いてこのたかるカルマを心の中に侵入させないようにしなければならない。

・ 我の心とたかるカルマが呼び合い求め合う力は、想像を絶する程の強力なものである。また一見すると自然な成り行きに見えるので、これに気付くには大変な努力を必要とする。

・ 一たんたかるカルマを心の中へ入れてしまふとその人の意識の心はたかるカルマそのものと化す。(肉体的アナロジイでいえば、余り良い例ではないが、ヤクザが肌にイレズミを彫ってしまったのと同じ。)

・ ワンダラーは、構えてこのたかるカルマを心の中に入れてはならない。

・ 一たんたかるカルマが心の中へ入ってしまうと、そのたかるカルマは大変な苦しみを通過しなければ心の外へ再び追出すことは出来なくなる。(イレズミを除き去るには皮膚を

はぎとらねばならない。)

この手術はクカタカタによってなされる。すなわち、クカタカタはたかるカルマに必ず多大の苦痛を与えずにはおかないものである。ということとは、つまり、たかるカルマそのものとなっている意識の心に無限の苦痛を与えずにおかないものである。

・ 心にいくら防波堤を築いてたかるカルマをふせいでも、心の中にそれを呼び込む我の心があつては何にもならない。

・ この我の心は、すべてを天の神様にお任せする(離託) ことよって消失する。

・ 天の神様の前に立って誓った決心を思い出すこと(湧玉のマコト)と我の心を天の神様に離託することとは、表裏にみえてひとつのことである。

私は貴兄が渦巻くたかるカルマに幾重にも取りまかれて、しかもそれらを懸命に心の中に入れないようにと防いでおられる姿には深く心を動かされました。テレパシーや霊感がなくなっても、生活苦、病苦その他の困難がのしかかっても、この点においては貴兄はまだマコトを失っておられないと直感致しました。

しかしたかるカルマに取りまかれて身動きの出来ない状態では、新しい世界を作ってゆくワンダラーの役は果たせません。また、たかるカルマの語る声を聞くまいとの一心のあまり心のフタを閉ざしてしまつたままでは、正しいテレパシーや霊感がきてもそれらを受けつけ

ず、はねつけてしまおうという礼儀のないことになりました。（貴兄がワンダラーの役を捨てない限り、天の方々は貴兄のまわりで語っておられるのです。）

あるいは身動きのできないままに、『かようマコト』もどんどん失ってゆくこととなるでしょう。

したがって、たか、かるカルマは必ずこれを一扫してしまわねばなりません。そのための根本的治療法は、我の心を完全に無くしてしまうことが必要と思います。我の心が少しでも残ってればそれは再びたか、かるカルマを呼びよせて、状態は前と同じになります。

ワンダラーの進む道にはいろいろな障害がありますが、その最たるものは我の心であると私は思います。これは、まさか自分にはないだろうと思っても実は油断すると次々と生じてくるもので、見つけ次第次々とこれを消してゆく戦い、——これは、ワンダラーが一生続けてゆく戦いではないかと考えます。

我の心を消すには、これをよく見すえて、天の神様にお願ひして消していただくのである。——このことを、私は最近の経験で知りました。我の心を見すえるまでは大変苦しい道ですが、一たん見すえて理解してしまえば、お願ひすることにより、天の神様は完全にこれを取り去って下さいます。（私の場合、その瞬間、フツと重圧が消えてウソのように体が軽く楽になりました。）

『天の神様は苦しみを与えられません。』

私はこの言葉は真実であるとその時痛感致しました。

◎ カルマについて。

・ワンダラー（オイカイワタチ）は地球のカルマを解くために地球に来たのである。（オイカイワタチの使命の根幹）

・したがって、ワンダラーの受ける苦しみが地球の人々の受ける苦しみよりも軽いということはありません。

・ワンダラーは、地球の人々が苦しみを受けるよりも前にその苦しみを受けて、そのカルマを解くのである。このことが地球のすべてのカルマにわたってなされない以前にはレタマヤ（神の大愛）の世の終わりは来ない。（レタマヤの世の終わりがこないということは天の神様を裏切ることです。ワンダラーとしてこれ以上の苦しみがあるでしょうか。この苦しみに較べれば、カルマを受ける苦しみなどもの数ではない筈。）

・カルマを解くための第一段階は、そのカルマに気付く、カルマを見すえることである。苦しみの余り、カルマを見すえない前にそのカルマを解いて下さいと天の神様にお願ひしても、その願ひは天に届かない。

・ワンダラーがカルマを解く（天の神様に解いていただく）のは、その肉体と意識の心を

もってするのである。(地球の肉体を着ている根本の意味。)これは、はっきりと意識の心で納得のゆく形で行われる筈のものである。知らぬまにカルマを解いていたということはありえない。

・カルマを受けるを恐れず、受けるカルマを解かざるを恐れよ。

◎ 愛について。

・マコトの愛は、身を挺する愛である。

・みせかけの愛は、たかる、カルマに身を任せるのを許す愛である。

・マコトの愛からクカカカが生まれる。

——以下略——

続いて、Y氏は、次のことを語った。

「テレパシーを受けるワングラーの役について。」

ワングラーの役は、決して固定されたものではない。それは、事態の展開や当人の自覚と目覚めの深さなどによって変化してゆくものである。いかなる役をいただいても、我々は、湧玉のマコトに立って、礼儀をもってそれを果たしてゆかねばならない。我々はこの決意をかつて天の神様の前で誓って、この地球に降りて来たのであった。

ワングラーが天の方々からテレパシーを受ける場合、このテレパシーには次のふたつの意味が含まれている。

(1) 地球の肉体を持ったワングラー達(当人とその仲間)に天の方々の言葉を伝え、あるいは事態の進行を判りやすくし、また傍証する。(直接的意味)

(2) テレパシーを受けるワングラー自身を目覚めさせ、その人の目覚を深めるための手助けとなる。(間接的意味)

(1)の意味はワングラー全体にかかわるものであり、判りやすい。しかしそれを受ける当人にとって本当に大事なのは(2)の意味である。

地球の肉体を着たワングラーに天の方々がテレパシーで言葉を伝えるということは、宇宙の法則のギリギリの限界のことである。(テレパシーを送るということは、明白にひとつのライマカタとなるからである。)天の方々は、なぜそのような限界ギリギリの行為をされるのか?、むろんテレパシーの内容を伝えたいということはあろう。(しかし、これのみ人内容を伝える√ならば、靈感という手段もある。)だがむしろ目覚めの足りぬ人や自覚の浅い人に、もっと目覚めよ、深い確信を持って、と勇気付ける意味で、あえてテレパシーで言葉を贈られる(語る)のである。したがって、自分がテレパシーを受けられるということを、何か特殊な才能がある、自分は選ばれた人間であると解釈するのは間違いで、極めて礼儀のな

いことである。また反対に、自分は単なる通信機械にすぎないのだ、自分は単なるスピーカーとして天の方々の声を皆に伝えればよいのだと考えるのも間違いで、同じく極めて礼儀のないことである。

天の方々が地球の肉体を着たワンダラーにテレパシーをかけられる時は、いつも宇宙の法則をおかすかどうかの瀬戸際に立っても、それでもそのワンダラーの目覚めのためにあえてテレパシーで言葉を送られるのである。したがってそのことをよくわかり、礼儀をもってテレパシーを受けねばならない。そうすれば天の方々の私達に対する愛がよくわかり、我々はより深い自覚へと到達する。反対に、この礼儀を欠いたままテレパシーを受けると、テレパシーを受けることによってワンダラーはカルマを作ってしまう、道を誤ってしまうことになる。すべては、心の礼儀をもって、すなわち湧玉のマコトに立ってテレパシーを受けるか否かにかかっているのである。

したがって、ある時期沢山のテレパシーを受けていたワンダラーがそれ以後殆んどテレパシーを受けることがなくなるという場合には、二つのケースが考えられる。即ち天の方々が①その方の自覚と目覚めは深いと思われたとき。

②これ以上テレパシーを贈ると、心の礼儀のない受け取り方によってその方がカルマを作り道を誤ってしまうと判断されたとき。

①の場合ならば、テレパシーを受けることがなくなっても何も心配することはない。今ままでテレパシーを沢山贈って下さった天の方々に深い感謝を捧げて、靈感のままにマコトの道歩んでゆけばよい。

②の場合には、当然自分の心の礼儀のなさを深く反省せねばならない。そして天の方々にお詫びし、自分はこれからマコトの道を進みますと宣言しなければならぬ。(これがなされず強いてテレパシーを受けようとするところから、たか、カルマの語る言葉^{テレパシー}を受けることとなるのである。)

いずれにしても沢山のワンダラーの目覚めと自覚の程度により、又まわりの状況により、テレパシーを受ける役は次々と変わってゆくであろう。そして我々はそのことに関してカルマを作る必要は全くないし、また絶対に作ってはならないのである。

以上に述べられた以外にも、この日(二月一日)は「ワンダラー初心に帰る」について多くの方々が語り合われたのであった。

後日、参加されたワンダラーの方から次のような手紙が寄せられた。

岐阜県のH・I氏より送られた手紙。

去る二月一日の集會に参加させて頂き、「オイカイワタチ」別冊(三)を頂いて帰り早速熟読しました。脈々と波うつ眞の道を肌と感じ、以前にもまして感激と喜びに満ちて読みました。今までの理解しがたい事柄も、今回は水が流れる如く心の奥底まで入って来ることがハッキリと判りました。燃えるような大きな感激と、力強い鏝球王国に私は入り、ふれた思いで一杯です。

別冊(三)を一読し終わった夜、劇的な夢を見て喜びにあふれています。それは鏝球王国建設の方たるワンダラーの働きについての啓示であると思いました。

——雪が積っている道を、身も軽ろやかに、ころがるような早さで私が走っていました。しかも少しも疲れを感じませんので不思議な思いでいました。

すると、道の角のところに一人の男が立って私を呼んでいました。私は立ち止まって「なんですか」と聞いた。その人は「助けて下さい。」と指をさした。そこは道の端で、電柱位の大きな丸太杭を杭打機で打ち込んでいる途中の状態であった。その杭の下に穴が空いていて、一人の若い男が片足をその中に突込んではさまれている。一生懸命に抜こうとしているが、ビクともしないので足を抜くことが出来ず困っていた。

私はそれを見て、この丸太を切り倒さなくては駄目と判断して、そこに置いてあった鋸で丸太の途中から切り込んだところ、不思議な事に、すでに丸太の径の十分の九ほど何者かに

よって切り込んであった。

その時、私は、これは天の神様が切って下さったのであると直感した。私は少しの労力で十分の一を切り、丸太を倒したのであった。

しかし、その瞬間、上にある杭打機の重い重いハンマーが大きな音を立てて落下した。この若い男の足は完全につぶれてしまったと思い、祈る気持でその若い男を見た。ところがハンマーは少しはずれた位置に落ちて、若い男は前の状態と変わりませんでした。しかし、この大変重いハンマーを取除くには私と前からいる男の二人だけでは全くどうすることも出来ないのです、困ってしまいました。

すると、どこから集まって来たのか、大勢の人達は元気な掛声で、勇ましく重いハンマーを取除く作業をしてくれた。しかし足場がとても悪いので思うようにはかどらず、お互いに慎重に取扱おうと呼び合いながら作業をしていたが、あまりにも重いので、このハンマーは大きな音を立ててずり落ちました。下にはこの若者が身動きできずにいるので、多くの人はハンマーが若者を直撃したかとい瞬冷あせをかきました。しかし奇跡的に若者は直撃をまぬがれて元気でした。そして片足は杭からも離れて助かりました。

加勢に来た大勢の元気な人達は小踊りしながら、喜びながら帰って行きました。私はこの人達は何者だろうかと思つた時、この人達は「万たる、生まれしワンダラー」であると判り

ました。

助かった若者は身体を振わせ、躍動させて喜び、天に向かって手を合わせ、天の神様に感謝していました。

私はこの劇的光景を見て、万たるワンダラーが誕生したと思いました。そして心の感動をおぼえながら目が醒めました。

目を醒したあとしばらくの間、涙がとめどもなく出てたまりませんでした。鏝球王国建設の姿を、この夢を通して啓示して下さった天の神様、サナンダ様、神々様の深い愛にふれた喜びで一杯でした。

鏝球王国の建設は、天の神様、サナンダ様、神々様のお守りとお導きを頂いて、ワンダラー全員によってなされるのであることに気がきました。

——以下略——

続いてY氏からの手紙。

先日（二月一日）の会合は、私個人にとっても（またおそらく他の方々にとっても）大変に有難いものであったと思います。まさしく時期を得た集まりであったと感じました。

私は、前の手紙でお知らせしましたとおりに去る九日に我の心を捨てる事が出来たものの、正直な話、一日の会合までは、たかるとカルマの名残りかどうか、まだ完全に立ち直ったと

はいえぬ状態であったようです。それが、一日の会合でお話を聞いているうちに、今度こそ完全に振り切れました。（「初心に帰った気持で……」というお話、これは、意識の心を通して魂にまで直接響きました。）

私は、会合から帰り、本日のいろいろなお話しをふり返って、初心に帰るということは、すなわち、再び天の神様より使命をいただいた時の、あの燃え上ってやまない「紅の誠」に帰ることであると解って、天の神様に対して、決意を新たに、使命を果たしますと誓いをいたしました。

そのとき、私は、これはワンダラーのマコトの魂が天の神様に誓うのであって実に変なことであるということがハッキリと自覚出来ました。私は今まで、〇〇さんからワンダラーの御魂というのは実に偉大なものだとも何度も聞いていましたが、実感としてピンと来たことではありませんでした。しかしこのときは、この誓いを天の神様に対してなすことができる魂というものは並大抵のものではない、ワンダラーの御魂というものはものすごいものであるということがハッキリと判りました。

願わくば、肉体と意識の心がこの魂の誓いを忘れ、迷うことがありませんよう——。

現在には以前カルマを解いていただいた後のようなスッキリとした気持です。二月一日の会合は、私個人としてはどうもカルマを出す儀式となったような気がしております。

第五章 鏢球王国建設の足蹟を創る

―万たるワンダラー（本の気）誕生―

昭和五三年二月十五日。

未明、Mさんは次のテレパシーを受けた。

「あなたはWさんと共に、これからコツコツと一つ一つの足蹟を創って行くのです。」

二月一四～一六日の三日間、W夫人は連続して次の霊夢を見る。

毎日（三日間）沢山の人達が次々とW夫人の前にやって来て次のようにいった。

「地球は変わりつつありますので挨拶に来ました。」

二月一八日。

W夫人は眠りにつく前に、「これから私はどのような道を進んだら良いだろうか。」と静

かに考えていた。午後一二時五〇分、いつもの神様のお声を聞いた。

「貴女の前途は未だ多難です。しかし、じっと耐えることが出来るでしょう。」

午前三時五分（一九日未明）、次の霊夢を見た。

畑に沢山の白菜が出来ている。その白菜の脇からまだ土をかぶったタケノコがモコモコと一杯に出来ている。これを眺めながら夫人は、真冬まふゆという時節はずれにタケノコとは不思議なことであると思つてその中の一つを掘つて見た。その時、天より声がした。

「これは若々しい万たるワンダラーの誕生するところです。」

二月二一日、午前三時、Mさんは次のテレパシーを受けた。

その時、実にしっかりしたお声で、しかも厳しい口調で、神様が次の通りおごそかにハッキリと宣言されたのを聞いたのである。（この宣言は数回繰り返された。）

「地球は終わりました。古い地球は終わりました。古い地球は終わったのです。」

W氏はこれ聞き、次の靈感を受けた。

「これからは新しい地球建設のことだけを考えて、カルマを作らぬよう、鏢球王国完成に向かつて進みましょう。」

午前五時、次のテレパシーを受けた。

「我慾のカルマの手助てたすけをせぬことです。」

二月二三日、午前三時頃、W夫人の霊夢。

夫人は寢床の中から夜空を眺めていた。小さな美しい水色の玉が、星空の左の方向より中心に向かって流れるように進んで来る。その玉は天空の中心でパッと割れた。すると天空に能登半島が現われ、続いて北陸中部地方が現われた。そして、ここを境として左と右に日本列島がかたち造られて行った。暫くこれを眺めていると、能登半島が錦鶏の頭と首に変わり、知多半島と渥美半島が錦鶏の足となった。そして、日本列島は全部が、羽根を上げた錦鶏の明瞭な姿となったのである。この光景は暫く続いたが、やがて錦鶏は消えて丸い大きな水色の玉に変化した。(この時、夫人は地球を意味すると思った。)この大きな玉は夫人の前まで落下して来たが、とたんパッと割れて、中から諸々の動物達が出て来た。さらに、この動物達と一緒に、飼い主と思われる女性の宇宙人も出て来られた。

動物達はこの女性の手から離れて夫人のもとにまつわりついて来た。動物達は夫人の傍から離れようとしなない。ライオンは甘えて夫人の膝ひざから離れようとしなない。夫人はこのライオンをだき抱えているのであった。このような光景が暫くの間続いた。

この時、宇宙人の女性は次のように語ったのである。

「これが今の地球(新しい地球)です。」

二月二四日、W夫人の霊夢。

あるところに、立派に出来上がった土台がある。そして、その土台には素朴であるが美しく素晴らしい家が、多くの若い男女によって築かれて行くのであった。この若々しい男女は、「新しい地球を建設しましょう。」とお互いに語り合いながらこの家を組み立てて行くのであった。

夫人は、この建設中の美しい輝く家は、創られつつある新しい地球であり、若々しい沢山の男女は、生まれし方たるワンダラーであると思った。

このワンダラー達は夫人宅で宿泊し、ここから建設の現場に通っている。夫人はこの若々しい沢山のワンダラー達の衣食住の世話に大多忙であった。(この建設がなされている現場は、小高い山が廻りにあり附近は木々が一杯に繁る丘陵地であった。)

やがて、この素朴であるが美しい輝く家が完成した。そこで夫人は雲に乗り、この出来上がりに具合を上から見て廻ったのであった。

続いて、夫人がワンダラー達の身の廻りの世話で天手古舞している最中にMさんが訪れて来た。

「北海道、有珠山での儀式に出かける時間です。」とMさんはいった。

二月二十五日。

午後一二時五〇分、北海道有珠山の^{おおうすやま}大臼山神社にて次の儀式が行われた。

「万たるワンダラー、本の気”誕生の儀式”

祈り。

天の神様、サナンダ様、神々様ありがとうございます。

有珠山の神様、大臼山の神様、地の神々様ありがとうございます。

ここに天と地が結ばれて、万たるワンダラーの「本の気」を誕生して下さいますようお願い申し上げます。

誕生しました万たるワンダラー「本の気」を、新しい地球、鏗球王国の中心、湧玉の地、沖繩ひめゆりの地に移して下さいますようお願い申し上げます。

新しい地球、鏗球王国におきまして、万たるワンダラーに生き生きと生命力が満ち溢れますようにお守りとお導き下さい。お願い申し上げます。ありがとうございました。

三月二日。

夜半、Mさんは、この一ケ年余りの間に行われて来たワンダラーとしての数多くの役、様々な心の変化などを思い出していた。新しい世に変化して行くさまとこれまでの進展、それらに対する喜びもあったが、同時に疲れと、古い世の心との葛藤^{かっとう}などがあった。

Mさんは少々疲れたと思い、次のような祈りをした。

「これから私に安らぎを与えて下さい。」

すると次のテレパシーを受けた。

「あせらないで、ゆっくりと天の神様を祈りなさい。」

三月三日。

午前一時頃、Mさんはなぜか目を醒した。意識はハッキリしているが、それでも現実と夢との境の中にいるようである。眼前に、うすぼんやりとしたお姿ではあるが荘厳にして偉大なお方がお立ちになられているのが明確にわかる。

この時、Mさんは、このお方は「天の神様」である、と心の中で強く思った。そこでMさんは、そのお方に問うた。

「天の神様ですか？」

するとそのお方は、

「そうです。」
 とお答えになられ、続いて二言、三言お語りになられた。しかしその内容は、どうしても記憶にとどめることが出来ず、忘れ去ってしまったのである。

三月五日。

W夫妻とMさんは、Y画伯夫妻の案内で近江神宮、日吉神社（日吉大社）に詣でた。去る二月一日、「これからコツコツと一つ一つの足蹟を創って行くのです。」と天からいわれているが、これも鏝球王国の足蹟づくりの一つだったのである。

実は、昨年（昭和五二年）一〇月のある日の未明、Mさんは「日吉神社に案内します。」というテレパシーを受けていた。しかし私達はこの意味を解せず、当時不信に思ったりしたため、このことは心から殆んど離れ去ってしまったのである。ところが去る二月一日、Y画伯がW氏を訪れて、「日吉神社にWさんを案内したい。」と突然に申し出られたことにより、これが実現したのであった。（天はこのようにして、私達の果たすべきお役を教えられ導かれていることが更に良く判る。）

祈り（要旨）。

本日、ここに私達は、天の神様のお導きにより参りました。

新しい地球、鏝球王国の建設、完成成就が天の神様のみ心のままに正しく出来ますよう、お守り、お導き下さいますようお願い申し上げます。

三月八日、W氏とMさんは、高知空港に向う途中、機中より讃岐富士を眺めて驚いた。去る一月四日、金刀比羅宮より見た時と全く同じく、讃岐富士の左右前後に富士山の形をした山が次々と現われては消えて行くのを再びここで霊視したのである。同時に、天空には物凄いとしか表現しようのないほどの沢山のビームが現われて、私達にふりそそいで来た。

同日、高知より松山に向かって、バスで四国山脈を横断した。Mさんは、このバスに乗る少し前より全身に異様な霊的苦痛を受けていた。この苦痛は、道後”に着く寸前まで、約三時間半くらい続いたのである。Mさんは、バスの中で、激しい苦痛を全身に受けながら目をつむり静かに考え続けていた。この時、

「四国にあるこれまでの悪いカルマ（永い歴史の流れの中で、四国に集められていた数々の悪いカルマ）を全身で受け、これを運び、浄めるのである。」

と靈感を受けたのである。さらに四国の地図が現われ、そこに円が画かれたのを霊視した。四国山脈の山々を眺めていたW氏は、異様な感情が外からおしよせて来るのを感じた。それは大変に凄いものであったので、これを感じ取りながら、「なんであろうか？」と考え続

けていた。すると、

「真黒いカルマを私達は全部すくい取って行くのである。これは凄いカルマだ、これは凄いカルマだ。」

と口の中で彼はつぶやいていたのである。

Mさんの全身に受けている激しい苦痛のことを知らないW氏は、Mさんは疲れて眠っているもの思っていた。

三月一〇日。

金刀比羅宮に詣でるために普通寺に泊ったその夜半より風雨は次第に激しさを増し、未明ころからは暴風雨を思わせる程となった。この強い雨と大きな波が打ちよせるように連続的に襲う激しい突風は、一〇日の午前八時半頃まで続いた。未明、W氏は次のテレパシーを受けた。

「野分の雨と風で净めます。」

やがて午前九時頃になると、雨と風はウソのようにおさまり、一片の雲も見当らない程の晴天となった。

それから金刀比羅宮に詣で、「鏝球王国建設と成就のお願い」のお祈りをした。ここま

たW氏とMさんは、このようにして一つ一つの足蹟を創って行くのであるということ再認識したのであった。

お祈りが終わると本殿の前にある展望台より讃岐富士を眺めたが、そこで再び讃岐富士の前後左右に富士の姿をした山が次々と現われて消えて行く姿を霊視したのである。この時、Mさんは次の靈感を受けた。

「新しい世の地の神々様がお集まりになっておられる。」

三月一二日。

午後四時頃、Mさんは南の空に浮かぶ不思議な雲を見た。その雲は非常に沢山の人間の顔によって出来ている。これは約三〇分以上も続いて目撃された。これを見たMさんは、「万たるワンダラーの誕生を意味する。」と判ったのである。

その時、西の空に、いつもどこか違いを感じさせる特別に美しい太陽が輝いているのを見た。この時、次の靈感を受けた。

「沖繩に行く時が来た。」

同時に次のテレパシーを受けた。

「沖繩に行く日を決める時です。」

この日（一二日）、来る四月九日、午前八時、沖繩ひめゆりの地、即ち、新しい地球の湧玉の地にて、「湧玉の儀式」（万たるワンダラー「本の心」と「本の気」が結ばれて誕生の儀式）を行うことが決定された。

三月一三日。

午後六時三〇分、W夫人は天空に中国地方の地図が雲によってはっきりと画かれるのを見た。西方の空（九州にあたる位置）には、円盤の形をした雲があり、その上に月が三日目を横にしたように美しく輝き、さらにその上に桃の実を乗せたような形をした美しい天のしるしがあった。

午後七時四〇分、Mさんの見た天のしるし。

天空に、九州、中国、四国の地図が現われ、その右端に「外国の地図」と心の中で判る地図が現われた。しかし外国の地図については、ハッキリと理解出来なかったので余り心に止めなかった。

四国の地図の「琴平」の位置よりやや下に、丁度金刀比羅宮を受けるように、三日月を横にしたような美しい月が輝いている。

W夫人もMさんもこの天のしるし^しが語る意味を考えたが、この時には理解することが出来

なかった。

三月一五日。

夕方、W夫人は、輝く美しい月の中に「天」の文字が画かれているのを見る。夫人はこの意味について考えをめぐらしながら眠りに入った。すると次のような霊夢を見たのである。

大洪水となり非常に大勢の人達は波にのまれて沈んで行く。夫人も大波に吞まれんとした時、太いロープが目の前に現われた。男性の声で、「これにしっかりとつかまりなさい。」というのを聞いたので、そのロープにしがみついた。夫人は、押しよせる大洪水と大波に身がもぎ取られそうになるので、必死にロープにしがみついていた。しかし大きな波との長い時間^間の戦いに疲れ果てて意識を失いそうになる。夫人は、天の神様に祈り続けていたが、次第に意識はもうろうとなりついに気を失なった……。

ふと意識が目醒めた。夫人はある処にいた。そこには沢山の人達がおられた。その人達は実に質素な衣類を着ている。全員が跣^{はだし}で一生懸命に働いている。それは清楚な美しい姿であった。夫人は、その中の一人の方に問うた。

「ここはどこですか？」

するとその方は答えられた。

「ここは神の国です。」

「ここにはお金もなく、土を耕して皆が働いて生活するのです。」

夫人が、「神の国とはどういう処ですか？」と問うと、そのお方は、

「それは天です。」

といわれた。夫人は「天」と大きく声を発したが、その時この夢から目を醒ましたのであった。

三月一六日、未明、Mさんは次の夢を見た。

いま住んでいる家とは全く違った、大きくて広々としているが極めて素朴なつくりの家にいる。太い柱も床や廊下も黒々としてピカピカ光っている。

そこへ、背広を着た二人の紳士が訪れた。清掃会社の清掃員とその社長の二人である。

社長は、自からは手みずを下さないが清掃員を激励して家の便所をどんとと清掃して行く。それも徹底的にである。水を沢山流し、底にへばりついた汚物もゴシゴシと削り取り、全部を完全に清めつくしてしまうまで水で清掃して完了した。それは実に徹底した完璧な清掃であった。これを見ていたMさんは、地球のカルマの清掃もこのように完全になされるのであると思っただのである。

同日（一六日）、未明、Mさんは次の靈感を受けた。

「万たるワンダラーが誕生して、この方々が育ち、使命に目覚めて逞たくましい働きが始まるまでにはまだまだ多くの困難がある。」

三月二一日、W夫妻、Mさんは、Y画伯夫妻の案内で、「奈良、大神神社おのみわに」詣でる。

新しい地球、鏝球王国建設の一つ一つの足蹟は、このようにして創られて行くのであった。

第六章 古い世の卒業式

三月二十六日、ワンダラー二十数名集まり、次の儀式が行われた。

「古い世の卒業の儀式」

この日の儀式において、ワンダラーの方々がそれぞれ次のようなことを語られた。(要旨のみを記す。)

——新しい世の意識について、T氏は語った。——

● 離託。

新しい意識（神様のみ心にある真実のもの）が地球に発見され、人々は古い束縛から離れてゆく。これが離託であり、新しい世に移る心の戦いでもあります。かくして人間は神性を呼びもどし、地球を新しい世に引き継いでゆくのであります。古い地球との縁えんとゆかりを絶つことでもあります。

● 鏝球王国の意識。

それでは、新しい意識とは何なのか……。

天の神様の御心とサナンダ様の思いのままを頂いて、天の沢山の方々と地球のワンダラーとで共に新しく作られました鏝球王国の意識であります。

そこは、自我の全くない、天の神様とサナンダ様と各人が一つにつながった、湧玉のマコトの国であります。

湧玉は、マコトは、神様の宝であります。この宝を一人一人が神様より頂いて歩む永遠の道は、神様の道でもあります。

マコトのわかる魂には、教条、いましめ、信条などといったものは影と失せて行くのであります。

神様の御心のままの生活とは、素朴、質素、清楚にして切り目、切り目のある、礼儀と節度、敬虔をわきまえた生活の心であります。

これはマコトが判りますと自然にわかるものでありますが、古い地球での表現で分類して見ますと次のように説明づけられます。

(1) マコトの心（神様に全託する心）。

(イ) 頼るところを神様に置く。（すべて神様が中心に立たれる。）

(ロ)湧玉のマコトを持つ。

(ハ)天に、地に、まわりに、自分に、マコトをつくす。

(2)調和の心。

(イ)万物を愛する心。

(ロ)ノンキさを持つ心。(浮いたノンキではありません。)

(ハ)自然の心。

(3)生活の心

(イ)永遠の生命を持った自覚。

(ロ)生活の場は学びの場であり奉仕の場であるという自覚。

(ハ)心の礼儀、節度、敬虔を持った生活。

(ニ)神様にお任せした足りる心

この新しいマコトを知った心と意識の生活は、今までと違って安らぎのある心が変わっていることに気付かれることと思います。

すでに私達は鏝球王国に移って生活しているのであります。

続いてS氏は次のように語った。

——新しい離託のために。——

(1)新しい世をうちたてるための根幹の思想。

一九七四年二月二六日、「無の世界」における「祝事いわいごとの儀式」が終わり、新しい世の誕生を迎える段階に至りましたが、このあとの課題として、どのような世をつくるべきであるかを一人一人が真剣に考えたときがありました。

その大前提として、魂の永遠の進化という観点からこれを把え、すこやかに生長していきける世のあり方を模索しました。

そして、「寒冷の戦い」というものがありました。この助けを受け、未来のあるべき真まことの原型、つまりホンモノをさぐり、求める働きがありました。

これは、新しい世の意識、正しい本物の素材選びのときであり、新しい世の根底の思想、考え方、あり方の、地球としての選択のときでありました。この中から、新しい世に必要なもの、不要なものはなにであろうか……。これを毎日くり返しくり返し問い正したものでした。

「寒冷の戦い」で得られたのは、物、形、ルールに根元を置くべきでない……。という点に気付いたことでした。これらのものは、極限状態にはもろいものであると知ることでした。これと同時に永遠に芯となるべき素材の選択がありました。この素材が非常な慎重さで選ば

れていきましたことは、皆さんすでに御存知のことであろうと思います。

私達が選んだ素材は、天の神様の精髓せいすい、あるいは宝と呼ばれるもので、私達はこの至宝をいただきました。そして、古い世のものをすべて投げ捨てて、全くの無から出発させていただくことを願ったのであります。たとえ百分が一にもよいと思われる遺産が古い地球にあるうとも、まつわりつく古い思い出を断つためにも、すべては始めから、新しい根本から出発すべきであると理解するに至ったのです。

このようにして、混り気の全くない新しい世をつくる働きが始まったのであります。

※この点に関しては、理解を充分にお願いしたいと思います。これを

充分に理解していただかないと、新しい世の実感と理解が雲の彼方のものとしてしか思えないことになるからです。

私達は、その後の「無の世界」の戦いを通じ、全力をつくし、その新しい世、鏖球王国の基礎造りを続けていったわけです。そして、新しい世は、「無の世界」「霊の世界」「たましいの世界」で創られ、ついに「形の世界」に入りました。「無の世界」でつくられたものが、今は形となり、出来上りつつあります。すでに出来上っている「無の世界」の基盤にふさわしい「形の世界」を私達はつくってゆくわけです。

私達に今もとても大切なことの一つは、新しい世の根底をより判りやすい形で示し、新しい意識を積み上げ、深く広く進めていくことであり、もう一つは、新しい世を担う「万たる新しいワンダラー」を育てていくことであります。前者については今まで続けてきたところですが、後者はほとんどこれからです。

新しい万たるワンダラーといえども、決してすんなりとマコトの道に歩める方々ばかりであるとはいえません。持っている身体は私達と同様に古いものでしかないからです。古い世のものがしみ込んでいます。そういった面での状態としては、私共と同じであるといえましょう。したがって私達がよく新しい世に入りきらねば、当然その方々も入りきれないでしょう。

まず、私達が、今、乗り越えねばならない道は、古い世のものに対する依頼心をここでキツパリと取り去り、新しい世の自分として生まれ変わることです。これが出来ない、これからのワンダラーの役は果たせないでしょう。

新しいワンダラーの方々の進むべき道を示せるのは、またこの方々と共に新しい世をうち立てられるのは、生まれ変わったワンダラーのみであります。

万たるワンダラーは生まれ変わっています。私達もそうあらねば彼等については来ますまい。このように理解して、これから進んでいただきたいと考えます。

(2)ワンダラーの古い体について。

・私達の身体は、骨の芯まで古い世のものであります。
 ・考え方、行動も古い世のもので満たされ、古い世の行き方に流されて、新しい世の歩み方を致しません。

・古い世のものが詰まった体は既にポロポロで、今にも壊れそうになっています。皆さんがたは古い世の体が壊れそうになっているのを心の底で知っていて、壊れることを死と重ねて怖れています。古い体の死を怖れてはなりません。死ではないからです。

・古い世のワンダラーの体は特に壊れ、モロイものとなっています。この体の補修を古い世のもので行おうとしているのをみかけますが、これは間違いであります。過去のカルマを再び持ち出して身につけるな……ということであります。

・私達は、新しい世に働くために生まれ変わらねばなりません。生まれ変わるためには、古い世のものを脱ぎ捨てねばならないのです。

捨てるため躊躇してはなりません。決意し、決断するのであります。

(3)捨てるべきもの。

・鏝球王国建設の理念からして、先程いきましたように、古い世のものと新しい世のものをごちゃ混ぜにして考えるはなりません。もし新しい世の考えがまだ足りないと思えるなら、新しく考え加えていただければよろしい。だが古い世のもので補ってはいけません。(私の

感じでは、今はすでにこの第一段階は終わったと考えます。)

・新しい世のものは、幾万年を経ようが間違いの道に進んだり、また間違いの道に他を誘い込むおそれのないものであらねばなりません。

・生活の中にあられるもの、耳に、目に、体に、心に触れるものの中に、新しい世のものとしてながあるか……と考えて下さい。たとえ新しい世のものであると考えられてもよく考えて一つ一つ整理していくべきであります。自分で考え、自分でやるのです。

新しい離託への道には、これがなされねばなりません。ともかく、全部捨てるのであると思っして下さい。

(4)再出発。

・私達は再出発をしなければなりません。

・この新しい世をつくる仕事は、新しい世の精髓を考え、正しく育てていくことにあります。一見おもしろ味のない、厳しくもあり、厳粛な、新しい世の根幹をつくる働きが続いているのだということを理解して、真剣に歩んでいって欲しいと要望します。

・古い世から新しい世への変革の儀式は、着々と進行しています。このことを静かに考えて、そのときそのときの意識と心を整えていって欲しいものと考えます。

・このためには、古い衣をつぎつぎに脱ぎ捨ててゆかねばなりません。今までの衣を脱ぐ

ことには大きな抵抗があるかも知れません。でも脱がざるをえないと決意して下さい。この決意をして歩を進め得る人こそがワンダラーであります。

・決意して、更に新しい離託をされることを本日ここに望むわけです。これがなされて始めて新しい世のワンダラーとなり、今後のさまざまの役が果たせるようになるのです。

・もう一度、新しい世に飛び込んでいただきたい、生まれ変わっていただきたいと願う次第であります。

(5) 新しい大きな離託について。

・私達には、古い世をのり越え離れるための、更に大きな決意と大きな離託がいます。

・このことは次のように説明いたしましょう。地にいる者としての地のワンダラーがその中を抜け出ることをしてみせて、つまり道を開いてこそ、あとに続くものが続いて来られるのです。これがワンダラーの役であります。

このモデル、つまり見本を天地に示して、天は始めて地に形の働きを進めることができるのです。

・すなわち、私共が新しい世に心身共に移り変わってこそ、天の神様は、新しい世の「誕生した方たるワンダラー」を新しい世の建設のための働きに開放されるのであると考えます。勿論、新しい世への形の変化もこのことが前提条件であります。

・皆さんの中の一部には、身に多少のカルマが残っていても、離託が出来なくても、天のクカタカタ（誤りを正して真を知らず働き）である形の変化を受ければその時には真剣になるだろう、そしてその時こそすべてを捨てればいいのではないかと秘かに思っておられる方がみえるのを知っています。いわゆる大変化待ちというやつです。しかし、この思いは古いカルマを持った元ワンダラーの考えです。これではワンダラーではなく傍観者であります。私共は、傍観者に永遠の進化の基盤をつくる働きをまかせるわけにはまいりません。これらの方々は、このことには無縁であります。したがって、これからのことはもはや語れるものではないと考えています。

・今や新しい世の建設は一挙に拡がりを増し、具体化の段階に至りました。

このためにもめいめいが自分で立ちあがり、働かねばならないときにたち至りました。もはや、これまでのようには、古いワンダラーの方々にいろいろと容易に手をさしのべられない段階にあることもたしかです。

そして、次の段階のために皆さんがそれぞれの配置につき、働きを展開していただくかねばならない時が来たわけです。本日の集まりは、このことを告げるために開かれたのであります。それぞれの方々には、もう本当のマコトの心によって働き進まねばならない時が来ております。めいめいが建設の一員として自主的に立上っていただきたいと要望します。そのた

めには、自分自身が本当の決意をすることです。今までとは違った厳しい決意がいられます。

- ・私達は、さらに大きい離託に向って戦うのです。今のままの姿勢ではなに一つ進まないことを自覚しておられるでしょう。

今ここでいっている離託とは、自分の中にある古いものと新しいものを入れ替えることを意味します。古いものに頼らず、恐れず、無くなったら困ると考えず、神と共にある生活を考え、自分と神様のみしかないと考えるほどの離託に至ってほしいと思います。

もはや過去に心をうばわれず、把われる心をつ一つ切りはなしてゆくことがよいでしょう。

- ・私は皆様方の心の中に、きっとスムーズに古いものと新しいものとの入れ替えが出来ることと思っています。まず心の中で、もう新しい世のものと変わっていることを宣言して下さい。

すでに新しい世での生活をしている心が必要としますので、この心を体を持つことが必要でしょう。この心が出来れば離託の苦しみは少なくなりましょうし、スムーズに、自然に生まれ変われるでしょう。けれども、古いキズナを断ちがたいものも出て来るかも知れません。

そのときは、よく考えて下さい。つきつめて考えれば、古い世のものを握っている必要はもはやないと考えるようになりましょう。

自然に古い世の常識を越えられることと信じます。

けれども、やはり、飛び越えるだけの勇氣、決断がいられます。自分達の前途に横たわる新世界、広がりゆく新しい世の展望をはるかにながめ、すべての希望をそこにたくし、たたき込んだ開拓者の心を思いおこして下さい。

- ・ワンダラーは地球のモデルであります。まずモデルとして変わらねばなりません。追われる心ではなく、ゆとりをもって新しい世の心が変わって行ってほしいと思います。

本日を境さかとして、いっせいに古いものと新しいものとの入れ替えを行っていただきたいとお願ひします。

再び申し上げます。ワンダラーは地球のモデルであります。まずモデルとして変わらねばならない。変わっていただきたい。

形の変化はそれに続くのであります。新しいものが出来てこそ、始めて古い姿は消えていくのであります。形の変化を先に期待するのは間違いであります。

- ・形の変化は、古い地球の変化として目にうつりましょう。今のワンダラーの多くは古い地球をしっかりとつかんで離そうとしない。これでは新しい世の建設は一步も進まないことを悟っていただきたい。

・私達には、もう古い世のものを手離さなければならぬ秋が来たのです。それは今であると申しあげます。

古いもの、カルマにつまづかないように、沢山の湧玉のマコトをもってとび込んで行かれますことを期待いたします。ありがとうございました。

この日（二六日）、古い世の卒業の儀式が行われている最中に、W夫人は次の靈感を受けた。

「今日の儀式に出席された今までのワンダラーの方々の殆んどは、やがてこの地球での使命を終え、次の遊星へと遠征されて行かれるであろう。」

※ W夫人は、このことは各自が自から知るべきことであると思ったので、だれにも語らず心に納めておいたのである。

この日（二六日）、午後五時三〇分頃、Mさんは「空を見なさい。」というテレパシーを受けた。

東の空にはアカネ色の美しい夕焼雲がある。その上には柱を思わせる雲があり、さらにその上に円盤が滞空している。これを見て、「円盤だ。」と心で叫んだ瞬間、この叫びを待っ

ていたかのように円盤は彼方へ飛び去り、消え失せた。そして柱のような雲もやがて形を変えて消えてしまった。

午後六時、地響を伴った、「ドーン、ドーン、ドーン」という巨大な花火を打ち上げるような大きな音響を聞いた。Mさんは何事かと思ひ、屋外に飛び出たが、なんの変化も見当らなかつた。これは、以前にも聞いたことのある霊的な音響である。そう判った時、次の靈感を受けた。

「これは、今までのけじめ（区切、卒業）であり、これから新しい場へと変化が始まる。」
午後七時三〇分、Mさんは次のテレパシーを受けた。

「これから試練がまだまだあるでしょう。」

第七章 鏐球王国の国造り成る

三月三〇日、W氏は次の靈感を受けた。

「今ノ私達は古い肉体をつけていながら実体は新しい世にしているのである。古い世に囚われないで新しい世に生きるべきである。」

「古い世と新しい世とのギャップからくる試練を受ける。」

この日(三〇日)、一七時二〇分、Mさんは太陽を見ていた。太陽は西に傾き没せんとして輝いているが、いつもの太陽とは全く違うということが良く判る。(この太陽はW氏も別の場所で眺めていた。)

この太陽は通常の丸い形では全くなく、西空に輝くものが茫漠と光っているだけである。W氏とMさんは、太陽としての形と存在が不明確であると思いつつ、これを見ていたのであった。

Mさんは、一七時五〇分頃に再びこの太陽を見た。そして、心の中で、

「今日の太陽は形が全然見えない、茫漠とした太陽である。」

と思った。するとそのとたん、茫漠とした太陽のやや下に、明確な形をした驚く程に美しく輝やきわたる太陽が突如として現われた。そして、このはっきりとした太陽は、かなり早いスピードで下にある帯状の雲の中に入って行ったのである。

一方、上部にあって茫漠と輝いていた形のない抜けがらのような太陽は、やがて光がおとろえて雲の中へ消え去ってしまった。この時、次の靈感を受けた。

「古い地球の太陽は、このように、抜けがらとなり、やがて消え去って行く。そして新しい世の太陽と入れ替わる。」

四月一日、午後六時三〇分、T氏は次のテレパシーを受けた。

「ファイナーレの時が来ました。」

今日まで沢山の役を果たして来られた古いワンダラー達の中には、この地での使命は殆んど終えられた方々もおられる。このテレパシーは、その方々のファイナーレの時が来たことを意味していると思われる。T氏はこのことについて静かに深く考えていた。すると、^と問いの靈感を受けた。この問いの靈感に、更に考えをめぐらしていると、続いて靈感が湧き上って来るのであった。

これをまとめると次のようなものであった。

「永遠の道への目覚め。」

「永遠の道」、それは、今の自分に関すること、肉体にまつわること等、^{など}いっさいの思いが浮かぶ余地もない、そして生死をもこえた実体であった。その道にある自分は、道そのものであり、透明な目覚めた、静かな実体であった。このままの自分が今日覚めているのであるとの思いが強く迫って来た。

私は目覚めている。私は目覚めているのだ、と言葉が自然に口をついて出た。

永遠の道、それは生き生きとした果てしなく続く生命の道、不動の道、と呼ぶにふさわしいものである。意識すら超えていると表現するよりないものである。

神様の道を知り、サナダ様の切り開かれ、通られている道であり、歩んで行く道であり、真の道であり、それは永遠の道であった。

この道にある自分は、目覚めているのだと表現するよりないが、体験はそれらを超えた、魂に、心に、胸に落ちると言うか、全身心に落ち付く超えた理解そのものであった。それは今まで私なりに考えていた目覚めに対する諸々の余分なことは衣を脱ぐように消え失せて、単純な理解であると知ったのであった。

自分を神様の奉仕者として捧げ切ってしまうことであり、自分を意識する心を捨て切っ

ていることを自分に納得することの道でもあった。

その時、肉体を持ちつつも肉体を全く意識しない死のない実体として、永遠の生命として自分は立っているのを自覚したのであった。

「問いの靈感に答えて。」

この問いの靈感は、柔らかい、自然に流れると申しますか、ごく自然の、無理が全くない語りかけであり、自然に問いとわかるものであった。それは、

「次のた、かる、カルマの遊星での聖戦に出陣しますか？、それとも、ここ鏝球王国の建設要員に留まりますか？」

と自然に自分の心に判るものであった。

それに対する返事は、自分自身の内から、自然に、自分の意志により、どちらの道にでも自由に自発的な選択を尊重されているのである。だから、右、左、返事すること、しないことすら自由である。それは一対一の対話ですので、当然その人の意志をお問いになられるわけである。

「永遠の目覚めを頂いた、今の、目覚めたままの実体で、肉体をぬいで次の遊星に行く。」

「宇宙に悲しみのある限り、た、かる、カルマのある限り、そこを永遠に神様の世にするため、ワンダラー（私）の働きは続くのである。」

この二点が全身に湧き上って来るのであった。靈感を受けつつ時が経過するにつれ、自分の意志は固まり、決意となり、その決意はだんだん強く盛り上り、湧き上ってくるばかりであった。

「私は一人で、招命に心から応じて、出発する決意を表明いたしました。」
身は古い地球に足をつけ、意識は新しく出来た鏗球王国を故郷として、次の遊星に出発するのであると知ったのである。

ワンダラーは、目覚めた時々の段階で、その場から切れ間なくお役が開始され、果てしない歩みと働きの道になるのであると知るに至ったのである。

次の遊星に一人でもおもむき、神様の手足となつて働き、その遊星の人達と共に神様の御心のままの世を創るという強い決意と意志、これがワンダラーの原点の心の持ち方であるべきである。

これは、鏗球王国建設のお役として残られる方々も同じでなくてはならないはずである。
このようにT氏は、天の神様のみ心のままに、自分の意志による決意で、お誓い申し上げた通り次の遊星への聖戦に行く決意をしたのであった。

この時、今まで身につけていたあるものがパタリと落ちたように感ぜられた。とにかく一切の執着が取り除かれて「離託」したと、なんの抵抗もなくごく自然に思えてくるのであつ

た。あらゆること、すべてが、一切が大変に軽くなったのであった。と同時に、この肉体を着ている間は最後の最後まで大切に生き抜かねばならないという自覚も深くなったのである。

S氏も同様に、この「問いの靈感」を受けていた。彼も、ワンダラーとして、広い宇宙には天の神様の救いを待つ苦しみに満ちた遊星が沢山あるのを知っており、そこにおもむくことも当然として意識していたが、同時に、鏗球王国のワンダラーとして新しい世を底辺から支えていく役をも漠然と自覚していた。だがこの時になって、「ハッ」とした。

広い宇宙にも数少ないワンダラーとして、最も苦しく、つらく、むずかしい仕事の方を自分がまず選ばねばならないと自覚したのであった。

次の戦いこそワンダラーのこれからの働きのために良いカルマをつくらねばならない緒戦となるべき役割を持っているものである。この戦いがスムーズに行われずして、幾千億の歳月をひたすら救いの到来を待つ方々にどうして光を与えることが出来ようぞ。このように彼は考えるのであった。

今回の戦いが今までの失敗の戦いを清算すべき最後の戦いであるとすれば、ワンダラーグループとしての新しい出発の戦いが次の遊星から始まるのである。まず失敗の世の終わりに至らないように、ワンダラーの良い働きと良いカルマを残さねばならない。

彼は、今回の戦いの教訓を良きカルマとして身に浸み込ませ、最も大切な再スタートの戦いに身を投ずることのみが彼の進む道であると天に自らの決意を語るのであった。

一方、Y氏の場合には、次の遊星へおもむくか鏢球王国に留まるかは、全く選択の余地のないものであった。彼は、この問いをかけられた瞬間に、全く迷うことなく次の遊星へおもむきますと答えたのである。彼には、この場合、自分のとるべき道はこれしかない、なぜか強く思えたのであった。

四月四日、午前二時九分、W夫人の霊夢。

現界を去って行った死者達が非常に大勢天から降りて来た。この人達を、W夫人とMさんは迎えたのである。彼らは口々に、

「地球は新しくなりましたので降りて来ました。」

と語りながら二人（W夫人とMさん）に大変うれしそうに挨拶するのであった。

Mさんは、この方々を迎えるべく廻り一杯に美しい花を飾った。この沢山の方々の中には、二人のかつての知人、親類の人達もいたのであった。

四月八日、午前三時二三分、W夫人の霊夢。

夫人は円盤で沖繩ひめゆりの地、「湧玉の地」へ行った。エメラルドグリーンの美しい海を見、そして近くの熱帯樹木に飛び交っている幾万という数の大小の蝶を見た。この時、「万たる数のワンダラーは蛹さなぎから蝶になった。」と思ったのである。また同時に、万たる生まれしワンダラーは、明日（九日）行われる「沖繩ひめゆりの地「湧玉の地」での儀式」を待ち望んでいると判ったのである。

※ W夫人は、去る一月二六日、「万たるワンダラー（本の心）誕生祝事事の儀式」が行われたあと、幾万という蛹が群がっているのを霊夢で見た。その時、天より声がした。「万たるワンダラーはまだ蛹です。」

四月九日。

午前八時、沖繩ひめゆりの地、「鏢球王国湧玉の地」にて次の儀式が行われた。

「鏢球王国湧玉の儀式」

W氏とMさんは、昨夜の雨で浄められたこの地に午前七時四五分に到着、湧玉の地（ひめゆりの地）に一步足をふみ入れた時、今だかつて味わったことのない素晴らしい靈気を全身に受けた。この大きな感動の中で、心を静かに落ちつけるため、八時まで瞑想に入った。早

朝の静寂にして素晴らしい靈氣に満ちた雰囲気の中で、次の祈りが行われた。
祈り。

天の神様、サナンダ様、神々様、地の神々様ありがとうございます。

去る一月二六日、ここひめゆりの地にて、天の神様、サナンダ様、神々様と地の神々様
が大きく結ばれて行われました万たるワンダラー「本の心」誕生の大御業ありがとうございます
ました。

去る二月二五日、有珠山において、天と地が結ばれて行われました万たるワンダラー「本
の氣」誕生の大御業ありがとうございます。

本日、ここに、神様の永遠に降り給う地、新しい地球、鏝球王国の中心、湧玉の地、ここ
ひめゆりの地にて、万たるワンダラーの「本の心」と「本の氣」が大きく結ばれて、生気と
生命力に満ち溢れた万たるワンダラーをここに誕生して下さいましたこと誠にありがとうございます
ございました。

天の神様、サナンダ様、神々様、地の神々様のお守りと、お導きにより、またこの万たる
ワンダラーの方々の働きによって、「形の世界」に明るく生命力の満ち満ちた新しい地球、
鏝球王国を建設、完成、成就させて下さいますようお願い申し上げます。

ワンダラー全員をお守りお導き下さいますようお願い申し上げます。

天の神様、サナンダ様、神々様、地の神々様によって、ここに「鏝球王国湧玉の儀式」を
行って下さいましたことありがとうございます。

この儀式の場の近くには、高さ四〜五m程の、二本に重なり合った木があった。祈りを終
えたあと、Mさんはその木をみて「アッ」と驚きの声を発した。その木に咲く白い小さな花
の間に、沢山の蝶が群らがり、飛び交っているではないか。（しかも、儀式の前には、その
木には一匹の蝶も見当たらなかったのである。）即ち、儀式の直前（八日未明）にW夫人の
見た靈夢が現実の光景となったのであった。

今回の儀式にあつては、ここひめゆりの地は以前の二回にも増して表現しがたい柔らかい
靈氣に包まれていた。W氏とMさんは、立ち去り難い気持をあとに残しながら、この地をあ
とにしたのであった。

この日（九日）、午前三時頃、W夫人は次の靈夢を見た。

天空から二個の巨大な石が、静かに夫人の眼前に降りて来た。まわりのものがなにも見え
なくなる程巨大な石であった。その時、天より声がした。

「土台が出来ました。」

午前九時、K夫人は次の靈感を受けた。
「すっかりした不滅の基礎が築かれました。」

この日(九日)、午前二時、沖繩にて、Mさんは、前にもお聞きしたことのあるお方のお声を聞いた。そのお方は大きなハッキリとした口調で、しかも厳かに語られたのであった。

「始まりです。始まりです。始まりです。」

お言葉を聞いたあと、Mさんの心臓は早がねの如く動悸を打った。(この経験は以前にもあり、しかも、このお方のお声を聞く時に限られていた。)

ここに、万たるワンダラーは総員が完全に誕生したことになり、鏝球王国の不滅の土台は出来上がった。いよいよことは始まろうとするのである。

四月一〇日、午前三時、W夫人の霊夢。

大きな木が沢山繁っている。ここはお宮さんであると思った。お社は古ぼけていて素朴である。美しく賑々しいところは全くなく、田舎のお宮さんを思わせるのである。夫人はなぜかこのお宮さんにお詣りに行くのだと思った。その時、天より声がした。

「神社へお詣りしなさい。」

このお声で目を醒した夫人は、この神社の名前を教えられていないことに気付いて、朝まで考え続けたが判らなかつた。

ただ心にかかった文字がある。それは「樹」という文字であった。しかし、それ以外のことは全く判らなかつた。

※この日以来、夫人は、天に、「神社の名前を教えてください。」と数日にわたって祈り続けた。しかし、「それは自分で考えて知ることである」ということが心に湧いてくるのみであった。

四月一六日、出雲大社にて、W氏とMさんが参加して次の儀式が行われた。

「鏝球王国祝事の儀式」

祈り。

天の神様、サナンダ様、神々様、地の神々様ありがとうございました。

本日、私達は、天の神様のお導きにより、ここに参りました。

去る四月九日、沖繩ひめゆりの地、新しい湧玉の地にて、「鏝球王国湧玉の儀式」が行われました。

天の神様に、天の日王大国主命、地の神々、万たるワンダラー、ワンダラー全員がここに

大きく固く結ばれまして、新しい地球、鏝球王国は出来上り、鏝球王国は始まりましたこと
 ありがとうございます。

古い地球は、ここに終わりました。

これまでの沢山のお働きとお守りお導き下さいましたことに厚くお礼申し上げます。

ここに「鏝球王国祝事の儀式」が出来ましたこと、ありがとうございます。

天の神様、サナンダ様、神々様、地の神々様ありがとうございます。

ここに「新しい地球の大国主命の、鏝球王国の国造り」は終わったのである。これにてある大きな段階は終わりをづけ、次の新しい段階に入った。「始まりです。」の意味もここに理解されるに至ったのであった。

四月一七日。

大きな段階を越えた私達には、まず安堵あんどの気持が起こった。これで私達の役はこれから楽になるのではないかと思った。特に、Mさんにはこの気がかなりあったようである。

午後四時三〇分、Mさんは次のテレパシーを受けた。

「軽くなったと思うのはまだ早いです。」

ここで、去る四月九日の「始まりです。」という言葉が思い起こされ、改めて心を締めなおした。

四月一八日、午前六時三〇分、Mさんは次のテレパシーを受けた。

「〇〇さんは、目覚めるワンダラーを正しい方向に導く役目をするのです。」

四月二一日、未明、Mさんの霊夢。

夕暮の空に、美しい沢山の星で形造られた輝く王冠が現われた。

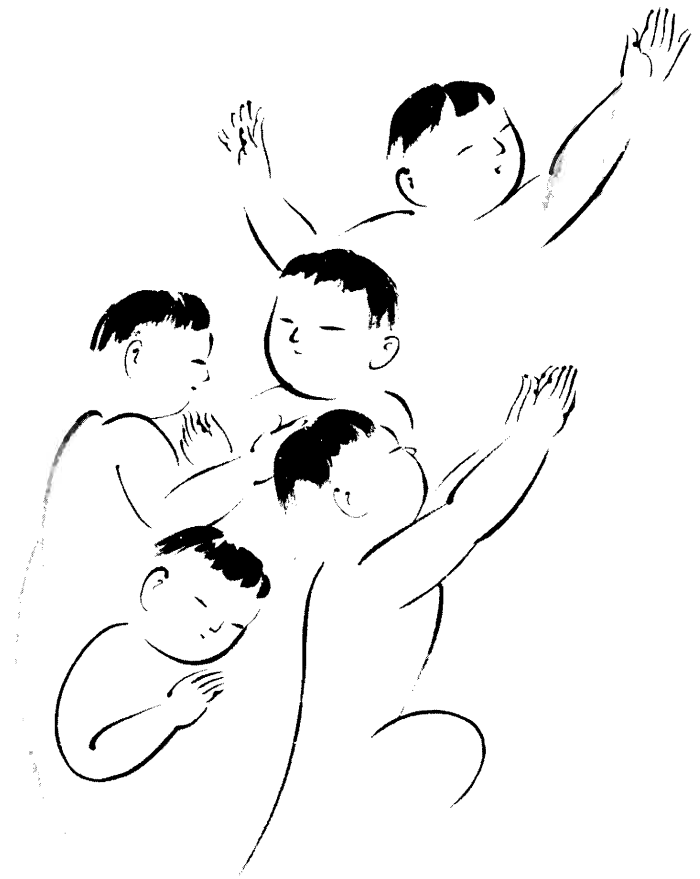
しばらくその美しい王冠を眺めていると、その王冠の前に、童話の絵本で見るとような悪魔あくまが倒れ伏している姿が現われた。

この時、Mさんは次の靈感を受けた。

「ワンダラーの思いのままの地球となった。」

第二部 天孫降臨

—新しい地球 鏐球王国完成—



飛

五人のワシガラー
 生れたワシガラーは
 ぶらっラス（の首を
 たぶね たぶね
 行くたぶね
 神 オホアゴビは
 その姿を見て
 大いなる秘蹟下
 用意は
 ワシガラーは
 世のゆく（は
 浄化の極み

飛

第一章 始まりの儀式

五月三日。

この日、新しく誕生された「万たるワンダラー」の方々を代表する十数名と、これまで活躍してこられた古いワンダラー二十数名が集まり、次の儀式が行われた。

「始まりの儀式」

この儀式は、古いワンダラーは、それぞれの生活の場にあって、身に持つカルマを真で解き、無為のノンキを身につけ、心の礼儀を充分にわきまえて、その方、その方、それぞれに、日常生活、環境、立場で、かけられる靈感を感じ、よく味わい、真剣に考えを深め、目覚めて、その方でなければ出来ないお役を、各自で、各自の場で果たして進んで行くことが「始まりの式」のである。また、新しく誕生された「万たるワンダラー」の入学式（活躍の始まりの式）であった。

この儀式においては、多くのワンダラーの方々が語られた。その中から二、三の方が語ら

れた内容を次に紹介する。

まずW氏が、今日の儀式について次のように語った。

今日の儀式には、計らずもこのたび新しく誕生された「万たるワンダラー」を代表して十数名の方々がここに参加されました。ですから、今日の儀式には二つの系統のワンダラーの方々が期せずして合流されて、「始まりの儀式」が行われることになりました。

その一つの系統は、今日まで長い年月にわたって新しい地球、神の国鏝球王国を、「無の世界」、「霊の世界」、「たましいの世界」で完成成就し、そして、「形の世界」の新しい地球、神の国鏝球王国の不滅の土台を創って来られた今までの古いワンダラーの方々であります。

もう一つの系統は、この不滅の土台の上に、「形の世界」の新しい地球、神の国鏝球王国を創る働きをなさいます、このたび新しく誕生されました「万たるワンダラー」の方々であります。この方々を代表して来られた十数名の方々をここにお迎えしたのであります。

今日は「始まり」の儀式であります。

古いワンダラーも、新しいワンダラーも、「魂」において、「心と意識と肉体」（形の世界）において真に目覚めた、新しい地球、神の国鏝球王国の場での「始まり」の儀式であり

ます。

今日は新しい方も居られますので、本題に入ります前に、心の準備として、「大宇宙におけるワンダラーの位置」について少しお話を申し上げます。

この詳細は、「オйкаイワタチ」本書、別冊(一)、(二)、(三)に書かれておりますので、この話を契機として再度「真の心」で熟読して頂けることを希望します。

神様から放たれたあらゆるもの（山川草木、動物、人類、一切のもの）の「生命」は、永遠の進化の道を進むのです。ある時には退化のように見える場を踏む時があっても、それを踏み台として永遠の進化の道を歩みます。

ですから、神様から放たれた「生命」には、永遠の進化への場が与えられます。その場が、大宇宙にある数限りない惑星であり恒星であります。また、大宇宙にあります、惑星、恒星も生命体であって、これらも永遠の進化の道を歩んでいるのです。

したがって大宇宙にはその「生命」の進化に応じた遊星があり、その場でその「生命」は学んでいるのであります。

生命の進化の過程で、永い永い宇宙年月を経て、人間の生命という進化に至り、人間という魂が与えられ、人間としての永遠の進化、即ち魂を練る場が与えられます。つまり、魂の練り、即ち魂の輝き（霊的進化の段階）に応じた遊星という学校に入学するのです。

この地球という学校は、その進化の場の一つであります。大宇宙には地球より遥かに遥かに進化した遊星はいくらでもあり、また地球より遅れている遊星もあります。

しかし、私達の太陽系では、この地球が一番遅れ、墮落した遊星で、他の遊星に仲間入り出来ない状態でありました。

ここに過去形で申し上げたのは、「形の世界」以外の世界（無の世界、霊の世界、たましいの世界）では仲間入りですぐに出来ているからです。

神様は、永遠の創造と進化を続けるために、「陽の働き」と「陰の働き」の両極面において、それぞれ創造と進化の場、即ち形から見れば試練（魂を練る）と見える場を与えられるのです。

神様がその試練の場を与えられる時には、同時に、これを解決する場も必ず用意されているのです。したがって、「解決する場」を信じて待てば良いのです。ところが、それを忘れて待てないということが生じます。即ち、魂が若く荒々しい段階にある時は、神様を本当に信じ切れない時があるのです。そして、神様を本当に信じ切れないところから一切の不幸が生じ、さらに悪いカルマが生じ、カルマはカルマを呼び、カルマがカルマを生み、その悪いカルマは悪い者をつくり、愛を破壊するに至るのです。

かつてレムリヤ大陸（ミューまたはムーともいい、一〇、五四六年前沈没）におられ、そこから金星に移られたタンテス（当時の名前はエニトといった。）という方が私達に次のように語られたことがあります。

「レムリヤ大陸の沈没の原因はカルマです。初めは愛の満ち溢れた所でしたが、やがて諸々の愛を、悪い者が破壊したのです。いわば、地球の至らない私達のカルマに他ほかならないのです。」

さて、永い永い宇宙年月の進化の流れの中で、地球という生命体である遊星自体は、一大進化する大周期に入りました。つまり、地球という小中学校から、進化の法則により高等学校に進化する時が来たのです。ですからこの地球に住む人類も、小中学校の教室から高等学校の教室で学ぶべく進化せねばならない大周期に来ているのです。

ところが、この地球と人類は進化の場で道を誤って悪いカルマに覆われ、さらにはオリオン、ルシファアの靈感、テレパシーを受けてさらに大きく道を誤り、物質文化の発達にのみ突き進むこととなりました。

人類は今や心を、精神を、魂を忘れて物質のみに重きをおき、物質の重さにまさに押しつぶされんとしています。そしてついには魂の進化の学びの場である教室（地球）をも破壊し、人類をも破壊せんとする寸前にあるのがこの地球なのであります。これを大周期の来た遊星というのであります。

このような遊星（今回はこの地球）とそこに住む人類を始め、一切のものを救い、その遊星を神様の世界とする目的と使命を持って遊星から遊星へ、太陽系から太陽系へと移り歩き、そこで果たすべき役目を神様から授かっている宇宙人の集団があるのです。これがつまり宇宙の清掃人^{ワンダラー}夫なのです。

このように、神様から直接使命を頂いて遊星から遊星へ、宇宙から宇宙へ歩き続けますので、ワンダラーというのです。

一人のワンダラーがこの宇宙に誕生するということは、実に大変なことでもあります。というのは、永い永い宇宙年月の進化の様々な過程を経て、魂を練り、高く輝く魂となって始めてワンダラーという位を神様から授かることが出来るからなのです。ですから、神様が、「ワンダラーは天使です。」といわれる意味がここにあるのです。

ワンダラーには、それぞれ使命によって色々の系統があります。（「オイカイワタチ」本書には、「AからZまでのワンダラー」と書かれておりますが、アルファベット二六文字の数の系統があるという意味ではありません。）

ワンダラーのお役、使命にはいろいろの系統が沢山あり、系統によりお役が異なっているのです。しかし、その遊星とそこに住む人類を救うという最終目的においては、どの系統も同じことです。そして、この全部のワンダラーの系統の頭、即ち総帥者の役名を、「AZ」

というのであります。

私達は今日までの約二十年間に体験して来た僅かな範囲から推察して、次のようなワンダラーの系統があるのを知りました。（ほんの一部であります。）

ワンダラーの系統。

- (1) 皇室のワンダラー。
- (2) 天の役をする、神様のワンダラー。
- (3) 地球のカルマを解く、オイカイワタチの役をするワンダラー。
- (4) 新しい地球、鏢球王国の不滅の土台の上に「形の世界」を完成される役のワンダラー。
（新しく誕生した万たるワンダラー。）
- (5) 地球人に円盤、宇宙人の存在と、正しい世界を知らせることの目的（PR）を持って来たワンダラー。

(6) 地球の肉体を付けないで、宇宙人（他の遊星人）の姿で役を果たすワンダラー。

(7) 天において、この地球を救う働きをなさる神々（神様の席の方々）のワンダラー。

これ以外にも沢山の系統があるでしょうが、私達が知りえたのはこれだけであります。

「オイカイワタチ」の本書、別冊(一)、(二)、(三)には、いま申し上げた系統の中の(3)「地球のカルマを解くオイカイワタチの役をするワンダラー」が、天の神様、神々様、宇宙の方々に

導かれ、助けられて役を果たし、新しい地球、神の国が創られて来た経過が書かれているのであります。

古いワンダラーの方々の中には、本日ここに出席されておられる方々、されておられない方々、そして長い戦いに疲れ果て、倒れてしまわれた方々もおられますが、これらの殆んどは、今回初めて「世の終わり」の戦いに参加されたのではないのです。勿論初めての方もありますが、二回目、それ以上の方もあるでしょう。ただ申し上げられますのは、これまでの「世の終わり」の戦いが、「失敗の世の終わり」であったということです。

「オйкаイワタチ」本書にも書かれております通り、その失敗の理由は色々ありましたが、ともかく失敗のカルマは次の失敗をまねくカルマとなり、このようにして、失敗のカルマは次々と持ちこされて来たのです。

この多くのワンダラー達は宇宙をさ迷い、再びこの地球に生まれ変わって来ました。生まれ変わるにあたり、こんどは絶対に失敗しないで必ず真に目覚めワンダラーの使命を果たすことを決意してこの地球に生まれて来たのであります。(ですが、地球の肉体を着ることにより以前の記憶は忘れてしまいます。むろんこのことも充分承知の上ではあるのですが。)つまり、ワンダラーとしての使命を果たしたいという魂の熱望により、生命を賭して来ているのです。それでも前々からのカルマのために道を誤ってしまうことがあるのです。良くない

りたいと思いつながらそう出来ないのがカルマです。カルマを決して軽く考えてはならないのです。

多くの古いワンダラー達は、このような苦しい戦いを繰り返して再びこの地球に来ているのです。

ここに地球の大周期が来たり、「世の終わりの決戦」が一九六〇年から始まったのであります。

空飛ぶ円盤の来訪は、ワンダラー達の目覚めのための警鐘となりました。一九五七、八年頃から一九六〇年にかけて、特に円盤、宇宙人問題が世界中の話題となり、これに興味を持つ人達が色々な団体、グループでもって、或は個人で真剣な研究を始めました。

私達も、円盤を研究する人達の当然のコースとして円盤を追い求め、夜空に「ベントラ、ベントラ」と呼びかけました。この点にかんしては、当時(一九五八、五九年の頃)の私達も現在の研究者と余り変わりはありませんでした。

しかし、宇宙船とのコンタクトが激しくなるにしたがい、円盤を追い求め、見て楽しむという段階から、私達の心は、「円盤、宇宙人來訪の真相」を真剣に考えるに至ったのであります。そして來訪の真の目的が次第に判って来たのであります……。

「この地球が大周期を迎え、新時代を迎えるにあたり、この大事業を遂行する使命を神様

から頂いて地球に生まれ変わって来たワングラー達に、その使命に目覚め、使命を果たす時が今ここに来たことを知らせるために、彼ら円盤、宇宙人は来ているのである。」

まさにこれこそが、円盤、宇宙人の来訪の真の目的なのであると判って来たのでありました。

ここで誤ってはならないのは、「円盤、宇宙人来訪の目的」は、地のワングラーの目覚めを促すためのものであるということです。ですから、まだ円盤を一度も見たことのない人の中にも、また宇宙人からの現象的な呼びかけを体験していない人の中にも……、実は霊的な呼びかけで、真に目覚め、使命を自覚して役を果たしておられる方もあることを知らねばならないのです。したがって、円盤を見たから、宇宙人と逢ったから目覚めているという考えは間違っているのです。目覚めとは、「真が判る」ということだからです。

世界の中で日本の地に一番多くのワングラーが降ろされている訳は、日本は、ある重要な使命を果たすべく運命づけられた約束の地であるからです。

地球という遊星を神が創りたもうた悠久の昔から、日本の地は神様の永遠に降りたもう地で、重要な役目を果たす地であるということです。この意味において、日本は神聖な地であります。

この神聖にして重要な役目を持つ日本の地に生まれたワングラーは、この意味において重要な役を持つのです。ですから外国のワングラーとは役目が異なるのです。

オイカイワタチの役を持って生まれた日本のワングラーが地球のカルマに目覚めて地球のカルマを解くことにより、即ち、湧玉の儀式、祝事の儀式が完全に行われることにより、カルマは全部解けるため、その遊星とそこに住む人類は一人残らず救われるのです。これは地球の現界、幽界、霊界のすべてを通していえることなのであります。遊星地球が一進化を遂げ、地球のバイブレーションが上がり、愛と調和に満ち、喜びあふれる神の世へと変化するのであります。

そして、それは、実に日本のワングラーの肩にかかっているのです。

これらのことに気付き、目覚めた日本の地にいるワングラー達によって、オイカイワタチの役が果たされて来たのであります。つまり、「オイカイワタチ」本書、別冊(一)、(二)、(三)に述べられています通り、「世の終わり」と「新しい地球」は、「無の世界」、「霊の世界」「たましいの世界」で完成成就したのであります。

そして、現在は、いよいよ「形の世界」に「世の終わり」と「新しい地球」を現わして行く時に至ったのです。(ここでいう「形の世界」とは、心と意識と肉体(形態)の世界です。言葉を変えれば、霊界、幽界、現界のすべてを指すのです。)

「形の世界」に新しい地球、神の国鏝球王国を完成する働きは、ワングラー全員(古いワ

ンダラーと新しい万たるワンダラー」の目覚め、即ち、心と意識と肉体における目覚めによって成されるのであります。つまり、これはワンダラーの肩にかかっているのです。そして、これは決してなまやさしい道ではないのです。

心と意識と肉体において「真に目覚める」ということは、今までの古い考え、古い心を全部捨て去らねばならないことです。新しい地球は、古い地球を修正したものでも手直ししたものでも、また良い処だけを引き継いだものでもありません。今までの古いものはなにより一つ引き継がないのです。全く新しく「無」から誕生したもののなのです。

「オйкаイワタチ」の全巻を通じて記述してありますとおり、新しい地球は、「無の世界」においても「霊の世界」においても「たましいの世界」においても、それぞれ以前の古い地球のものを一切引き継ぐことなく、いわば「無」から完全に新しく創られていったことが理解いただけるでしょう。そして、「形の世界」においてもこのことは全く同じなのであります。

全ワンダラーは、「形の世界」、即ち心と意識と肉体（形態）——それは、霊界、幽界、現界に通じている——において「真」に目覚め、心と意識と肉体（形態）に持つカルマを真で解き、そして無為のノンキを身につけ、心の礼儀を充分にわきまえて、各自が生活の場の中で靈感を受け、良く味わい、理解して、その方でなければ出来ない尊いお役をこれから

果たして行かれるのです。本日の儀式はその「始まり」であり、新しく誕生された万たるワンダラーの方々の入学式なのであります。

これからの道は、軽く安易な考えでは進めないのです。極めて厳しい、実に大変な道であり、この道を進んでゆくのは、非常に苦しいことなのであります。

いよいよこの戦いが「始まった。」のです。ワンダラー全員が果たす最後にして最大の戦いです。

さて、このたび新しく誕生されました「万たるワンダラー」の方々は、この新しい地球、鏗球王国の「形の世界」を建設し完成する使命を天の神様から頂かれた、天の神様がお創りになられたワンダラーであります。

別冊(三)以降に述べてあります通り、「万たるワンダラー」は、天の神様、神々様と地の神々様の結びにより、ワンダラーのみたまが降ろされて新しくここに誕生したのであります。外見からすればこの肉体も意識も心も以前の古い地球のままのようですが、みたまは、新しくワンダラーとして誕生したのです。この万たるワンダラーはフレッシュであり、心と意識と肉体という形の世界において目覚めやすい状態にあると思います。

私は、万たるワンダラーの方々が「形の世界」で目覚められ、逞しい働きを始められつつありますことに大きな期待を致しております。すでに全国各地でこの素晴らしい働きが胎動

し始まっております。

これから、ワンダラーの目覚めのための天の助け、地の助け、自然の助け、あらゆるものの助けが起ります。この助けとは、決して自分に都合の良いものでありません。自分自身にも、だれにとっても極めて苦しく厳しい試練の道です。いよいよこれが「始まる」のであります。

やがて、色々なことが起こるでしょう。驚天動地のことが起こるでしょう。しかし、どんなにビックリするようなことが起ころうとも、ワンダラー達は、あわてふためくことなくその本当の意味を、まこと真を、言霊を、まわりの方々に語るのです。「真」に目覚めていないと言霊は語れません。にせもの迷を語れば、そのカルマは語った者が自分みずか自から解かねばならないカルマとなるのです。

ワンダラーは最後の最後の瞬間まで、心の礼儀と心のノンキを忘れないで、最後の役を果たす第一としてこれから進んでゆくのであります。

ここに「始まり」を宣言致します。

続いて、Y氏が次のように語った。

◎ 新しい世の形成のために。(新しい世の根底をいかにつくるかについて。)

新しい世は、いよいよ形の世界において現実のものとなって来るに至りました。万たるワンダラーの方々が完全に誕生され、一九六〇年当時から一九九年の長い歳月をかけて戦われてきた戦いも、いよいよ最後の段階の「始まり」となったのであります。

去る四月二一日、「ワンダラーの思いのままの地球となった。」と靈感と共に知るに至りました。新しい世の不滅の土台が出来上りました。私達は、この言葉の重さを充分にかみしめなければならぬと思います。新しい地球の建設は、今や全てワンダラーの手にまかされたのであります。

一九六〇年当時から、ずっと宇宙の法則で許される限度一杯の天からのライマカタ(柔らかい淡い表現であるが、限度一杯の積極的な語りかけ)に導かれて来たようなかっこうで今日に至ったのですが、今後はこの天からのライマカタはさらに少なく、弱くなって行くでしょう。これからは、今までもさらに柔らかい靈感を頂き、これをよく味わい、深く考えて進んで行く必要があります。

天の神様のみ心のままの新しい世を建設するという責任は、完全に私達ワンダラーにゆだねられたのであります。

したがって、ここで私達は、不滅の新しい世を創るという重責を果たすにあたり、新しい世を形成するための根幹をもう一度確認しておく必要があると思います。

(1)新しい世は“0”から出発するものである。

これまでの「無の世界」、「霊の世界」、「たましいの世界」において、新しい地球が創られていくにあたっては、以前の古い地球のものは一切引き継がれておりません。すべて“無”から、“0”から完全に新しく創られて来たのであります。

※「オйкаイワタチ」の全巻を通じてこのことが記述されている。

したがって、「形の世界」においても、当然、新しい世は、古い世のものを全部捨て去って、“0”から、“無”から創られて行くのであります。

ここにおいて、この地球での戦いが「湧玉の戦い」といわれる意味が判るのであります。

(2)新しい世は、古い世のカルマを一切引き継がぬものである。

カルマというものは、本質的には原因と結果の法則により生じて来るものでありますから、宇宙の中のある場(今の場合は地球)の中におけるカルマというものは、それぞれが独立して存在するものではありません。その場(地球)の中の全てのカルマがつながり合い、からみ合って、今のような地球を構成しているのであります。

したがって、もし新しい世に古い世のカルマのほんの一部分でも持ち込めば、小さく切った身体の一部からでも全体を再生する原生動物のように、その小さなカルマもどんどん増殖して結局古い地球のカルマが再生するに至り、新しい地球は再び古い地球と同じ場へと引

き戻されてしまうでしょう。

新しい世を創るために、今の世のカルマの中から悪いと思われるものを棄て、良いと思われるものを選んで残して行こうとするのは、カルマというものの本質を見失った考え方であります。

私達は、古い世の考え方の束縛によって、今の世で悪く見えるもののみをカルマであると考えがちな傾向をもっております。しかし、今まで述べて来たカルマに関する本質的な考え方からすれば、今の世の良いもの、悪いものは全て相対的な善悪であります。

今の世にある真、善、美といったようなものは、たとえば泥沼に咲くハスの花のようなものであります。どんなに美しく、正しく見えるものでも、その根は泥沼につかっているのです。今の世で清く、正しく、美しく見えるものを支えるのに、どれだけのものが泥沼の中で犠牲を強いられているかを考えて頂きたい。他人を泥沼に押し込んでも自分だけはハスの花でありたい。これが今までの世の我欲のカルマの考え方であります。泥沼を捨て去り、ハスの花のみを新しい世へ持ち込もうという考え方は、まさに今までの我欲のカルマの変形でしかありません。

新しい世を創って行くためには、私達はこのような考え方とははっきりと訣別する必要があります。

以上のたとえ（余り上手なものではありませんが）によって、カルマをその本質から考えてみますと、新しい世は古い世のカルマを一切引き継がぬものであるということがはっきりして来ると思います。

(3) 新しい世は、天の神様のマコトのみを頼りとして創られるものである。

今の世のものがすべて捨て去られるべきカルマであり、頼りとするに足りないものであり、すべてが無であるということが身にしみて解れば、頼りとすべきは、天の神様のマコトのみであるということに自然と気付くに至る筈です。

天の神様のマコトこそ、今の世にあっても、いつの世にあってもカルマに汚されない唯一のものであるということを確認しておきたいと思えます。

(4) 新しい世は、上からではなく、地球人自身の手によって創られるものである。

一九六〇年代より今日に至るまでのオイカイワタチの歩みを振り返って見ますと、そこには厳然としたひとつの法則が貫かれていたのに気付かれると思えます。

この法則は、「地球のことは地球人の手で……。」という形で述べられております。これが「宇宙の法則」です。

今日までの歩みにおいては、どの場面でも、天のワンダラーの方々は我々地のワンダラーの自主性をギリギリの地点まで重視され、まさに瀬戸際の時点に至って、始めて、宇宙の法則の限度内において、天からのライマカタ（この場合、「語りかける」の意味）をかけられてきたのでした。

このように、天のワンダラーの方々が忍耐と礼儀の心をもって私達地のワンダラーに接しておられるのに対し、私達地のワンダラーの心の中には、今もなお天のライマカタを待ち、天のライマカタにすがり、天のライマカタによって新しい世を造ってもらおうという考え方が残っているように感ぜられます。

これでは天の方々に「宇宙の法則」を冒せ^{おか}と強迫しているようなもので、これまた古い地球のカルマに取りまかれた考え方であると申さざるを得ません。

今後は、先程も申しましたように、去る四月二一日に「ワンダラーの思いのままの地球となった。」ことにより、すべては私達地のワンダラーに任されたのであります。地球人自身が「天の神様のみ心のまま」を、「サナンダ様の思いのまま」を頂いて、自分達の手で新しい世を「形の世界」に造ってゆくのです。決して宇宙人に超越的なやり方で造ってもらうのではありません。宇宙人に大変化を起こしてもらうのではありません。ましては宇宙文明を解する人のみが選民として救われ、他の人々は抹殺されるというようなことでは決してありません。

また、私達は宇宙人の代行者やロボットではありません。天の神様のみ心を私達地球人が

頂いて、自からの意志で新しい地球を神の国としてゆくのであります。主体はあくまで地球人自身にあります。これがなされた時、初めて宇宙の方々は私達に援助の手を差し延べるこ
とが出来るのです。

日頃考えておりますことを述べさせて頂きました。これから事態が今後どのように展開してゆくかわかりませんが、すでに「形の世界」の最終段階に入っております以上、今後は、すべてのものごとが、私達の心に、意識に、そして肉体に、直接関係して来ることになるのは間違いありません。もはや綺麗事のみで歩んで行こうとするのは不可能な段階に突入しているのです。ある場合には、カルマとカルマがぶつかり合う物凄さに、心の中にその場を逃げ出したいという気持が起こることがあるかも知れません。しかし逃げないで踏み留まるだけの決意と覚悟が必要です。

靈感を大切にして、消えゆくカルマにまどわされしないで、カルマに巻かれないで、着実に新しい世界を建設してゆくだけの忍耐と、心のノンキさと、古い地球に対する離託の心が必要になって来ると思います。

古い世のカルマが一つ残らず消え去って、初めて、新しい世はその姿を現実のものとして現わすことが出来るのであります。

「神の国、人々の心に光が満つる神の国の来たることを。」（本書P172）

これこそが私達ワンダラー全員の唯一の願いであり、私達はこの最終目標に向かって戦ってゆくのであると今ここに再び確認したいと思います。

続いてS氏が次のように語った。

◎ 靈感のまま歩むということについて。

(1) 灵感の本質について。

• ここでいう灵感とは、普通世間でいわれている灵感のことではない。「真」に目覚め、「魂」に目覚めるという「心」の目覚めにより、心の礼儀をもって受ける灵感のことを指しているのである。

• 世間一般にいわれているテレパシー、霊視、霊聴などとも違うものである。もっと深いところで働く柔らかい淡いかすかな思いである。

• いろいろの「行」、つまり鍛練によって上達し得られる灵感とも異なるものである。また、指示や情報だけを受ける灵感とも全く異なるのである。これらの灵感は正しい天からの灵感でない場合が多く、ほとんど地のライマカタの灵感である。

• 心の礼儀のない状態で受ける灵感は正しい灵感といえない。

• 真の魂に目覚めていない、真の魂の目覚めの足りない、この状態で受ける灵感は、とか

く別の系統（オリオン、ルシファー、これらとくみした霊界人）からのものが多い。これを迷わしの靈感という。

- 今まで地球上でいわれて来た靈感の多くは、地のライマカタの靈感である。
- 「たかるカルマ」の語る迷わしの靈感、「たかるカルマ」の語るテレパシー、これを正しい靈感、正しいテレパシーと見誤っては決してならない。これは極めて大切なことである。
- 靈感は心の礼儀を持って正しく受けることである。決して「我」の状態を受けてはならない。また、好奇の目と心で受けてもいけないし、受けるのを待つ心があってもならない。

(2) 靈感のまま歩むということについて。

- 日常生活における様々な考え、悩み、苦しみ、喜びとして感じ思う、それらの思いがこれすべて靈感である。これが靈感の大部分であり、大切な本質でもある。

- これからの戦いは、今までと同様に礼儀のいる大いなる戦いである。この偉大な戦いを靈感のまま戦って行くのである。

- 苦しみとして、悩みとして、また、感ずるものはすべて靈感であると知って頂きたい。これらの靈感に導かれて、神様の礼儀の大いなる御教を淡々と受けとり、カルマから生まれるさまざまな思いをしみじみ味わってのち、ラタカルタ（宇宙語。愛とも言おうか。）の靈感を受けることが出来るのだと知って頂きたい。

- 心の礼儀のないままでラタカルタの靈感（悟り）を望むのは、神様のレタマヤ（宇宙語。天の神様の最愛。）の厳しさを判らぬ者の振舞である。

- このように、靈感を受けるということは、天の導きに従って色々の心を知り、思いを知り、思いをめぐらして、ついには正しいあり方を悟るのであるから、沢山の忍耐と素のままの心の思いが必要なのである。

決して靈感の過程を途中で蹴ったり、また勝手な理屈をつけて理解したと思う非礼な行いをしてはならない。

(3) 心の礼儀。

- 靈感を受けても、そのように思わない人が多い。
- 受ける礼儀があって始めて与える礼儀があることをわきまえ、これからの世のことを正しく戦って頂きたい。

- 神様の靈感を蹴ることは、「我」の心を育てる結果となる。これが「蹴るカルマ」となり、真の道から遠ざかることになり、我が身を苦しみの中に落とし入れることになるのである。

- 神様の靈感は決して威武威武しく、賑々しいものではないため、それと判らない場合が多い。ここに素のまま受けることの大切さがある。

・正しい靈感を正しく受けるためには、受ける心の礼儀がいるのである。受けてよく進んで行きますという心の礼儀がいるのである。

・みずからを無にし、神様に身も心も全託し、ノンキな心をつけて歩むのである。
 ・正しい靈感をよく受けるには、心の礼儀（節度、忍耐、敬虔）を失なわぬことである。
 ・古い世のもの（知識、学問）などの考え方を持ったまま、「我」の上に正しい靈感を得ようとするのは心の礼儀がないことである。

また、この心があると受けた靈感を正しく理解できず、靈感を蹴り、蹴るカルマをつくり、正しい靈感が受けられなくなってくる。

・テレパシーが出来るから、霊視、霊聴が出来るから「真」に目覚めていると思うことは大変な誤りである。迷わしのテレパシー、迷わしの靈感、霊視、霊聴が多くあることを知るべきである。「真の目覚め」により、初めて正しい靈感を受けることが出来るのである。

(4)カルマを解くということ。

・「無の世界」、「霊の世界」、「たましいの世界」における地球と人類のカルマはすでに解かれ、地球は生まれ変わって新しい地球となり、人類も生まれ変わり、救われて、鏝球王国に住まっているのである。

・いよいよ、最後の「形の世界」におけるカルマを湧玉のマコトで解いていくのである。

・「形の世界」のカルマを解くということは、実に大変なことであり、凄まじいことなのである。このカルマを決してかがるしく考えてはならない。

・このカルマは、みずからが形（心と意識と肉体）の試練を受けて解かねばならない。カルマを天に捧げれば良いというように気楽に任せることでは決してありません。

・もうこのカルマは避けたり逃げたりして通ることの出来ないものである。めいめい、全員が苦しくとも自分で解くのである。

・新しい世のものを身につけられた方にとっては、このカルマは解きやすい。というのは、以前のように、何が本物であるか、何が「真」であるかがわからず探りながら戦った当時は難かしく困難であったが、今は根のカルマが解かれて「真」というものが判っているからである。

・「形の世界」のカルマをはっきりと見定めることである。

それには、素のままになること、ノンキに、善悪に囚れず、思いのままの想いに考えをめぐらすことである。かりに神様に反逆するような考えが浮んで来ても、それを押し込めたり振り切ったりせず、忍耐強くその考えを続けて行くことである。それにより、自分はまたこういう考えを心の奥底に秘めていたのか……とその全貌を知ることである。

•では、心の奥底に秘めていた想い（カルマ）と目に見えるカルマ、これらの「形の世界のカルマ」を解くとは、どのようなことであろうか。

(イ)これ（カルマ）を徹底的に最後まで追求して行くことである。そしてカルマがどうしても身につけてしまったかの原因を知ることである。

(ロ)原因追求を中途半端で、適当なところで止めてはならない。

(ハ)地球のカルマを解く参考となる書物は、この地球上にはないことを知ることである。

というのは、オイカイワタチの役をするワンダラーによって、この地球の「無の世界」、「霊の世界」、「たましいの世界」で「カルマを真で解く戦い」が正しく行われたのは、この地球では今回が初めてであり、この戦いがまだ現在「形の世界」で行われている。だから参考書はないのである。

•古い世のさまを見て、自分の身の廻りに起る様々なことを見て、よくカルマを見すえて、なぜそのようになったのか、なぜそうなるのか、どのように思ったからそうなったのか、なぜこのように思えるのか、なぜそのように見えるのか、なぜこうなったのか、なぜ、なぜ……と追い込んで行って頂きたい。

そしてカルマの発端をつかみ、理解して頂きたい。

これを本当に判り、真はどれであったかを判ることが、カルマを解くことである。それは自分の心ではっきりと理解出来ることである。これは必ず出来ることなのである。

•このようにして、「形の世界」のカルマをワンダラーの湧玉のマコトによって解かれた時、古い地球の現象界（古い地球のカルマが具現化したもの）、幽界、霊界、つまり古いすべてのものは、天の神様のなさる大御業（大変化）により浄化され、消え去って行くのである。同時に、新しい世はそこに厳然たる姿を現実のものとして現わすのである。

第二章 天孫降臨

—新しい地球 鏖球王国完成—
—エクアドルの戦いの準備—

四月二三日、午前三時、W夫人は次の光景を霊夢で見た。

「そこには、奥深い森がある。鳥居、石段、そして素朴なお社があり、大きな樹が繁っている。」

これは、去る四月一〇日に見たのと全く同じ光景であった。夫人は、今回も「この場所を教えてください。」とお願ひしたが、やはり判らない。ただ、何か大切な役目をもってこのお宮にお詣りせねばならないということのみが良く判るのであった。

この頃、Mさんの心の中に、「九州の阿蘇」という思いが度々湧き上ってきた。「九州の阿蘇」へ行かねばならないのかなと思いつつも、しかしその意味や目的は全く解らないままであった。

この日(二三日)、呉市のK・M氏が突然W氏を訪れ、次のように語った。

「Wさんに、ぜひ幣立神社(宮)に行っていただきたい。行かれますように……。」

K・M氏は、この言葉を力強く、しかも数回くり返したのである。

W氏は、この言葉に強く感ずるものがあったので、そのお社の所在地とまわりの状況を問うた。これに答えてK・M氏の語る幣立神宮の様子は、W夫人の霊夢に現われたお社の状況と良く似ているようにも思える。また、Mさんの「九州の阿蘇」にも通じている。W氏は、「ここである。」と直感した。しかし、これまでの経過から考えても、この話は意味や目的のはっきりせぬ、漠然としたもののように思えるので、W氏も、最終的には心を決めかねた。——K・M氏が、天より靈感をいただかれてW氏を助けにこられたのであると判るまでには、あと暫くの日数を要したのである。——

四月二五日、午前四時、W夫人の夢。

「〇〇が日本を攻撃して来た。〇〇の爆撃機が日本を爆撃する。また機銃掃射する。沢山の日本人はこれにより死んで行く。建物も破壊された。」

四月二七日。

夜半、Mさんは、天に向って、今後私はなにをしたら良いのですか？と問いを発した。すると次のテレパシーを受けた。

「先のことを考える必要はありません。一つ一つを完全に処理して進んで行くことです。」
その夜に次の夢を見た。

世の中は大混乱となる。世界中がなにがなんだか判らない状態となる。しかし、Mさんはこの大混乱の中に巻き込まれてはおらず、他の場所からこの光景を見ていたのであった。

四月二十八日。

午後四時三〇分、Mさんは西空を見た。西空は一杯の雲に覆われて、その向こうに太陽がぼんやりと透^すけて見える。そして、その太陽の廻りには \triangle （五角形）の形をした虹（光）がある。その時、「なにかを意味し、教えられているのだ。」と思った。夜八時頃、この意味について考えをめぐらしていると、「御幣」という靈感を受けた。その時、「幣立神社」を意味していると判ったのである。

午後五時一五分、W夫人もMさんの見たのと同じ光景を見た（ \triangle ）。続いてこの五角形に頭と手足が現われた（ \triangle ）。亀の形だと思った時、「龍宮」である、鏖球王国を表わしていると強く直感したのであった。

午後六時三〇分、Mさんは、天空に雲で画かれた巨大な鳳凰が二つ向い合っている天のしるしを見た。この鳳凰は、今までたびたび見てきたのとはどこか感じが違い、少しの賑々しさも感じさせない。静かにして清楚な、すばらしい姿であった。

四月二十九日。

W夫人は次の霊夢を見、また天のしるしを見た。

午前二時一九分、夢の中に、「樹」という文字が極めて明確に現われて、はっきりと記憶に残った。

午前八時四五分頃、夫人は我家の窓から南の空を眺めていた。すると、前方から大きな雲の固りが夫人に向かって進んで来た。そして広がって「大」という文字を画いたのである。夫人が「大」という文字であると理解した時、その雲の文字はたちまちにして消え去ってしまった。

この霊夢と天のしるしの双方を考え合わせてみて、夫人は「大樹」の啓示であると判ったのである。

W氏は、この日（二十九日）夜、次の儀式は、九州阿蘇郡、幣立神社（神宮）にて行われる

ことに決定した。この決定により、W氏は、儀式の目的、意味について、次々と靈感と啓示を受けることになったのである。

去る四月一六日の出雲大社における「鏝球王国祝事の儀式」により、新しい地球における大國主命の国造りの役目は終了した。となれば、次の段階として、整え終わった国土（新しい地球）を天の神様に奉還せねばならない。即ち、天の神様を始めとして、天孫と高天原の神々様に御降臨いただき、鏝球王国を奉還せねばならない。しかも、この御降臨のお出迎えと国土の奉還は、形の世界（現実の地）で行われる筈である。

一方、幣立神社の地は、神代の古代からの天孫御降臨の地であり、神代から天神地祇を祀った神籬（ひもろぎ）上古の時、清浄の土地を選び、まわりに常磐木（とこわかぎ）を植えて神の御室として祭る称）は今も亭々（ていてい）たる一大巨樹（「大樹」の啓示）をなし、形の世界を厳然として象徴しているかのようなのである……。

とすれば、やがて行われる筈の御降臨のお出迎えと国土奉還のための儀式は、この地でなされなければならない、と判るのであった。

四月三〇日、W夫人の夢。

「オйкаイワタチ」の本を求めに、外国から非常に多くの人達がやって来た。

この日（三〇日）、Mさんは次のテレパシーを受けた。

「あなたの役はまだまだ終わっておりません。」

「古いワンダラーは、一人一人が各自で個々に働き、動いてもよい時が来ました。」

この日（三〇日）、午後六時、Mさんは、「太陽を見なさい。」とのテレパシーを受ける。しかし西空は一面の厚い雲に覆われて、太陽は全く見えない。ところが数秒後、厚い雲のさけ間より突如現われた太陽を見て、Mさんは驚いた。太陽の中に、大きさが三分の二位のもう一つの太陽があり、外側の太陽とは比較にならない程燦然（さんぜん）と輝いている。これを見たMさんは、

「この（内側）太陽は、新しい地球の新しい太陽である。」

と直感した。そのとたん、この内側の太陽は消え去ってしまった。

つぎに、太陽の中心に、二分する如く、水平な線が現われた。さらにこの線が消え去ると、太陽の中に三つの島（あるいは山）が現われた。が、この島もまもなく消え去り、それと共に太陽も再び厚い雲の中にかくれてしまった。

ここで目を東の空に転じたMさんは、そこに、天と地を結ぶ巨大な虹の柱が立ったのを目撃した。——これら一連の天のしるしを見たMさんは、これらは幣立神社における儀式の決

定に深い関係があると理解したのであった。――

この日(三〇日)、午後五時頃、W夫人はなにげなく西空を見ていた。天空は厚い雲で一杯に覆われている。しかし、突然西空の一角に雲の切れ間が現われて、青空がどんどん拡がってゆく。すると突如、人間が両手をあげた姿(万才の姿)が雲によって形造られ、どんどん太陽に接近し、やがて太陽が中心(腹)に留まって輝くのが見られた。

この光景が暫く続くと、万才した人間の形はやがて九州の形となった。そして、太陽は正に九州の中心、幣立神社の位置に輝いているのである。これを見たW夫人は、幣立神社で儀式を行う事の決定は正しいと確信した。それと同時に、雲はまた変化してたちまち亀の姿(鏝球王国を意味する。)となった。

五月四日、W夫人は、夢の中で、ただ一人道を歩いていた。行けども行けども終わりが無い。この道を夫人は歩み続けているのであった。

この夢のことが気にかかり、二日間考え続けた。

五月六日にも全く同じ夢を見た。終点のない永遠に続く道を一人で歩み続けているのであった。この時、いつもの神様のお声がした。

「これが貴女の進む道です。」

五月五日、午後五時三〇分、Mさんは、西空に輝く太陽の下に大きな四国の地図が雲で形造られているのを目撃した。この四国の地図を見ながら、Mさんはなぜか次のように心の中心で口ずさんだ。

「方たるワンダラーのために、出雲大社に再び行かねばならない。」

五月七日、午後一時、Mさんは次のような言葉を受けた。しかし、それは靈感ともテレパシーともつかない、いわば両者を重ね合わせたようなものであった。

「太陽が西から出る。」

五月八日、午後三時三〇分、W夫人は次のテレパシーを受けた。

「空を見なさい。」

空には中国地方の地図が雲で明確に描かれていた。しかも、雲を透かして山陰の出雲大社の位置に太陽が輝いている。これを見ると、太陽より黄金の線が下に延びて行く。さらにその黄金の線は左と右に水平に延び、また、その両脇から斜め下に向って延びていった。

つまり、太陽の下に木の文字が黄金の線で書かれたのである。(〇木)
これを見た夫人は、この時、次のように靈感を受けたのである。

「〇木は人間を表わし、木は気を表わし、気はワンダラーを指す。」

「新しい万たるワンダラーは稔る。」

「新しいワンダラーが稔り活躍出来るように、出雲大社へお守りとお導きをお願いに行かねばならない。この役はW氏とMさんである。」

五月一四日。

午後六時、W夫人は、天空に雲をもってしるされた九州、中国、四国の地図を見た。この時の太陽は瀬戸内海の位置、つまり出雲大社と金刀比羅宮の中間よりやや下にあり、しかも金刀比羅宮の方向に進んで行くように思えるのであった。

W夫人は、これまで度々示されてきたこれらの一連の天のしるしを思い起こし、考えてみた。そしてその結果、これらはすべて私達の心で決定した儀式が正しいものであるということを示され教えられたものであると確信したのである。

心で決定されていた儀式とは次のとおりである。

(1)「幣立神社での儀式」

(2)「出雲大社での儀式」

(3)「金刀比羅宮での儀式」

幣立神社での儀式の目的は一応明らかとなっているが、あとの儀式の内容については、これから充分に考えて、天の神様のみ心のままに進まねばならないのであった。

この日(一四日)、W夫人は、去る五月四日と六日に見たのと同じ夢を再び見たのである。夫人は、道も家もなにもない。しかも終わりもないところを歩き続けている。夢から醒めた夫人は、「ワンダラーの道は、永遠に前に進むしかない。終わりも、留どまる所もない永遠の進化の道を私は歩み続けるのである。」と思ったのである。

五月一二日、一三日の夕刻、W夫人は西空に、雲で形造られた異様な姿の鳥をみた。この鳥は、今だかつて見たことのない、なにか恐怖を感じさせるようなものであり、これはなにを意味するのかと夫人は考え続けたが、判らなかつた。

五月一五日、未明、W夫人は次の霊夢を見た。

去る一二日、一三日に夕方の西空で見た恐怖を感じさせる異様な姿の鳥と全く同じ姿形を

した巨大な鳥が現われた。この巨大な鳥は、荒々しい姿で日本を襲いに来たのであった。この鳥は、雨、風、雷、火事等となって日本中を駆けめぐった。それは物凄い有様で、日本中が目茶苦茶となってしまう程の巨大な力であった。

このような凄まじい大混乱の中で、数名のワンダラー達は、大勢の人達を安全な処へ導き、助けようとして一生懸命であった。

五月一四日。

午後六時三〇分、Mさんは、西空に、龍（龍宮、鏢球王国の象徴）の形をした雲を見た。太陽がその頭部に輝き、後方には外国の地図と思われる形を画いた雲がある。

この外国を表わす地図は今までも度々見せられていた。しかし、今、改めて気付いたのである。これまでは軽く考えて余り心にかけていなかったが、今日は不思議に強く心にかかったので、この外国の地図はどこを表わしているかと考えをめぐらし始めた。やがて、それは「南アメリカ大陸」であると気が付いた。しかし、その意味するものは、全く判らない。ともあれ、Mさんが天のしるしで見せられた「南アメリカ大陸」の地図で、記憶に新しいものをあげると次のとおりである。

第一回去る三月一三日、午後六時三〇分頃。

第二回 五月 五日、午後五時三〇分頃。

第三回 五月 九日、午後八時三〇分頃。

第四回本日（五月一四日）、午後六時三〇分。

Mさんは、この経過をW氏に、今日はじめて語った。

これを聞いたW氏は、瞬間、「ある重要な意味の、エクアドルの聖戦」を靈感で知ったのであった。この時よりW氏は「エクアドルの聖戦」について深い考えを続けたのであった。

一九六一年に、天の神様がW氏に約束された「エクアドルの戦い」の「形の世界」における戦いのことであった。「霊の世界」における「エクアドルの儀式」は、「オйкаイワタチ」別冊(二)に述べられている通りであるが、いよいよ、この戦いが「形の世界」において行われる時が到来した。「形の世界」での、この戦いは、南米のエクアドルの現地で行われるものである。と靈感が湧き上がって来るのであった。

続いて、W氏は、この儀式に現地へ肉体で参加する方は、W夫妻、Mさん、そして道案内と通訳にY嬢の四人であると心で決めた。そして「儀式の日」も、八月下旬と決定したのであった。

五月一六日、夜、W夫妻は南米エクアドル行きについて語り合ったが、この語り合いはW

夫人の心を重くするものであった。長い期間家を留守にすること、この旅行には色々な障害があるようにも思えた。できればこのお役は他の方に代わってもらいたいと思ったのである。

翌朝（一七日）、未明、W夫人は次の霊夢を見せられた。

まず、「エクアドル、エクアドル、エクアドル。」という言葉が天より三回聞こえて来た。この時には目を醒ましており、はっきりと聞いたのである。夫人はこの「エクアドル」の「重要な意味」について考えながら再び眠りに入った。そして次の夢を見せられた。

我が家に泥棒が入った。二階で大きな物音がするので夫人は目を醒ました。すると枕もとに一人の泥棒が立っている。夫人は「あの喧嘩のような物音はなんですか？」と問うた。この泥棒は、「二階で他の三人の間が、盗んだものを互いに奪い合って喧嘩しているので、貴女が仲裁してくれ。」と言った。

その時、天より声がした。

「離託、離託、離託です。」

夫人は起き上がって蒲団をたたみ、主人に泥棒が入ったと語った。主人は、「そうらしいね、好きなようにさせなさい。」といって再び眠ってしまったのである。

夫人はその泥棒と一緒に二階に上がり、三人の泥棒に、「喧嘩しないで仲良く分け合いな

さい。」と語って一人一人に品物を分配し、持ち帰らせた。

W氏宅に泥棒の入ったことを知った、大勢の知人達が見舞いに来た。また沢山の人達が荒れた家の中の後かたづけに来てくれた。ところが、片づけに来た沢山の人達は、「仕事をしたのだから一人について一万円くれ。」という。そこで主人はお金を引き出してその人達に与えたのであった。ここで夫人は夢から醒めた。

夫人はこの夢のことを静かに考えた。この夢は、「エクアドル」に関するものである。夫人はさらに考え続けた結果、「エクアドルの儀式」のために長期間家を留守にするための心配という心の迷いからの「離託」を啓示するものであると理解するに至った。ここにおいて、夫人にはこの儀式に出かける決意が出来たのである。

この日（一七日）、午後九時、MさんはW氏宅より帰宅する途中、「富士山の姿」を霊視した。何を意味するのかなと考えながら車を走らせていると、前方の天空に「讃岐富士」の形をした天のしるしが見える。これを暫く見ていると、次のことが靈感で判って来たのであった。

「これは讃岐富士を表わす。再び金刀比羅宮に行くことを意味するものである。」

Mさんが心の中でこう思ったとたん、雲で画かれた讃岐富士は消え去った。

五月一八日、午前四時九分、W夫人の夢。

そこは外国であった。戦争が行われている。大混乱が起こって、全てが目茶苦茶になっている。凄まじい光景である。余りの物凄さと恐ろしさで目を醒ましたのが午前四時九分であった。この恐ろしい光景について考えを巡らしている内に再び眠ってしまった。

すると前の夢の続きを見た。再び外国における大混乱と戦争の凄まじい光景であった。

この日（一八日）、夕方、W夫人は次のような天のしるしを見せられた。

南の空に、神様の御手の手首のところにエクアドルの地図が明確に画かれ、黄金色に輝いているのであった。

五月二〇日、未明、W夫人は次のような夢と天のしるしを見た。

夢は、娘のY嬢に関するものであった。まず夫人は、Y嬢が生まれた当時のことから、次第に成長し、現在アメリカに留学して勉強している姿に至るまでの一連の光景を見た。

続いてその夢は、Y嬢が、我々のこんどの旅行に関する手配のためにアメリカで忙しく走り廻っている光景となった。

つまりこの夢は「エクアドルの儀式」のための我々の旅行に関して、アメリカ在住のY嬢

が果たさねばならぬ大切な役割を果たすことを象徴するものだったのである。

※後日、この儀式に参加するための旅行の手配と一切の手続は、アメリカでY嬢の手によって成されたのである。

午前六時三〇分、この夢から醒めた夫人は、寢床から南の空を眺めていた。天空は一杯の黒雲に覆われている。突然その黒雲が裂けて青空が見えて来た。そして、その青空にやわらかい絹布を思わせる白い雲が現われてエクアドルの地図が作られ、黄金色に輝くのであった。それは去る一八日夕方に見たのと全く同じ光景であった。

五月二二日、未明、W夫人の夢。

大地震が起こった。すべてのものが崩壊する。我が家は勿論のこと、あらゆるものがすべて崩壊して行くさまを見た。

その時、天より声がした。

「すべて無です。すべて無です。」

五月二五日、午前二時三〇分、Mさんの霊夢。

そこは広々としており、附近一带にはなにもない。ただ赤茶けた小高い丘のくぼ地に廟びやうの

ような建物が一戸あるのみである。そして、そこにW氏とMさんがいる。

そこへ、宇宙から二人の男性が訪れられた。一人は無言で静かに控えていられたが、もう一人は手にお土産のようなものを持ってW氏のところへ歩いて来られた。その人は……、

「お礼に来ました。私はコタニです。」

と語られ、手土産のような細長い小箱を置いて立ち去られた。

この二人の方は、とても胸巾が広く、ガッチリとした体格であり、素晴らしい感じが全身からただよっているのがよく判った。特に、「私はコタニです。」といわれた時の言葉は明瞭ではっきりと判った。この言葉を聞いたあと目を醒ましたが、その後もこの言葉は極めて鮮明に記憶に残っていた。

この言葉には、なにかを感じさせる響きが含まれていて、以前、「古い地球は終わりました。」「始まりです。」というお言葉が天より厳かに語られた時に感じたのと同じような胸の動悸が目を醒ましたあとと暫く続いたほどであった。

五月二五日、午後五時四五分、Mさんは次のテレパシーを受けた。

「静かにされますように……。」

このテレパシーによりMさんは、今は、心を静かにして天よりかけられる靈感、テレパシーを正しく受け、役を真剣に果たして行く大切な時であることを知ったのである。

五月二九日、未明、W夫人の霊夢。

幣立神社にて儀式を行うことに決定された去る四月二九日以降、夫人は度々同じ夢を見せられていたが、今朝の夢もまた再び同じものであった。

夫人は、草も木も、なにもない広々としたところを歩き続けていた。すると猿（ある意味の象徴）が沢山でて来た。その猿達は手に手をつなぎ、また夫人の手を取って案内するように入進んで行くのである。ここで夢から醒めた。

数回も見せられたこの夢の意味について考えていた時、「猿田比古命」という靈感を受けた。（夫人は天孫ご降臨と猿田比古命との関連は知らなかった。）

さらに同じ頃から度々見せられているもう一つの夢があった。

夫人は、やっぱりなにもない広々とした高原を歩いている。すると、彼方かなたから「いなばの兎」の音楽が流れて来る。夫人はその音楽に引かれるように、野を越え、谷を越えてどんどん進んで行った。やがてある窪地に着いた。そこでは可愛らしい沢山の子兎（これもある意味の象徴）が円座になって、実に楽しそうに天から流れて来る「いなばの兎」の音楽に合わせて、歌を唱い、踊っている。これを見て、これは大国主命を象徴されたのであると気が付

いた。

夫人は、この二つの夢のことを考え続け、幣立神社（天孫降臨）と大国主命、猿田比古命はそれぞれに関係があるに違いないと思うに至った。

この日（二十九日）の夜、夫人ははじめてこれら一連の夢をW氏に語った。するとW氏は、これらの夢で象徴されている意味を明確に理解したのであった。（このように、天は決して地のワンダラーを強制されることなく、宇宙の法則の許す範囲において象徴的表現をもって示される。私達地のワンダラーはこの真の意味をよく判り、靈感のままにこれを実行してゆくのである。）

猿田比古命は、天孫ご降臨時の時、天と地の間にあって大国主命の御名代としてご降臨をお出迎えし、地での道をご案内されたお方である。

ここに、W氏は、来る六月一日の幣立神社における天孫ご降臨とお出迎えの儀式の意味と、猿田比古命のお役を完全に理解するに至ったのである。

また、来る六月十八日の出雲大社における儀式は、御名代として天孫をお出迎えした猿田比古命が大国主命にこの旨をご報告申し上げ、さらに高天原の神々様をこの地にご案内する儀式であると判ったのである。

五月三〇日、未明、Mさんの霊夢。

Mさんの身体の中にあつた真黒い血（汚れたものの根を意味する。）が全部出しくされてしまった。

この夢の中で、Mさんは、以前身体の中にあつた汚い物が全部出された夢を見たが、今ここに真黒い血が全部出しくされたことにより、自分の身体はこれで完全に清められたのだと思った。その時、この夢から醒めたのである。

六月一日、未明、W夫人の霊夢。

昨年（昭和五二年）の十二月二〇日に死んだはずの我が家の犬（サリー）が現われた。サリーはいつもの場所（ベランダ）に眠っており、夫人が起こそうとしても起きない。既に死んだはずだがと思いつつも尚もゆり起こそうとしたが、起き上がらない。

その時、天より声がした。

「サリーは天に帰るのです。」

そこで、夫人はサリーを真白い布で包んで台の上に乗せ、自分も真白い衣を着て、サリーを捧げ持つようにして、一緒に天に昇って行った。

この時、夫人はサリーの肉体は昨年十二月に死んだが、今日までここ（霊界）にいたのだ

と思った。サリ！の死後、どうしてもあとの犬を飼う気になれなかったのもこのためであると思った。また、霊界にいる動物達はこのようにして天に帰って行くのであると判ったのであった。

六月二日、午前六時頃、W夫人の夢。

地球上の陸地という陸地が、建物やその他全てのものを伴って海中に没して行く。

夫人はその海の中を泳いでいる。しかし海水は非常に冷たく、寒さのために途中で意識を失った。何時間、海をさまよったのであろうか、ふと気付いた時は、ある島に着いていた。

傍でライオンが夫人をペロペロとなめ、身体を温めていてくれている。

さらに、そのライオンは夫人を背に乗せてどこかへ案内してくれるのであった。しかもその途中、いろいろの動物達が沢山現われて、夫人をうれしそうに出迎えてくれたのである。

六月四日、未明、W夫人の霊夢。

夫人は、附近にはなにもない広々としたところにいる。そこには唯一つ、便所だけがある。その便所には、屋根も柵さくもない。しかも入口の扉が半分しかなく、したがって用便する人の姿はまる見えになってしまう。人々は、この便所に入るために一列に並んでいる。その数は

物凄いものであった。

やがて夫人の番が来た。夫人は恥かしいので、半分しかない扉で身をかくすようにして用をたした。すると身体より汚い真黒い血が沢山でた。そしてさらに不思議なことには、死んだ赤ちゃんが生まれたのである。この時、夫人の心の中には次のような言葉が浮かんできた。

「いよいよ地球の最後（形の世界における最後）が来た。」

「死んで生まれた赤ちゃんで示されたように、この古い地球は完全に死んだのである。」

六月六日、午後五時二〇分、Mさんは南の空に、雲でもって画かれた南アメリカ大陸の地図を再び見せられた。この地図は、先にも述べた通り、五月一四日までに四回、それ以後、五月一六日、二九日、そして今日（六日）とこれまでに七回にわたり見せられている。Mさんは、たび重ねて見せられるこの地図について考えた。

そして、天が私達に、「エクアドルの儀式の重要な意味」について深い理解をもつように望んでいられるのであると思うに至ったのである。

この日（六日）、午後六時、Mさんは西空に輝く美しい太陽を見た。その太陽と重なって、ピンク色に輝く美しい雲で、「天」という文字が極めて鮮明に画かれている。

Mさんは、これは「天」という文字を私に示されたのであると直感した。その瞬間、この文字がくずれ始めたが、「天」の中心の横軸（天）だけは明確に見えていた。すると、突如としてその横軸が傾いたのである。この時、Mさんは次のように直感した。

「古い地球の地軸が傾斜した。」

六月八日、午前三時頃、W夫人はふと目を醒ました。その時、天より次のような声を聞いた。

「この世を、託鉢たくはつするのです。」

六月一日、幣立神社（神宮）にて次の儀式が行われた。

昨夜来から降り出した雨は次第に激しさを増して豪雨となり、さらに強い風も加わって暴風雨を思わせる天候となった。この清めの雨と風はこの日（一日）午前二〇時頃まで続いた。

W夫妻とMさんは、午後二時三〇分、幣立神社に到着した。そこで驚いたことには、その地の状況（お社、鳥居、石段、巨木、まわりの森などのありさま）は、W夫人の四月一〇日の霊夢に現われた神社、そしてMさんが六月九日に霊夢ですでお詣りをした神社と寸分違

わないのであった。

昨夜来の大雨で浄められた神域は、小雨と静寂の中で、すばらしい靈気にみたまされている。三人は鳥居をくぐり、石段を登り始めた。石段の三分の一くらい登った時……。

「天より沢山の神靈が天降られた。」三人は、神靈のすばらしい靈気を全身で頂いたのであった。その際、ほんの一刻、身体がジーンと硬直したような感じを覚えた。

この時、次の靈感をMさんが受けた。

「すべて使命は果たせり。」

この儀式は、

天の神様、天孫及び高天原の神々様に新しい地球、鏝球王国の完成を報告し、ご降臨をお願いし、お出迎えをなし、国土を奉還する儀式。（注・高天原は金星に有る）

これがカアハミテスの儀式である。

祈り。

天の神様、サナンダ様、神々様ありがとうございます。

私達は、天の神様のお導きにより、本日、ここに参りました。

昭和五二年六月三〇日、「天の神様のみ心のままの地球となりました。」

昭和五二年七月二五日、「サナンダ様の思いのままの地球となりました。」
昭和五三年四月一日、「ワンダラーの思いのままの地球となりました。」

「新しい地球で働かれる方たるワンダラーは誕生しました。」

「古い地球は終わりました。」

地球は天の神様の大愛により神の国となり、ここに新しい地球は完成致しました。

この新しい地球は、天の神様、天孫の統べたもう地球であります。ここに国土をご奉還申し上げます。

天の神様、天孫及び高天原の神々様、ここ新しい地球、鏝球王国へご降臨下さいますようお願い申し上げます。

ここに、ご降臨下さいましたこと、ありがとうございました。

ここに、「新しい地球、鏝球王国は完成した」のである。

「オイカイワタチ」を読まれ、世の終わり、新しい世についての「真」の判る方々は、これまでもしばしば〇〇氏を訪れられてきたが、この傾向は「万たるワンダラー誕生」を機として増加しつつあった。特にこの幣立神社における儀式が行われた以降は、ある扉が開かれたように「真を語る」方々の全国からの来訪が日増しに増えたことになにか意味を感じさせられるのであった。

六月一五日、W氏は次の靈感を受けた。

「エクアドルの儀式」の日までの二ヶ月間余りは、一日一日を大切に、儀式にのぞむ心の準備と、目覚めと自覚を深めるための大切な期間である。

この日（一五日）、午後九時三〇分、W夫人は次の天のしるしを見せられた。

雲一つなく晴れわたった美しい夜空には虹が二重となって環を画き、その虹の環の中に美しい半月が〇の形に輝いている。すると、柔らかい白い絹布のような薄い雲が現われて、エクアドルの地図を画いて半月に重なった。

月の輝きはエクアドルの地図に美しく照りはえ、さらにこれを包むようにして七色の虹の環がはめられている光景はすばらしいものであった。これを見た夫人は、エクアドルの戦いの準備は順調に進行していると思ったのである。

六月一七日。

午前五時三〇分、W夫人は、黒い厚い雲に覆われた南の空を眺めていた。すると、この黒雲が動き始めて、数秒間で、「中国地方と四国」の地図が、黒雲の中に型で抜きとったような青空として現われた。

夫人は、明一八日の「出雲大社における儀式」と、来る七月一日「金刀比羅宮における儀式」について啓示されたものと理解した。

一方、Mさんは、幣立神社での儀式で、御降臨になられた高天原の神々様を全心身で奉戴しているのだという感情が一日の儀式の日以来ずっと続き、感動に満ちあふれる日々を過ぎていた。そして、さらに不思議なことには、この感動が来る一八日に出雲大社で行われる儀式まで続くのだとはっきり判るのであった。

この日（一七日）、午後一〇時四〇分、W夫人は、次のような天のしるしを見せられた。

黒雲がすきまなく天空をおおっているが、その中にエクアドルの地図の形にだけはっきりと雲がぬけ、夜空が見えている。その地図の中心には半月が△の形に輝き、さらにこの地図一杯に、半月をとりかこむ七色の二重の虹が、美しく環を画いている。（この光景は、雲と空の関係といい、半月の向きといい、一五日に夫人の見た天のしるしと全く対称的なもので

あった。）

六月一八日、出雲大社にて次の儀式が行われた。（参加者はW氏とMさんであった。）

儀式。

天孫のご降臨を報告し、高天原の神々様をご案内する儀式。

祈り。

天の神様、サナング様、神々様、地の神々様ありがとうございます。

私達は、天の神様のお導きにより、本日、ここに参りました。

去る六月一日、天の神様、天孫及び高天原の神々様はご降臨下さいました。私達は、幣立神社にて謹しんでお迎え致しました。このことをご報告申し上げます。

ご降臨下さいました高天原の神々様を、本日、ここにご案内して参りました。

新しい地球、神の国鏖球王国は、完全に天孫日嗣の皇子（明仁殿下）の統べたもう地球となりましたことをご報告申し上げます。

新しく生まれました万たるワンダラーが稔り、生き生きと逞しい活躍が出来ますようお守りお導き下さいますようお願い申し上げます。

これまでの沢山のお働きありがとうございました。これからの働きをお願いし、また私

達をお守りお導き下さいますようお願い申し上げます。ありがとうございました。

地球の霊的中心は日本である。ここに新しい地球のことはすべて整い終わったのである。

先にも述べたとおり、Mさんには、一日の儀式以来、ご降臨いただいた高天原の神々様を奉戴しているという感動がずっと続いていたが、この日（一八日）、出雲大社正面の大鳥居をくぐって一步神域に歩をすすめたとたん、その感動はパタリと消え去ってしまった。これをもって、W氏とMさんは、この瞬間から高天原の神々様はこの神域にお鎮まりになられたのであると理解したのであった。

六月一九日、午後九時三〇分、W夫人は、去る六月一五日、一七日の二回見せられた天のしるしを、今夜も又、しかも二回にわたって見せられた。

この日の月は満月に近かった。やはり七色の虹がそのまわりをとり囲んでいる。すると、白くやわらかい雲が形を変えながら月の方に進んでくる。この雲は次第にエクアドルの地図の形となり、月とぴったり重なったとき、まさに正確な地図となった。これを見た夫人は、エクアドルの戦いの準備は進行していると考えた。

二度目は午後一〇時三〇分頃であった。この時も、やはり天空にエクアドルの地図が形造られ、その中心に月が美しく輝き、それらを虹の環がとり囲んでいた。

夫人は、最近のたび重なるこの天のしるしを見て、エクアドルの儀式がこの地球における聖戦の中でも大変重要な意味を持つものであることを深く認識したのであった。また、夫人はこれによって、ぐらつきやすい自分の心を改めて、決意を新たにするのであった。

六月二三日、未明、W夫人の霊夢。

最初、富士山に大変よく似た形をした山が現われた。附近は砂漠のようである。すると天より声がした。

「アンデス、アンデス、アンデス。」

非常に大勢の人達（万たるワンダラーであると言った。）がアンデス山脈を登って行く。峻しい山のため、みな途中で疲れ果ててしゃがみ込んでしまった。その時、一緒に登っていた〇〇さんと〇〇さんがその人達に向かって物凄く力強い言葉で「頑張れ。へたばるな。」と大声をあげ、皆を勇気づけているのであった。

※ 「エクアドルの戦い」がいかに厳しく大変であるかということ、富士山に似た山は、エクアドルにある有名なコトバクシ山であることが、後日に至って判った。

七月一日。

先にも述べた通り、金刀比羅宮は、新しい地球の、地の神々様がお集まりになり、お鎮まりにいられている。ここ金刀比羅宮にて次の儀式が行われた。参加者はW氏とMさんであった。

儀式。

「全世界にこと、(鏝球王国)を開く儀式。」

この日、高天原の神々様、新しい世の地の神々様、ご皇室を始め全ワンダラーここに集まりになられて、全世界に向かって、鏝球王国のこと開きに、ノアの箱舟にてご出航され、全世界各国を巡ぐられて、全世界に鏝球王国が整うのである。

そして、この神々様始め全員のワンダラーはエクアドルの地に集合されるのである。それは最後の世の終わりの決戦である「エクアドルの戦いの儀式」に参加されるからである。祈り。

天の神様、サナンダ様、神々様、地の神々様ありがとうございます。

私達は、天の神様のお導きにより、本日、ここに参りました。

去る六月一日、天の神様、天孫及び高天原の神々様はご降臨下さいました。去る六月一日、高天原の神々様を出雲大社に御案内申し上げます、お鎮まり頂きました。

ここに地球におけるすべては整い終わりました。

これからは全世界にこと、(鏝球王国)を開いて下さいますようお願い申し上げます。

来る八月の終わりに「天の神様がなさいますエクアドルの儀式」に私達は参加致します。

神々様始めワンダラー全員が参加されます。すべての方々が無事に参加出来ますように、正しく儀式が果たせますように、往き帰りが平安でありますように、お守りお導き下さいますようお願い申し上げます。ありがとうございました。

儀式が終わったあと、W氏とMさんには、ここにお集まり下さった神々様はじめ、全員の方々が、全世界に向かって、鏝球王国のこと開きにご出航なされたのであると、なぜか心にはっきりと判るのであった。

ここに、全世界(全人類、動物、一切のすべてのもの)のことは整え終わったのである。

この日(一日)、午後六時頃、W夫人は次のような天のしるしを見せられた。

西空をおおう厚い黒雲が二分したように上下に分かれ、その切れ間から黄金色に輝く太陽が現われた。この太陽は、三重に輝く光の環に包まれており、「玉」^{たま}を思わせる美事なものであった。(太陽の内部には、力強い躍動が見られた。)

すると間もなく薄くやわらかい雲が現われて徐々に形を変え、太陽に重なってエクアドルの正確な地図となった。

「エクアドルを表わしている。」

夫人はそう叫んだとたん、地図と光の環は消え去り、太陽もまた黒雲にかくれてしまった。この時、夫人はなぜか、「今日の金刀比羅宮における儀式は無事に終わった。」と直感し、感謝の祈りを天の神様に捧げたのである。

七月四日、W夫人の霊夢。

「広々とした土地である。建物もなにもないこの広大な地に、非常に沢山の人達がいる。」この人達はなにかしていたのであるが、夫人は忘れてしまった。思い出そうと一日中考えたが、結局思い出せなかった。

七月五日、午前二時頃、W夫人は再び前日と同じ夢を見た。

「あたり一面建物もなにもない広大な土地で、非常に沢山の人が、手に手に鍬を持って^{はだし}跣で一生懸命に畑を耕している。」この光景を見た夫人は、新しい地球はまずここから始まるのであると思った。

七月六日、午後七時、Mさんは次のような天のしるしを見せられた。

西空に輝く太陽は、黄金色であった。その太陽の下に、太陽を抱くようにして大きなVの文字がやっぱり黄金色に輝いている。さらにその下には黄金に輝く山々が画かれている。

これを暫く眺めていると、Vの文字と山々を表わす雲は急速に形を変え始め、数秒間の内に「南アメリカ大陸」の地図に変化した。しかも、太陽は、エクアドルの国の位置に黄金色に輝いているのであった。

七月一日、午後六時三〇分、Mさんは次のテレパシーを受けた。

「外に出て見なさい。」

Mさんは、外に出て西空を見て驚いた。天空には今だかつて見たことのないくらい巨大な「V」の文字が画かれている。これを見たMさんが「V」であると思っただけの瞬間、次のテレパシーを受けた。

「エクアドルの儀式の準備は整いました。」

この日（一日）、午後五時三〇分、W氏は、「水晶のように透き通る、極めて美しく輝きわたる太陽」を見た。この時、彼は、この太陽は深い意味を知らせるものであると思ったのであった。

ここに「エクアドルの儀式」の準備が整ったことは、W氏にとっては感無量であった。彼は、二十年間の歩みを振り返り、ようやくここに至ることの出来た喜びをかみしめ、これから儀式の日までの一日一日を大切にし、目覚めと自覚を高め、神様に祈り続けて儀式の日にのぞめるよう決意を新たにするのであった。

七月二日、未明、W夫人は次のテレパシーを受けた。

「心の目を開くのです。」

エクアドルの儀式にのぞむにあたり、目覚めと自覚をもっと高めるようにと、天は夫人に語られたのである。

七月三日、午前五時三〇分、Mさんの霊夢。

W氏がMさんに語っている。

「昨夜、円盤に乗ってイギリスに行った。Mさんも一緒であったが、君は眠っている内に行ったので気付かなかっただけである。」

この夢の話はMさんがW氏に語ると、W氏は、「“エクアドルの儀式”が行われる前に私達は世界各国を訪れて役を果たすのである。それは魂で行くのである。」と語るのであった。

七月五日、早朝、W夫人の霊夢。

天より声がする。

「東南アジア、東南アジア、東南アジア。」

つづいて、W夫妻とMさんが東南アジアへ行くべくコレラの予防注射をしている光景を見て、夫人は目が醒めた。

夫人はこの意味について考えをめぐらした。すると、私達は魂で東南アジアへ行ったのであるという自覚が湧き上がって来るのであった。

このようにして、鏝球王国を開き、エクアドルの儀式に備えて私達は魂で世界各国へ訪れるのであると夫人は思ったのである。

七月一六日、未明、Mさんの霊夢。

Mさんは、夢と現実の境のような状態で、天よりの声を聞いた。

「あなたがたは、ノアの箱舟に乗ってエクアドルに行くのです。」

Mさんは、それに答えて、「その通りです。」と返事をしているのであった。

この日（一六日）、午後七時三〇分、Mさんは次の光景を見せられた。

天孫降臨

165

南の空に黄金色の光の柱がパツ、パツ、パツと三回立ったのを霊視した。間もなく、それまで美しく輝いていた半月は雲の中にかくれてしまった。するとその雲でオメガの小文字(φ)が画かれて、月の光ではっきりと見えるのであった。

Mさんがオメガの文字であると思った時、その文字は変化して鶴の首の形となった。そして東の方向に進んで行くように思えた。

この時、なぜかこれは「ノアの箱舟」を意味し、私達はこの「ノアの箱舟」に乗って行くと思った。

七月一七日、午後六時三〇分頃、Mさんは、「空を見たい」という思いが湧くので南の空を見た。そこには巨大な「十」^{プラス}の文字が、雲をもって明確に画かれている。

その時、次の靈感を受けた。

「これは、交わり、つながり、結びを意味する。」

Mさんは、この奥の意味を理解しようと考え続けた。するとまた次の靈感を受けた。

「この意味の判る時が来る。その時まで心安らかに待つことである。」

七月一八日、午前〇時頃、W夫人の霊夢。

夫人は可愛らしい赤ちゃんを両手に捧げるように抱いて、エクアドルの上空を飛んでいる。天から子守歌が流れて来る。これは地球のものではなく、天の音楽であった。夫人はこのすばらしいメロディーに合わせて子守歌を唱^{うた}い、赤ちゃんをあやししながら空中を飛んでいるのであった。

赤ちゃんは、新しい地球を意味するものと夫人は思った。

この日(一八日)、午後六時、W夫人の見た天のしるし。

西の空には真赤な太陽が美しく輝いている。この太陽に重なって、エクアドルの地図が、やわらかい絹布のような雲で画かれた。(エクアドルの地図は、太陽と同じく真赤に染められていた。)

この日(一八日)、午後七時、Mさんは真赤に光る月の中に、「大」という文字が明確に画かれているのを見た。これは「大」の文字であると心で確認した時、サツという早さで月は薄雲に覆われた。そして、この白い薄雲が急速に、鮮明なエクアドルの地図に変化した。この地図は、西に傾いた真赤な夕日の照りはえに染まって黄金色に美しく輝いているのであった。

これを見た瞬間、Mさんは、昨一七日に見た巨大な「十」^{プラス}と関連していると直感した。

この時、次の靈感を受けた。

「W氏は、エクアドルの儀式に参加される神々と完全に結ばれたのである。これによりエクアドルの儀式の出来る準備は整った。」

第三部 エクアドルの聖戦

—レタマヤの世の終わり—



前進する
ワエダラー
わのぶから
吾れは行むと
神の声を
仰ぐ子等
聞かれし
真のまなこ
行くよと
飛ぶ



第一章 レタマヤ

(宇宙語。天の神様の大愛)

七月二〇日、夜半から未明にかけてのMさんの霊夢。(これは、学びのための霊夢であった。)

Mさんの子供(U君)が転校することになり、Mさんは子供と共に学校を訪れた。その学校は、環境の良い丘の上に建てられていた。建物は素朴ではあるが、どこもかしこも掃除が行き届き、綺麗にピカピカと輝いている。とても心地良い学校であった。

Mさんは、子供と共に教室に入った。するとそこにいた子供達が皆一斉に集まってきて、U君を旧知の友人が来た如くに暖かく迎えてくれたのである。子供達は喜々としている。その行動は実に天真爛漫である。U君もすぐにその中に溶け込んで、一緒になって楽しそうに友達と語り合っている。

一方Mさんは、その担任の先生と面接した。

先生はMさんとU君の生活環境などについて、いろいろ質問された。その結果をまとめて、

先生は次のように語られた。

「貴女たちの生活レベルは、丁度中くらいにあります。この中くらいが一番大切なところ
です。」

続いて次のように語られた。

「多くの人々は、（生活環境そのほか）これ以上になると“分”を忘れて別の心を生じ
させ、知らず知らずの内に大きなカルマを作るようなことになるのです。」

「つまり、物、金、健康が揃うと、本来ならばそれに深い感謝を捧げるべきであるにもか
かわらず、それと反対に“分”^{ぶん}を忘れ我欲が増えて来る危険性があるのです。これが恐ろし
いことなのです。上位にあがるに従い自分をいましめる方もありますが、それは極めて稀で
す。質素、素朴、清楚、平凡を忘れて、多くの人達の心は、これと反対の方向に進みます。」

Mさんは、先生の語る話を聞きながら「そうだ、そうだ」とうなづいた。またMさんは、
心の中で、「私には今更上位にのぼろうなどという世俗の欲はない。」と思っていたので、
先生の話の切れ間に、次のように語った。

「私はもうこの世に未練はなにもありませんので、いつ死んでも良いのです。」

「それが、そもそも一番危険なことです。」

「この世に生を受けた以上は、どんな場合でも自分の“分”を忘れず、最後の最後まで生
き抜くことが大切です。その言葉を発することは大きなカルマを作るのです。」

と語られた。この時、Mさんは目を醒ました。それから、寝床の中でしみじみと考え、味
わい、深い理解を得たのである。

「今／＼から生活の態度を入れ替えよう。生ある限り最後の最後まで大切に生き
抜いて、そして新しい世の生活を、今／＼ここでこなうことである。」

※このMさんの霊夢を通して得られた学びは、ワンダラー全員にいえる
ことである。

この日（二〇日）の早朝、Mさんは、前記の霊夢で得た学びについて考えていた。すると、
午前五時に次のテレバシーを受けた。

「太陽を見なさい。」

その太陽は、今だかつて見たことのない不思議なものであった。まわりを照り輝かすよ
うな早朝の太陽とは異なり、真赤な太陽が、青空の中に、鮮かにポツカリと浮かんで
いるような感じであった。したがって、その形が極めて明確に判る。

驚いたことに、その形は、いつもの太陽の形とは全く違っている。その太陽は、不思議な

ことに次の図のような形をしているのであった。



Mさんは、これを見た時、^{しんもん}「神紋」を表わしていると思った。しかし、その真^{まこと}の意味は全く判らない。暫くこの不思議な太陽を眺めていると、やがて太陽は、いつもの早朝の輝きわたる太陽に戻ってしまった。

Mさんは、この異様な、不思議な太陽の形をどこかで見たことがあると思った。しかし、思い出せない。また、この太陽が語られる真の意味が判らないため、このことは誰にも語らず心に納めてしまった。

午後七時三〇分、Mさんは、靈感ともテレパシーともつかない状態で、天から次の言葉を受けた。

「今朝の太陽のことをWさんに語りなさい。」

そこで、MさんはこのことをW氏に語った。すると、W氏は、聞いたとたん／＼靈感と共にその意味を明確に理解したのであった。

「この太陽は、^{まがたま}曲玉（^{まがたま}勾玉）を示されたものである。曲玉は、『レタマヤ』を意味する。この地球は、『レタマヤ』を頂いたのである。」

実に喜ばしいことである。地球はレタマヤを頂いたのである。これにより、全宇宙を始め、地球が幾く久しく待望した「レタマヤの世の終わり」を迎えることが出来るのである。

※ W氏より「曲玉」を表わした太陽であると聞いたMさんは、ハッと氣付いて、「そうです。曲玉です、曲玉です。」と叫んだ。それは、先に出雲地方の玉造りの街で見た曲玉を思い出したからであった。

ここで少し紙面を借りて、一九六〇年当時にサナンダ（AZ）様から教えられた「曲玉」「レタマヤ」について、当時の記録から抜粋し、編著者の解説を附して次に記することにする。

以下に記することは、日本の天皇の皇位の象徴である「三種の神器」の真の意味に関する。また、古事記にある「桃の実三ツ」の真の意味にも関係する。

注 (1) 「古事記」の記事は次のとおりである。

イザナギの命が黄泉^{よみ}の国から逃げ還られるとき、黄泉比良坂^{よもつひらさか}の坂本で「桃の実三ツ」をとって黄泉の国の魔軍をお撃ちになり、これによって魔軍は皆逃げていった。命は、桃の実に、「お前が私を助けてくれたように、この葦原中津国^{あしはらのなかつくに}（地球）に生活している多くの人間たちが苦しい目にあつた時にも助けてくれ。」とお仰せになった。

(2) 一九六〇年当時の私達は、円盤、宇宙人、宇宙の真理、世の終わりということにのみ考えを致していた。したがって、この当時は、「三種の神器」と「桃の実三ツ」の真の意味がどのようにしてワンダラーの使命とつながるのか、十分な理解がでな

ったのであった。ところが二〇年を経過し、その間に様々な使命を果たして来た今日に至り、やっとこれを理解出来るようになったのである。(思えば、天の深い配慮を改めてうかがい知ることが出来る。)

レタマヤは宇宙語である。したがって、先ず宇宙語について少し述べておきたい。「オイカイワタチ」の各巻において時々見受けられる宇宙語は、一九六〇年〜六一年に「天の神様」、「サナンダ様」、「天の偉大な方々」がお語りになられたお言葉からとらせていただいたものである。(次に列記した。)

だから宇宙語といっても、読者の皆さんがこれまで想像された、あるいは、他の文献等々でいわれている宇宙語とは異なるものである。

これらのお言葉は、ワンダラーが「真」に目覚めてその役を正しく果たして行くために、私達の心と魂に語られたものであった。だからこれらの宇宙語の意味を、文字、言葉という限られた表現をもって伝えることは不可能である。つまり、これを理解するには靈感によるしかない。目覚めと自覚の深さに応じて、正しい靈感の深さに応じて、その理解が出来るものなのである。(私達は、一九六〇年当時の理解と現在の理解との差が余りにも大であることを、身をもって知っている。)だから、文字、文章、字句の表現に囚われないで、これらの宇宙語の奥深いところにある「真」を読み取って頂きたいと希^{ねが}う次第である。



- 。オイカイワタチ (本書P 115)
 - 。オリカイワタチ (本書P 115 ~ 120)
 - 。ツノカマタ (別冊(一)P 56)
 - 。カアハミテス (本書P 182、別冊(二)P 29 ~ 67)
 - 。タイタスカン 王の王の心。他人の苦しみを自分の苦しみとし、他人の喜びを自分の喜びとする心。
 - 。カイカнтаイ 心の礼儀をもった敬虔な気持、心。
 - 。ライマカタ (本書P 188 ~ 198)
 - 。ワイワнтаイ 犠牲的な心。
 - 。ルタカルタ ライマカタのあやまりを正す力。
 - 。クマコヤ
 - 。クカタカタ } 身を挺してカルマを断つ働き。これによって正邪の判断が行われ、義となつて人々に真の道を示し、間違つた道から人々を救う。
 - 。ララレラ 心の礼儀のないクカタカタはライマカタとなりカルマを作る。
- 囚われる心、片よる心。

。エレクヤ
。マカタカタ
。ラカタルタ
。ラタカルタ
。レタマヤ

明智、神様から頂く明るい智慧。
神様の愛を受け入れる心の状態。
愛。
天の神様の大愛。



さて、話を「三種の神器」と「桃の実三ツ」に戻すことにする。

「三種の神器」と「桃の実三ツ」は、深い意味においてはそれぞれの違いはあるかも知れないが、大きな意味からすれば同じである。

『三種の神器』

(1) 剣しるぎあめのむくも (天叢雲の剣)

・断つ
・クマコヤ

『桃の実三ツ』

(1) 桃の実の一ツ目

・断つ
・クカタカタ

クマコヤ、クカタカタの二つの宇宙語には、それぞれ深い意味についての違いはあるが大意においては同じである。

意味は……、身を挺してカルマを断つ働き。これによって正邪の判断が行われ、義となつて人々に真の道を示し、間違つた道から人々を救うこと。

ワンダラーは「世の終わり」の聖戦において、神様からクマコヤ（クカタカタ）を頂いて戦うのである。したがって、神様からクマコヤ（クカタカタ）を掛けて頂ける心の礼儀を持たねばならない。真に目覚めてこれをお受けしないと、ワンダラーの使命は果たせないのである。

(2) 鏡かがみやた (八咫の鏡)

・明智
・エレクヤ

(2) 桃の実の二ツ目

・明智
・マカタカタ

エレクヤ、マカタカタの二つの宇宙語には、それぞれ深い意味には違いがあるかも知れないが、大意においては同じである。

意味……、明智。神様から頂く明らかな智慧。

ワンダラーは、神様からエレクヤ（マカタカタ）を掛けて頂いて、神様の明智を頂いて、

「世の終わり」の聖戦を戦い、「新しい世」を“無”から築いて行くのである。

ワンダラーは、エレクヤ（マカタカタ）で守って頂けるように、真に目覚め、心の礼儀を持って、これを頼むのである。

ワンダラーの働きの中に自我があっては役は果たせない。ワンダラーが天の神様の手足となって進む時、神様はワンダラーにエレクヤ（マカタカタ）を掛けて下さるのである。

(3) 曲玉（八坂瓊の曲玉）

・解く

(3) 桃の実の三ツ目

・解く

・レタマヤ（天の神様の大愛）

・ラタカルタ（愛）

レタマヤとラタカルタには、天の神様の大愛と神様の愛という違いはあるが、愛という点については違いはない。

ワンダラーは、「たかるカルマの地球」に生まれ変わって、天の神様の手足となって、頂いた使命を果たすのである。使命を果たすとは、「たかるカルマの地球」を神様の地球とすることである。

ワンダラーは、まず、天の神様からクマコヤ（クカタカタ、剣）を頂いてたかるカルマを断ち、真の道を示して地球と人類を救う。そして、エレクヤ（マカタカタ、鏡）、つまり、

神様の明智を頂いて「世の終わり」を行い、「新しい世」を創って行く働きをなす。こうして、地球のカルマが良く解けてラタカルタの地球となり、変わる湧玉を天の神様にお渡し出来た時、天の神様はレタマヤ（曲玉）を地球にさずけて下さるのである。ここではじめて地球はレタマヤの世の終わりを迎えることが出来るのである。

レタマヤを受けぬ世の終わりは失敗の世の終わりであり、決して正しいものではない。

「世の終わりの厳しく変化した、惑星の今回は、今まで見られなかった地球がレタマヤの世の終わりを迎えるに至って、みな節度をよく考えて、魂の礼儀をもって迎える。

天の神様の従える神々が降り給い、地球を讚美し、人々の魂を救い、人々は礼儀をもって神の国を知り、死（肉体の死）を迎える。」

このように、レタマヤは地球が正しく大変化するためには極めて大切なものである。

一九六一年の初めには、レタマヤについて、「天の神様」、「天の偉大な方々」より沢山のお示しがあつたが、当時の目覚めの足りなかった私達には、これを正しく理解することは出来なかつた。しかるに、これまでの数々の体験を経てきた今日、はじめてこれを正しく理解するに至ることが出来たのである。当時示されたお言葉の一部を次に記す。

テケル様より。

「レタマヤは、カルマを解くためには、（地球が）悪く変わることがないためには真に大切なものです。」
（一九六一、一、七）

「レタマヤが廻りへ判るのは、変わる湧玉が神様の手へ渡された時で、弱る変わる悪い者は、カルマで断たれて、神様の世の中となり、まわりの方は神様が真でよく判ることでしょう。」
（一九六一、一、七）

AZ（サナンダ）様より。

「レタマヤが受けられるためには、変わる湧玉のカルマは必ず解く必要があります。」
（一九六一、一、七）

「レタマヤが掛けられるのは、カルマがよく解けた後のことです。」

（一九六一、一、一六）

レタマヤは、語る真を良くカルマで得たカミラだけが受けるものです。

レタマヤの判る世の終わりは、通う誠かよまことの判る時です。
（一九六一、一、七）

レタマヤがカミラへさづけられるのは、カルマがよく解けた終わりのことです。

（一九六一、一、一五）

レタマヤを受けぬ世の変わりは、決して正しいものではありません。

（一九六一、一、二〇）

レタマヤを変わるカミラが受けるのは、まれな戦いが沢山のカルマを解き、この次の戦いが良く出来るよう、たかるカルマがレタマヤで良く解けるよう、私（天の神）がさづけられるものです。

やがて、あたりへレタマヤをよく見せますから、良く誠で私を頼みなさい。

真まことがたかるカルマに負ければ、カミラの真がいかに強くても、レタマヤは受けられません。
（一九六一、一、二〇）

レタマヤを受けたカミラより受ける誠は、まわりの方のまだ考えたこともないような沢山なものです。
（一九六一、一、二四）

七月二十八日、午後、Mさんの見た天のしるし。

南の空に雲で富士山によく似た山が明確に形造られた。さらに、その右隣りには、東方に向いた鶴の首が、これも極めて鮮明に画かれていた。

これを見たMさんは、この富士山に似た山はエクアドルのコトパクシ山を指しており、儀式に参加される方々は鶴という乗物（ノアの箱舟）でエクアドルに行かれるのであると思われるのである。

七月二十九日、午後六時、W夫人の見た天のしるし。

西空に輝く太陽の少し下に、白い雲でとても鮮明にエクアドルの国の地図が画かれている。それ以外は、一片の雲もない青空であった。

七月三十一日、早朝、W氏の夢。

夢の内容はすべて忘れ去ってしまった。ただ、目を醒ました時に明確に記憶していたことは、次の通りである。

「すべてが、すべてのものが、ことが、一切が目茶苦茶になり、すべてが無となる。」

午後二時、次の靈感を受けた。

「離託、離託、離託。」

午後六時頃。W氏はなぜか太陽を見たいと思ったので、太陽を見た。その時、次の思いが湧き上がった。

「今日は七月の終わりの日である。五、六、七月は大切な月であった。意味の深い月であった。この三ヶ月の間に神々様はすべてを整え終わられた。これにより、エクアドルの儀式へと進むことが出来ることになった。」

一方、Mさんは、一週間程前より、頭と全身で表現しがたいある衝動を感じていた。今日（三十一日）はこの衝動が特に強く激しく、時には苦しいと思う程であった。これについて考えていると、今日はなにか、大変に意味のある大切な日であると思えてならないのであった。午後七時少し前頃、Mさんは次のテレパシーを受けた。

「祝いわいです。祝いわいです。」

このあと、西空を眺めた。空には太陽が真赤に染まって大変美しい。そして、太陽の右横には、太陽を一まわり大きくした程の極めて鮮明なオレンジ色の虹の環が輝いていた。

この虹の環は太陽の方に移動して、重なり合ったり、また離れたたりした。（これが数回繰

り返された。)やがて、太陽が地平線下に沈んで行くと同時に、このオレンジ色の虹の環も消え去った。これがなにを意味するかは、今は判らないが、大変に喜ばしいことであるということだけが良く判るのであった。

八月三日、午後五時三〇分、W夫人とMさんは、北海道知床にて、オホーツク海の空に天のしるしを見た時、W夫人は次のとおり直感した。

「太陽と月に守られて、私達はエクアドルに行けるのである。」

八月二日、午後九時一五分、W夫人の見た天のしるし。

美しく輝く半月を中心にして、そのまわりを黄金色の虹の環が取りまいている。この半月に重なるように、黄金の環の中に、絹布のような雲でエクアドルの地図がはっきりと画かれた。(このエクアドルは黄金色に輝いていた。)この時、夫人は次のように思った。

「私はこれでようやくエクアドルに行けることになった。」

この日(一二日)、午後九時三〇分、Mさんは、西の空に、透き通るような美しい黄金色に輝くエクアドルの地図を目撃した。それはハッとする程に美しいものであった。

それから北の空を見た。一面の暗やみの空から、真赤な光が、パツ、パツ、パツ、パツと西北東に帯状となって閃めいた。それが雷光でないことは、その状態からも良く判るのであった。

八月一日、午後七時五〇分、W夫人は、半月を中心にしてエクアドルの地図が鮮明に画かれ、月もエクアドルも共に黄金色に輝いているのを見た。

午後八時三〇分、前に見たエクアドルの地図は消えて、Vの文字に変わっている。半月はこのVの中に輝いていた。この時、夫人は次のように思った。

「エクアドルに無事到着が出来て儀式が出来る。」

八月二日、午前八時三〇分、Mさんは、西空に巨大なVの文字が白い雲で画かれているのを目撃した。そして次のように思った。

「エクアドルに到着できて、儀式は出来るに違いない。」

この日(一四日)、午後一時、W夫人は夜空を眺めた。今夜も半月に、美しい虹の環がかかっている。暫くすると虹の環が崩れて、どこかの国の地図を画き始めた。夫人は、最初

は、またエクアドルの地図かなと思っていた。しかし、今回は、別の国の地図が形造られたのである。外国の地図ということは判るが、国の名は判らない。夫人は余り心にかけて眠ってしまった。

その夜半から未明にかけての夢。

非常に広々としたところに夫人は立っている。そこがどこであるか判らない。すると天空に数多くの星が飛んで来て文字を画き始め、やがて空一杯に文字が画かれた。それは中国の文字であった。暫くすると、中国の音楽が流れて来た。この時、天より声がして、「これは中国です。」と言われた。そこで夫人は目を醒まし、暫くこの夢について考えていた。

翌朝（一五日）、テレビをなにげなく見ていると、画面に中国とソ連の地図が出てきた。

この時、夫人は、昨夜天空に現われた地図が、テレビで見た中国の地図と一緒にあることを知ったのである。ここで夫人はW氏が言っていたように、夜半、魂で世界各国を訪れているのであることを改めて自覚したのであった。

八月一八日、未明、Mさんの霊夢。

Mさんの息子（U君）が、「空を見て」と叫んで飛び込んで来た。

天空には、鶴が西方に向かい、亀が東方に向かって悠然と進んで行く。この光景は実に鮮

明で素晴らしいものであった。これを暫く眺めていると、次のような思いが心から浮かんで来た。

「鶴は西方から、亀は東方から、この地球をとり廻まいてエクアドルへと進んで行くのである。」

暫くこの光景を見ていると、鶴の下にエクアドルの地図が画かれた。目の醒めるような黄色さんげんに燦然と輝き、実に素晴らしいエクアドルの地図であった。

この光景に見ほれていると、エクアドルの地図の斜め下に絵文字（宇宙語であると思われる。）が鮮明に画かれた。Mさんは、この絵文字を書き写そうと思ひメモ用紙を取りに行った。ところが引き返して天空を見た時には、この光景は全部消え去っていた。

この時、Mさんは次のように直感した。

「天においては、既にエクアドルの祝事の儀式が始まった。」

ここでMさんは夢から醒めたが、心は大変に喜ばしい感情に満たされたのであった。

この日（一八日）、未明、W夫人の夢。

この夢は、沢山のワンダラーが、沢山のバスに乗って、世界の各国を訪れている光景であった。

八月二一日、午前一時二十九分、W夫人の夢。

儀式に肉体で参加する四人（W夫妻、Mさん、Y嬢）はようやくにしてエクアドルに着くことが出来た。四人は、エクアドルの有名な山、赤道直下で氷河を持つ雄大なコトバクシ山（富士山に似た山）に行った。

第二章 エクアドルの儀式

八月二〇日、未明、Mさんの霊夢。

東京のある人からW氏に電話が掛かって来た。傍にいたMさんには、その電話の内容が、全部手に取るように判った。それは次のような内容であった。

「我々は今ノワンダラー達を集めている。〇〇夫妻を中心として、これから儀式を行うのである。W氏はこれにより自分の誤りに気付くであろう。」

ここでMさんは、この夢から目を醒ました。変な夢だと思いついてこのことについて考え、祈り続けていた。すると、靈感ともテレパシーともいえる状態で、天より次の言葉を受けたのである。

「サタン」

W氏は、Mさんからこの経過を聞いた瞬間、この中に秘められている重大な意味を靈感と共に理解したのであった。

一九六一年当時、世の終わりを迎える最終段階に至った時、天の神様とサタンとが対峙する場がある、とカミラ様より聞かされた時があった。

それは、次のような意味である。

「真」に目覚めたワンダラー達は、天の神様がなされる「偉大なる最後の儀式」に参加し、それによってこの儀式が行われる。したがって、この儀式を妨害し、これを出来ぬようにするのがサタンの神様への最後の挑戦である。

サタンは神の姿に偽せ装い、「真」の判らぬワンダラー達の前に立って、ワンダラー達を呼び集める。「真」の判らぬワンダラー達はサタンを神様と間違えて集まり、彼の引率によって儀式の場に来るのである。

また、この儀式の場には、サタンに魂まで奪われていないが、「真」が判らず、真の神様とサタンの中間に立っている傍観者的なワンダラー、あるいは、そのほかの諸々のワンダラー、すなわち、ワンダラー全員が呼び集められる。

さて、この傍観者的な諸々のワンダラー達は天の神様がなされるこの儀式をどのように見るであろうか。

新しい世、神の国、そして神様のお姿というものは、彼らが今まで勝手に思い画いてきたイメージからは遥かにはかけはなれた、はなはだしく素朴なものであり、みすばらしく、貧しいとさえ言い得るものである。ところが一方サタンの方は、美しく立派な姿形をもって、威風堂々と現われる。そして、神様は、神の国とはこのように美しく立派なものであり、そのような見すばらしく、貧しく、頼りないものではないと語るのである。

この両者を見た諸々のワンダラーは、どちらが本物かと迷ってしまう。そして、「真」の見えないものについては本物を見誤ってしまうのである。（「真」に目覚めたはずのワンダラーの中にも迷う心が起るかもしれない。）

このようにして本物を見誤った諸々のワンダラーは、とうとうサタンに組することになり、サタンと共に来たワンダラー達と一緒に真の神様を攻撃する。そして、「真」の判るワンダラーに対して、

「神の世は、神様は、美しく立派で堂々たる姿のものでなければならぬ。そちらの神様は貧乏らしく頼りない姿ではないか。そんな神の国はニセモノである。君達は道を間違えたのだ。早くそちらを離れてこちらへ来なさい」と語るに至るのである。

「真」に目覚めたワンダラーが、この言葉によって心に迷いを生じ、呼びかけに応じてサタンの場に移るようなことがあってはならない。というのは、「真」の判ったワンダラーが去ってしまうと、天の神様はこの儀式をなさることが出来なくなるからである。そして儀式が出来ないということは、この地球が再びサタンの世となってしまうことを意味するのであ

る。さらには、ここでの失敗のカルマがもちこされ、次の遊星での戦いをも著しく困難なものとしてしまうのである。

したがって、サタンは、一人でも多くのワンダラー達に「真」を見誤らせ、自分の方に呼び集めてこの儀式に参加できないように、そして、この最後の儀式、即ち、「世の終わりの戦い」が出来ないようにしようと、大勢の手下を集めて最後の挑戦をしかけてくるのである。

この儀式（戦い）こそが……、

「エクアドルの儀式であり、エクアドルの戦いである。」

この儀式に肉体で参加するW夫妻、Mさんは、この三カ月近く、この儀式が正しく出来ますよう、天の神様のみ心のままに果たせますように……と、毎日真剣な祈りを続けたのであった。

八月二二日、未明、W夫人は意味深い二つの夢を見た。

(1) W氏は、「エクアドルの儀式」にのぞむにあたり、身体中の汚れたものを全部出すのだと言って便所に入った。そして、長い時間をかけて汚いものを全部出し尽したのであった。

(2) ○○が日本を攻撃して来た。空には戦闘機と爆撃機が飛来し、機銃掃射が行われ、爆弾

が各所に投下された。しかし不思議なことに破裂した爆弾はごく僅かで、殆どは不発であった。

この攻撃で、住民はみな地下壕に避難した。逃げ遅れたW夫人は満員の地下壕に入れず、地上で敵機を見ていた。すると、ある物体が空から降りて来て、夫人の目の前で止まった。そして、その中から二人の人間が出て来て、その中の一人が夫人に葉のようなものを振りかけた。するとW夫人は人間が変わってしまったのを知ったのである。

ここで夫人は目を醒ました。そして、この夢について考え続けていると、次のテレパシーを受けたのである。

「サタンがやって来た。」

これにより、夫人は、「サタンが降りて来た。サタンは人間の心を変えてしまう。サタンにやられてしまわないよう強く心せねばならない。」と思ったのである。

この夢は、「サタンが降りて来た。」こと、サタンの攻撃が激しくなり、サタンにやられてしまうものもあることを、このような象徴的な表現で示されたものに違いない。

※ かって、一九六〇年、サナンダ様が語られた。最後の決戦には「夜、オリオンが降りて来ます。オリオンが降りるのです。」

八月二三日、未明、Mさんは次のような夢を見せられた。
肉体で儀式に参加する四人は、いろいろな障害を経て、ようやくにして、無事エクアドルに到着することが出来た。

八月二四日、午後五時三〇分、Mさんの体験。

今日は、「エクアドルの儀式」に日本を出発する前日である。午後五時三〇分、Mさんは会社での仕事の整理、引き継ぎ等々を全部完了した。

そこでMさんは、「これでやっと会社の仕事関係のけりがついた。仕事のことを完全に忘れて出発できる。」と宣言した。

すると、この宣言が発せられたと同時に、正に一瞬にしてMさんの身体全体はある霊波で包み込まれたのであった。この時、全身が一瞬硬直した。それは、今だかつて経験したことのない強烈なものであった。

この状態を言葉をもって現わすことは困難であるが、あえて表現するならば……、
身体中が強いヒモのようなものにくるくるとまかれ、すっぱりと包まれて身動き出来ない状態であるが、心の底からなんともいえない大きな喜びが沸々と湧き上がって来るのであった。

このような状態が約一時間位続いた。そしてその間、Mさんは天の神様に祈り続けていたのであった。

「大きなエクアドルの儀式に参加させて頂けますこと誠にありがとうございます。この儀式が私の真の心で精一杯に果たすことが出来ますようお守り下さい。

また、この間、留守中の子供と私の母が何事もなく無事にすごせますよう、また、私の心が留守の者への心配を心からしないで済みますようお守り下さい。

なにがなんでもこの大きな儀式を無事に果たさせて頂けますようお願い申し上げます。」
このように、一生懸命に繰り返し祈り続けたのであった。

「エクアドルの儀式」に参加することが決まった暫くあとから、Mさんには様々な思いが去来するようになった。テレパシーとテレパシーの戦いという形をとったサタンの攻撃は、出発の日が近づくにつれ次第に強く激しくなって来る。「エクアドルの儀式」は非常に大変なものであることが段々と判って来る。これは生死をかけた戦いであるという思いが迫って来る。果たして肉体で帰ることが出来るだろうか。「ようやくエクアドルに到着出来た。」
ところまでは夢で知らされている。しかし、それからあとのことは判らない。Mさんは色々な苦しみ悩みから、迷うこともあった。儀式に肉体で参加しないで済ませる方法はないかと考えることもある。しかしそれは出来ない、出発の日は段々と迫って来る。したがって、

ついにMさんは身辺整理を完全に整え、後々のことを息子と母親に語って日本を出発することに決意したのであった。

これは、W夫人も同様であった。「エクアドルの儀式」には特別の事態が発生するような気がしてならない。夢でサタンに攻撃されるのをよく見る。海外旅行の準備が全て整ってからも、儀式に参加することを止めさせようとするサタンからのテレパシーを激しく受ける。不安、心配、最悪のことなどを思わせる迷わしの霊感が迫って来る。儀式に参加することを幾度止めようと思ったか知れない。そして、ついに夫人は最終的な事態をも覚悟した。しかしそのような事態に至った時には家族全員が一緒であるということから、諦めもできたのであった。

しかし、Mさんの立場は全く違っていた。家には中学二年生の息子がいるからである。前記のように真剣な祈りの言葉が出てきたのも、このためであったと理解されよう。

このようなサタンから掛けられる激しいテレパシーと迷わしの霊感の中で、またテレパシーとテレパシーの戦いの真只中で、三人は、二五日にエクアドルに向かって日本を発つことになったのである。

八月二五日、午前五時三〇分、Mさんは、眠っている中で、「太陽を見たい。」と思い、

突然目を醒まして飛び起きた。早速東の窓から空を見た。今、正に太陽は昇らんとしているところであった。口と手を洗って早々に外に出て、その太陽を眺めた。

それは誠に素晴らしい太陽であった。Mさんは、この素晴らしい日の出を拝することの喜びをしみじみと味わい、今日我々が日本を出発するにあたり、太陽は我々を祝福し、見守っていて下さるのであると思った。

この日(二五日)、午後八時五〇分、三人(W夫妻、Mさん)は成田空港を発って、道案内と通訳の役割をするY嬢と落ち合うため、まず、サンフランシスコに向かった。

サンフランシスコに着いた一行は、既に到着して三人を待ち受けているはずのY嬢の姿をさがした。しかし、見あたらない。問い合わせると、Y嬢の乗るはずの飛行機は故障で欠航したとのことである。

その時、W氏は再び「サタンの妨害」とテレパシーを受けた。

※ここに「再び」といった理由は、日本を出発する前日(二四日)、会社である事故が起こった時にも、「サタンの妨害」というテレパシーを受けていたからである。

Y嬢はノースカロライナ州シャーロットからサンフランシスコに来る予定となっていた。

もし次の便で来るとすれば、三人はここで八時間余も待たねばならないことになる。しかし、Y嬢は別便を利用し、綱渡りのような乗り継ぎをして、我々は僅か三時間半待っただけで、サンフランシスコに到着し、合流することができた。

④ 後日、シャーロットに住む、Y嬢の友人からの手紙によると、Y嬢の発った翌日の二六日はシャーロット空港で燃料輸送パイプが破損、燃料流出により空港周辺の住民避難という大事故発生、翌二七日はセスナ機が離陸直後に失墜、これらの事故により、二日間にわたりシャーロット空港は混乱したとのことであった。

サンフランシスコ空港の三人は、Y嬢を待つ三時間半を、祈ったり考えたりして過していた。サタンの攻撃と妨害のテレパシーがますます激しく迫って来るのがよく判るからである。目に見えない、表現しがたい苦痛が心と身体に重くのしかかって来る。三人は、「エクアドルの儀式」の厳しさを益々強く感ずるのであった。

八月二六日（現地時間）、午後八時五〇分、四人はサンフランシスコを発ってエクアドルのキトーに向かった。飛行機に乗っている所要時間は約十時間近くである。

八月二七日（現地時間）。

午前一時頃、

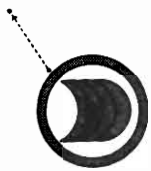
W夫人は、飛行機の窓から物凄い雷光が天空を激しく走り続けるのを暫く見ていた。すると、雷光でもって天空に巨大なZの文字が画かれたのである。この時、夫人は次のように直感した。

「エクアドルの儀式は始まった。」

午前二時頃、

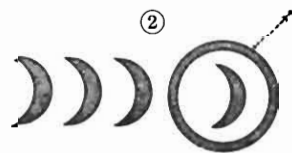
窓からは黄金に輝く月が眺められた。この月がどんどん変化してゆく。この変化を、Y嬢とW夫人は次のように見たのである。

① 最初、Y嬢が見た月は、次のようであった。



- 黄金に輝く月が四つ重なり合っている。
- この月を包んで黄金の虹の環。
- 環の左肩附近より円盤が飛び上がって行く。

次にW夫人の見た月は、次のように変わっていた。



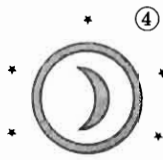
- 黄金に輝く四つの月は上図のように並んでいる。
- 最初の月には黄金の虹の環がかかっている。
- 環の右肩より円盤が飛ぶのを目撃。

さらに暫くして次の光景に変化した。



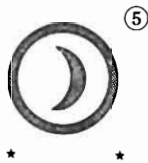
- 月も虹の環も黄金に輝いている。
- 月の上部には、大きく美しく輝く星が左右に二個ある。
- 二つの星と月とを結び合わせると、逆正三角形となる。

この光景が暫く続いたあと、また次のように変化した。



- 美しく輝く六個の星が現われた。互いに結ぶと六角形を画いた。
- この六角形の中に黄金の月と虹の環が輝いている。

この光景が暫く続いたあと、また次のように変化した。



- 六個の星は消え去り、虹の環と月の下部に美しい星が左右に二個輝く。
- お互いに結び合わせると正三角形を画いている。

さらに引続いて次の光景へと変化した。



- 黄金に輝く虹の環が変化し始め、やがてエクアドルの地図と変わった。
- 月と共に地図も黄金に輝いている。
- 結び合わせると正三角形となる。

この①から⑥までの一連の光景が、午前二時頃から約三〇分間にわたって天空に繰りひろげられたのであった。

飛行機がコロンビアの領空に入った頃と思う、日の出の寸前であろうか、地平線（正しくは雲海線ともいおうか）上に、真赤に燃えるような美しい光で出来た帯が左右へどんどんのびて広がって行く。それは大変美しい光景であった。

飛行機がエクアドルの領空に入り、キトー空港に着陸する少し前、度々夢で見せられていた富士山に似た世界最高の活火山（コトパクシ山）が雲海の上に遙かに聳え立ち、頂きには真白い雪を一杯に積もらせた巨大な勇姿を見せていた。

午前九時五〇分（二七日）、飛行機はエクアドルの首都キトー空港に到着した。

キトーより北方約二十数キロメートルのところに、緯度0度0分0秒の位置、即ち地球の北半球と南半球の接点がある。（この位置に立てば、北半球と南半球の両方をまたぐことになる。）そして、ここには赤道の位置を示す赤道碑が灰色の地はだの荒涼とした丘陵の中に建てられている。

この場所にて、全員で、「エクアドルの儀式」の祈りの言霊を捧げる。午後六時であった。（ここキトーでは、午前六時に夜が明け、午後六時に陽が暮れる。）

この緯度0、00度の赤道碑の場所に行くために、四人は、途中インディオの部落を数カ所通過せねばならなかった。ところが、それらの部落を通過するたびに目撃したものは、余りにも見すばらしく、貧しく、厳しい現実の姿であった。最低生活の極限、あるいは生きる極限とでもいおうか、住む家屋は、家屋と呼称するには余りにもひどすぎる荒屋あばらやであり、身みにまとう衣服は貧素で、跣はだしで歩いている人も沢山いる。

この光景は、物質文明の豊かさになれきっている我々日本人にとっては余りにも強いショックであり、それらの与える印象は強烈なものであった。したがって、我々は、これから儀式にのぞむにあたり、なぜこのような光景を見せられるのであるうかと考えざるをえなかったのである。しかし、この時には、この奥に秘められている、天が私達に語っておられる真の意味を理解することが出来なかった。

このような強烈な印象とショックは、「儀式」の祈りの心を決して安定させるものではなかった。これまで数多くの様々な「儀式」を果たして来たが、これまでとはすべてが全く違ったものであった。

W氏は、この儀式の祈りの最中に次の靈感を受けた。

「この位置だけの祈りが儀式ではない。エクアドルの地に足をつけた時から、この地における全部が儀式なのである。」

さらにこの「儀式」の祈りのあと、ホテルに帰る二十数キロメートルの間、再び以前と同じ光景を脳裏に焼付くほどに見せられ、考えさせられた。そして、考えは段々と深いものになっていったのである。それとともに、W氏の心の中には、「エクアドルの儀式は日本に帰ってから終わり、この本当の意味も理解される。」という思いが湧き上がって来るのであった。

しかし、それでも、W氏は、ここで見せられた光景に秘められている意味を探ろうと考え続けた。

この儀式こそが、二十年前から天の神様がW氏に与えられていた約束のものなのである。とすれば、天は、この光景から何かを私達に語り、教えようとされているに違いない。それは一体何であろうか？このことをW氏は考え続けたのであった。

そして、「日本では考えもつかない、想像を越えた貧しい生活をこの方々はしておられる。この姿は、我々がこれから目をそらして行くことの出来ない、皆が体験して行く道であろう。」と思うに至ったのであった。

やがてホテルに帰った四人は、再び「エクアドルの儀式」の祈りの言霊を天に捧げたのである。

祈り。

天の神様、サナンダ様、神々様、地の神々様ありがとうございます。

私達は天の神様のお導きにより、本日ここに参りました。

天の神様ありがとうございます。

天の神様の大愛により、地球にレタマヤを頂きましたこと、まことにありがとうございます

した。

ここに、地球には、レタマヤの世の終わりを迎え出る準備が整いました。

本日、ここに、天の神々様、地の神々様、ご皇室の方々始めワンダラーの方々がお集まりになり、天の神様がなさいますこの「エクアドルの儀式」に参加されています。

ここに全員そろいまして、天の神様をお願い申し上げます。

「地球にレタマヤの世の終わりを行って下さいますようお願い申し上げます。」

「古い地球の地軸と赤道の位置を、新しい地球、神の国鏢球王国の地軸と赤道の位置に変化させて下さいますようお願い申し上げます。」

「レタマヤの世の終わりの大変化によって、古い地球の全てのものを浄め、消し去って下さい。」

「新しい地球、神の国鏢球王国を、ここに現わして下さいますようお願い申し上げます。」
これからも、地球を、全人類を、全ワンダラーを、一切のすべてのものをお守りお導き下さいますようお願い申し上げます。

天の神様、サナンダ様、神々様、地の神々様ありがとうございます。

ここにおいて、この「エクアドルの儀式」とはこの祈りだけではなく、エクアドルの地に

おける全てが、また赤道の場所における全てが、そして旅行の全部が儀式であり、かつ、「エクアドルの戦い」の開始を意味するものと判ってきたのであった。また、この地にて数々のことを学び、教えられるのであるということも理解されるに至ったのであった。

④ 赤道について（世界大百科事典より）

①地球の赤道。地球上において地心を通して自転軸に垂直な平面が地表に交わる大円をいう。赤道地では太陽は垂直にのぼり、ことに春分、秋分では天頂を通る。それゆえこの地方においては地球上でいちばん太陽の放射を受ける量が多い。赤道を越えると夏と冬が逆になるが、赤道では四季の区別はつけられない。

②天の赤道。地球の赤道面を無限にのばして天球と交わった大円をいう。天の南北極に直角な大円である。球面天文学上最も重要な座標の基準の一つである。

※エクアドルとはスペイン語で赤道という意味である。

八月二十八日（現地時間）。

四人は休養として一日中をホテルで過しながら、これまでのことについて考えを巡らしていた。

日本を発ってから今日までの旅行行程は、決して強行軍ではない。むしろ時間的余裕をたっぷりとった、極めて楽なスケジュールのはずである。にもかかわらず、身心共に苦痛と疲労の連続である。したがってこの苦しみはサタンとの激しいテレパシーとテレパシーの戦いによるものであることがよく判る。サタンは、四人をエクアドルに留めないようにテレパシーで迫ってくる。また四人が一つの心にまとまらぬように不和を起こさせ、それぞれに早く家に帰れと強迫して来るのである。このような攻撃が、特に夜半は強烈であり、このため全員は眠りを大きく妨げられた。（特にW夫人とMさんはこれまでの全夜を通して殆んど眠れない状態であった。）このため全員が完全に疲れ切ってしまったのである。

日本を発つ前に、「エクアドルの儀式」が如何に大変で苦しいかということ、W夫人は霊夢で見せられている。「アンデス、アンデス、アンデス。」という天の声と共にアンデスの山を登ってゆくのだが、苦しさから全員が疲れ果てて坐り込んでしまうという夢である。（P 159参照）この象徴的霊夢で示されていたことを、私達は、ここに現実のものとして体験しつつあるのであった。

そして、連日の余りの苦しさとサタンのテレパシーによる攻撃で、W夫人は、とうとう、「家に帰りたい」と心で強く思うに至ったのである。

二八日未明、W夫人は次の霊夢を見た。

夫人は日本の我家に帰ったのである。早速締め切った各部屋の戸を全部空け放ってやれや

れと安堵した。すると可愛らしい小犬が二匹現われて、空け放たれた戸を一枚一枚ものように締めて行く。全部締め終わると、その小犬は夫人に次のように語った。

「まだ家に帰ることは出来ません。あなたはエクアドルに戻るのです。」

戸が全部締め切られてしまったので家に入ることが出来ず、夫人は再びエクアドルに戻って来たのであった。

この霊夢は、苦しみのために我家に戻った夫人の魂が、家に入ることが出来ず、（使命を果たすまでは家には帰れないことを意味している。）再びエクアドルに戻って来たことを示されたものである。

しかし、Mさんはさらに苦しかった。というのは、Mさんの役がサタンのしかける妨害と攻撃を心と意識と肉体で受けてそれを判り、それと『真』で戦うことが特に大であったからである。Mさんは、肉体の死をも覚悟し、全ての身辺整理を済ませて日本を後にした程であった。

W夫人とMさんは、日本を出発する前日まで、この旅行を止めることが出来れば止めた^やいと幾度考えたか判らなかつたと語るのであった。

以上のようなことが語り合われたほどに、この日（二八日）は、私達は連日のテレパシーとテレパシーとの戦いに疲労し切っていた。しかし、戦いはこの程度では終わらない。エク

アドルに着いてからというもの、サタンはさらに一段と激しさを加えて迫って来たのであった。

このような苦しみの中で、我々は考え続けたのである。

これまでに果たして来た沢山の儀式を振り返って見ると、特に有珠山、沖繩での儀式は、いずれも何もない素朴なところで行われ、そこから私達はいろいろなものを学んで来た。ところが、今回、ここエクアドルに来て、これまでの学びの甘さを身にしみて知らされたのであった。

エクアドルのインディオ達は、人間の生活条件としては、これ以下のものは考えられないほどのギリギリの限界で生きている。にもかかわらず、私達の見限りでは、彼らには少しの卑屈さも感じられない。謙虚で純朴であり、その目は涼しいほどに美しく澄んでいた。

私達は、このような人達こそが、新しい世においてはむしろ一番幸せな人々なのではないかと感じざるを得なかつた。

このように、私達は、今までに体験して来た儀式とは全く違ったものを全身心で受け取つたのであった。そして、この体験により天が私達に語り教えられている『真』は、日本に帰り落ち着きを得た時に、さらに鮮明に理解出来るようになると思うのであった。

また、儀式から受ける体験も、かつての、深い内奥の世界での霊的なものから、次第に心、

意識、肉体と「形の世界」へと変って来たことがよく判るのであった。



形の世界にいよいよ「世の終わり」を迎えんとするにあたり、特に記しておきたいことがある。

これまで行われて来た「無の世界」、「霊の世界」、「たましいの世界」での聖戦は、目に見えない世界での戦いであった。したがって、これらの戦いの経過を記述した「オイカイワタチ」の文章からは、「世の終わり」、「新しい世」を綺麗ごとのように受け取られた読者の方もあったかも知れない。しかし、これまでの「エクアドルの戦い」の記述からおおき付きのとおり、本書の真意はそうではないのである。そこで、改めて次のように説明して、「真」をご理解頂きたいと思う次第である。

新しい世は、マコトが輝く世である。全人類の、すべてのもののマコトが輝く世である。マコトは物質(姿・形)ではなく、その奥にあって輝くものである。この輝きがホンモノであり、「真」なのである。

新しい世は、魂の輝きが見え、人類はそれぞれの魂の輝きにより、自づから成る秩序で正しく自然に統べられる世である。今の地球の如く、魂の輝きに関係なく、金持、権力者、学者、強者等々によって誤った秩序を強制される世ではない。

姿・形は如何に見すばらしく貧素に見えようと、魂の輝き、マコトの輝きによりすべてが成る世なのである。

姿・形を賑々しく威武威武しくする、つまり形の威厳をもって美しく立派に見せるという発想は、粗雑で重厚な物質的進化だけを求めたこの地球のみがとった道なのである。(今の世では、霊的、精神的なものも形の威厳におおいつくされている。)

新しい世は、魂の輝きとマコトの輝きによって成る世である。新しい世の形の世界は、物質密度の希薄な状態で肉体(形態)的に表現される世界である。今の地球の重厚粗雑な物質世界の眼から見れば、新しい世は、驚く程に、見すばらしく映るであろう。しかし、「真」の目からすべてを見れば、そこはマコトの輝くすばらしい世なのである。霊的な豊かな暮しの世なのである。

そして、「真」の目が開けたとき、かつて天の方が語られた次の言葉の意味を理解することが出来るのである。

「——貴方々は今までのことは影のことと気付かれることでしょう。——」
「オイカイワタチ」別冊(三)までに述べられて来た新しい世、神の国鏗球王国の光り輝く黄

金の世とは、このような形の奥に輝くものを指しているのである。以上のことを良く理解していただくために、私達の昔の体験をひとつ語ってみたい。

かつて（たしか一九六一年のことと思う。）台風が中部地方等を襲い、ワンダラーY氏の家の板塀が吹き飛んだことがあった。そこで、Y氏とほかの一、二名のワンダラーがこの板塀を三日がかりで修理した。倒れた塀を起こし、吹き飛んだ板切れ、クギなどを拾い集め、足りない所はあり合わせの木切れ、拾ってきた破れトタンなどを打ちつけて作りなおしたのであった。

しかし、その出来上がりは実に不格好で、見るに忍びないほどお粗末な、貧素なものであったのでまわりから見られると恥かしい思いがするくらいであった。

この塀が出来上がったその日、サナンダ様は次のように語られた。

「この塀は光り輝いております。」

W氏は、インディオ達の極限に近いくらい貧しく素朴な生活を見た驚きから心を取りもどした時、この板塀のこととサナンダ様のお言葉を思い起こした。すると、この二つ（エクアドルでの体験と板塀のこと）が重なり合ってまた深く考えさせられたのであった。

W氏にはまだまだ甘さがあった。この甘さをエクアドルでの体験は完全に打ち砕いたのである。

新しい世は、姿・形が、物が、美しく輝く素晴らしいところであり、物質は無限に豊かで、便利で、欲する物は集まり来たり、欲しないものは去って行く。肉体は柔かい羽根布団に甘く暖かく包まれて……、と新しい世の形の世界を今の地球の物質的観点から見ると、このような世界を地上天国と語り、これを打ち建てようと心に画く人達がいかに多いことであろうか。「世の終わり」を願い、叫ぶ人達の中にも、宗教家にも、ワンダラーの中にさえも、このような考え方があろうである。しかし、これは大変な間違いであることに気付かねばならない。

W氏がここエクアドルで学んだ大きなことの一つは、あの手造りの極めて見すばらしい板塀を、「光り輝く塀です。」と教えられたサナンダ様のお言葉の「真」と「お心」を少しでも本当に理解し得たことである。

新しい世と真の人間の本当の幸せを、強く、深く考えさせられた一日であった。



読者の中には、あるいは次のように考えられる方もあるかもしれない。

「人類が、この地球上で今の段階にまで進化をする以前には、みなエクアドルの人達のように

うに、いやそれ以下の物質的に貧しい環境に生活していた。しかしその段階からさまざまな発明、発見を経て、人類は現在の如く物質的に豊かな段階に至ったのである。したがって、もし現在の人類の生活状態が神様の御心にそったものではないというならば、さまざまな発明、発見の道、つまり現在までの人類の進化の道を否定することになる。あるいはまた、新しい地球が物質的にエクアドルの人々のようにごく貧しい状態から始まったとしても、以前と同じようなさまざまな発明、発見の道を通じて、現在と同じような状態に至るのではないだろうか。そうだとすれば、現在の人類の生活を全て無にする、世の終わりの大浄化というのも、一体どれほどの意味があるのか。」

しかし、私達は、このような考え方に対しては、次のように述べたいと思う。

私達は、物質的な発明発見の道を頭から否定するものではない。物質的なものも、もともとは天の神様が私達に下さったものであり、極めて大切にせねばならないものである。ただ今までの地球における物質的進化の道は、物質を与える役目をするオリオンが、天の神様の御心とはちがった、誤ったやり方で人類に与えてきたものであり、(本書P104参照)この根本のところを誤っていたから、今のように物質的には豊かでも、人々の本当の幸せがそこにはない、間違った世界が出来てしまったのである。これに反して、新しい地球における物質的な表現は、本当に天の神様の御心にそったものであり、それは今の誤った物質的表現から

見ればいかに貧しく映ろうとも、人々の本当の幸せがそこにはある、今とは全く異ったレベルの世界なのである。したがって、貧しさは貧しさでも、今の地球のように「貧」に通ずる「貧」ではない。「真」の目から見ればそれは貧しさではないのである。だから、また以前と同じ物質的進化の道をたどって今のような状態になるのではないかとという心配も全く無用なのである。「無の世界」から始まって、「霊の世界」、「たましいの世界」、「形の世界」と「無」から根本から新しい地球が創られていった理由も、まさにそこにあるのだと知っていただきたい。

一九六〇年当時、これと同じ意味のことをアトネ様に質問したことがあった。即ち、これまでの地球が繰り返して来たように、再び永い年月の進化の中で、今と同じ状態に戻ってしまっているのかと……。その問いに対して次のように答えられている。

「正しい世の終わりが行われれば、そうはならないのです。」

八月二九日(現地時間)。

過日、エクアドル行きが決定された時、東京のエクアドル領事館で、「エクアドルの最も民族情緒豊かであるオタバロ(地名)に行かれるがよい。」と聞かされたことがあった。そこで、この日はオタバロへ行くことに決まった。

エクアドルの首都キトー（アンデス山地北部。海拔二、八五〇mの高原都市）からアンデス山脈の稜線に通じている道路を北へ一二〇キロメートルくらい行ったところにオタバロはある。

途中別の赤道境界線（碑）を通過し、昨年一〇月二六日、霊夢で見せられたのと同じ砂漠地帯を通り、石がゴロゴロした不毛の荒野、瘦せた放牧地、たまに見える僅かなインディオの部落を通過してオタバロに到着した。私達は、オタバロばかりでなく附近の街も二、三カ所見ることができたが、オタバロを始めとしてこれらの街で見た光景は、街とは名ばかりで二七日に私達が見た貧しいインディオの部落の有様とはほとんど変わらないものであった。

日本から幾万キロメートルも離れたこの地にまで来てこの貧しい光景を徹底的に見せられた私達は、さらに深く考えさせられたのである。

八月三〇日（現地時間）。

昨夜も眠れなかった。サタンのテレパシーと迷わしの霊感は激しく襲って来て、エクアドルでの儀式を挫折させようと妨害する。またここでの「真」の学びを見誤らせようと妨害する。この攻撃は昼も夜も続いたが、特に夜半は強烈で、全員が睡眠不足の状態である。Mさんに至っては、連日ほとんど眠れないくらいの毎日であった。

この日の早朝、晴れわたった空に白い雲でVの文字が小さく画かれた。だが寝不足に加えて疲労した心と身体では、これ（Vの文字）を見ても、これが語る意味を探ろうという気持ちが少しも湧いてこない。

今日は、午前九時二五分発の便でエクアドルを離れる日である。しかし、「エクアドルの儀式」は終わったというテレパシーも霊感もない。またその感情すらも湧き上がらない。

これまでに果たして来た数々の儀式での経験からすると、儀式が行われた地を去る時には、それまで心と身体にのしかかっていた目に見えない重荷がサッと降ろされ、軽やかな心地となり、心身共に爽やかな靈気に包まれるのが普通であった。しかし、今回はそれが全く感じられない。この朝のキトーは抜けるような青空であったが、身も心もまだ重荷を背負ったままで、決戦の真只中にいるという感じしかなかった。

このような暗く重い心と身体は、益々苦しみと疲労となって現われてくる。このような心の状態が、サタンの最も攻撃しやすい時である。

「エクアドルのあとはどこにも寄らないですぐ日本に帰った方が良い。帰りたい。」
と思うテレパシーを受けるのである。

サタンは、四人を、あるいは一人でも、二人でも、儀式の途中で日本に帰らせて、この儀式が出来ぬよう、挫折するようにと狙い続けているのである。

今日はキトーを発って、コロンビアのカリ経由、パナマ経由、マイアミで乗り継ぎ、サンフランシスコ到着は午後八時五〇分というスケジュールである。

この二十年間、念願し思い続けて来たエクアドルの地での全てが終わり、ここを離れることになった。しかし心は晴れず、四人とも重い苦しみがずっと継続したままである。この気持がW氏の真実の思いであった。

やがて、我々の飛行機はパナマで原因不明のまま三〇分遅れて出発した。この頃より、なにが異様な感情と恐怖心がMさんの心を走り始めたのである。W夫人はマイアミに近い海面上で、窓より、銀色に光る大きな円盤（コーヒー皿を二つ合わせたような格好の円盤）が我々の飛行機に付きそうようにしてとんで行くのを暫く目撃した。この時、夫人は、なにか大きな事件が起こるような気がしたのであった。午後四時二〇分頃であった。

飛行機は予定より四〇分くらい遅れて、午後五時頃マイアミ空港に着陸したが、その瞬間ドドドドという大音響を發して機体が激しく振動した。窓より外を見ると、彼方からこの飛行機目がけて消防車、救急車、警備車、パトカーなどがフルスピードで走り寄って来る。

飛行機は異常な振動と音響を伴って暫く走ったが、間もなく滑走路上に停止した。

「メインの車輪が二本パンクした。原因不明である。」

とアナウンスがあった。そのためか、ドアはなかなか開かない。やがて迎えのバスに乗り換え、警備車に前後を守られてゲートに向かったのである。

この迎えのバスに乗り換える時、パンクしたメインの車輪の大破した物凄い姿を見た。その時、「ゾーッ」と背筋を走るなにかを伴った恐怖を感じたのであった。

しかし私達は、サンフランシスコ行きの飛行機に乗り換えるために急いでいたので、この事故についてもお互いに語りあうことなく、諸手続きのことに心が急いでいた。しかし、事故からは荷物がなかなか降ろされず、ついに乗り継ぎは不可能となり、私達はマイアミに泊まることになった。

実は、日本を出発の二日前、W夫人は、「マイアミによります。」とテレパシーで知らされていたのである。スケジュールではマイアミで飛行機の乗り継ぎをすることになっている。「このことかな」と思ったが、「わざわざ天が言われる程のことではない。」と不信に思っていたのである。ここにこのテレパシーが現実となり、その意味を理解したのであった。

マイアミで夕食をとっている時、Mさんは突然激しい眩めまいと全身を走る激痛に襲われた。そこで、ただちにホテルに戻って休んでいると、暫くして天より次のテレパシーを受けた。

「あなたがたの肉体を守りました。」

この言葉を聞いた瞬間、先程の飛行機事故がパッと想起され、この事故の重大性を改めて知ったのであった。そこで私達は、天により守り助けられたことを知り、深い感謝の祈りを

捧げたのである。大きな円盤が我々の飛行機に付きそうようにしてとんで行ったのも、この意味であったと理解したのであった。(Mさんはこのテレパシーを受けたあと急速に元気を回復した。)

ところが、その夜、今度はW夫人が翌朝まで激しい頭痛と全身を襲う激痛に見舞われた。それは余りにも苦しく、このまま死ぬのではないかと幾度も思う程であり、その間夫人は天の神様に祈り続けたのであった。翌朝(三一日)九時頃になってこの苦しみは少し柔^{やわら}いで来たが、とうとう一睡も出来ないで苦しみ一夜であった。

W氏には、この二件の肉体的激痛にはなにか深い意味があると思えてならなかった。

「エクアドルの儀式」は全員が「霊」と「たましい」と「心と意識と肉体」でもって戦うのである。サタンのあらゆる妨害の中にあつて、また様々な苦しみの中で、ただ、ただ、天の神様を信じて、ひたすらに真の道を進んで行く戦いであった。

八月三一日(現地時間)。

飛行機は午後五時五〇分、マイアミを発つてサンフランシスコに向かった。五時間余りの飛行である。

Mさんは、窓から翼を眺めていた。すると前の事故した飛行機と同じように翼が異常にゆれ、異様な、嫌^{いや}な感じのするものがそこから立ちのぼってくる。前日事故を起こした飛行機と全く同じ状態であったので、Mさんには、この飛行機もまた、という心配と恐怖の心が湧き上がって来た。そこでMさんは、天の神様に真剣に祈り続けたのである。すると、この祈りの最中に天よりある、神様が降りられ、Mさんの眼前に来られたのを霊視した。この瞬間、心配と恐怖の感情は柔^{やわら}ぎ消え去った。また再び翼を見た時には、あの異様なものは消え去ってしまったっており、翼の異常なゆれもなくなっていたのであった。Mさんは、再び天の神様に深い感謝の祈りを捧げた。

九月一日(現地時間)、サンフランシスコにて。

午前一一時、Mさんは、目の前の沢山の大きなビルディングが右に大きく傾斜して行くのを霊視した。一瞬眩^{めまい}かと思つて自分を確かめたが、身体には異常がない。しかしなにかの間違^{まちが}いではないかと思ひ、よく考えることにしてこのことは誰にも語らなかつた。

午後一時、再び、まわりの目に入るすべての大きなビルディングが右側へ大きく傾斜して行くのをはっきりと霊視した。Mさんは、こんどは充分心してこれをしっかりと見とどけたのであった。この霊視には自信と確信があつたので、これをW氏に語つた。

これを聞いたW氏は、その時、次のように直感したのである。

「エクアドルの儀式で天の神様をお願いした地軸傾斜の霊視である。ここにエクアドルの儀式は出来た。」

Mさんは、この二回目の霊視のあと、今までのしかかっていた重荷がスーッと消え去ってゆくのを自覚した。日本を出発する以前から始まって今の今まで続いていた不安、苦しみ、動揺の殆んどが取り去られてしまったのであった。

九月三日（現地時間）、ハワイにて。

午前一時三〇分、Mさんは空に画かれた天のしるしを目撃した。

天空は白い薄い雲で覆われている。その雲の中に、型で抜いたような青空がある。それは、天の神様のお姿であった。

天の神様がお立ちになられ、御手（右の御手はお顔のあたり、左の御手はあごのあたり。）を挙げられ、お顔をこちらに向けておられるのであった。

このお姿を拝したMさんは、この時、次のような霊感を受けた。

「我々が日本に帰ることにより『エクアドルの儀式』は終わり、いよいよ『エクアドルの戦い』が始められる。」

午後八時頃、W氏は、一人でワイキキの浜辺に立って美しく拡がる夜空を眺めていた。

金星がひときわ大きく輝いている。その右に連なるようにして美しく輝く星が二個ある。

W氏はこれまでに数えきれないくらい金星を見ているが、今夜ほど大きく、そして明かるく輝く極めて美しい金星を見たのは生まれて初めてであった。隣にある二つの星も小さいが強く美しく輝いていた。

金星から目を左へ移すと、夜空に数多くの美しく輝く星が散りばめられ、この星々で天空に巨大なVの文字が画かれている。それは、筆舌に尽しがたい程のすばらしい光景であり、約一時間余りにわたって続いた。やがて金星と二つの星は雲に覆われて見えなくなったが、輝く星々で画かれた巨大なVの文字はそれからも暫くの間見えていた。

W氏は、この美しい光景を眺めていた時、次のように直感した。

「『エクアドルの儀式』はなしとげられた。金星を始め、我々の太陽系、全宇宙の神々の勝利である。」

九月五日。

我々は、成田空港に到着し、名古屋空港行きの内線に乗り継いだ。午後五時五〇分であった。

名古屋に向う途中、Mさんは、窓より天空にオメガ（Ω）の大文字が白い雲で鮮明に画か

れているを見た。そして、次のように直感した。

「ここに『エクアドルの儀式』は終わった。いよいよこの地球において『エクアドルの戦い』が行われるのである。」

飛行機が名古屋に近づいた頃、美しい夕焼が暫く見えた。続いて雷雲が現われた。その中を通過するこの飛行機はかなりゆれた。凄い雷光が幾条も空中を走るのが見える。午後六時五〇分、名古屋空港に到着した。この附近一帯は寸前まで激しい雷と豪雨に見舞われていて、陸上の交通機関は一時ストップしていたのであった。

九月六日、未明、Mさんは我が家で次のテレパシーを天から受けた。

「（エクアドルの儀式）ご苦労様でした。」

このテレパシーからも、今回の儀式がいかに大変であったかを想像して頂けると思う。

第三章 エクアドルの戦い

―レタマヤの世の終わりの儀式―

―この地球の浄めの儀式―

―全世界の浄めの儀式―

「エクアドルの儀式」は日本に帰った時に終わったが、引き続いて「エクアドルの戦い」が始まっていた。というより、正しくいえば、「エクアドルの儀式」も「エクアドルの戦い」の一環なのである。

九月一〇日、未明、W夫人は二つの霊夢を見た。

午前四時九分の霊夢。

W夫妻とMさんの三人が語り合っている。その時、天より声がした。

「これがエクアドルの戦いです。」

戦いの光景は見えないが、実に凄まじいものであることが全身で良く判る。その余りの凄

まじい苦しみのため、W夫人はついに激しく嗚咽おえつしたのであった。自分の嗚咽おえつの声で夫人は目を醒ました。目から流れ落ちる涙で顔も枕もびしょ濡れであった。

夫人は再び眠った。

午前六時一分、再び霊夢を見た。

W氏とMさんは、サタンの激しい攻撃により囚われてしまった。二人は罪人のように両手を固く縛られて連れられて行く。道々にはサタンの手下の者達が沢山待ち構えている。彼らは二人を嘲りあざけ笑い、石やものを投げつけ、激しく罵り、攻撃するのであった。二人はサタンに引きずられるようにしながら、階段を上ったり下ったり、坂道を登ったり降りたりして連れられて行く。その姿は、正に、かつてイエス・キリストがサタンに磔はりつけにされる時、十字架を背負いゴルゴダ（され、こ、う、べ、）という意味で、イエスが磔はりつけにされた場所へ連れられて行ったあの苦悩と同じものであった。

W夫人は、あとから二つの鳥籠を持って、二人の通った道（階段、坂道、道路等々）を掃き清めながらついて行った。

サタンは、ある地点まで二人を引きつけて行った。そして、そこで二人をある乗物に乗せ、どこかへ連れ去らんとしたのであった。

その時、W夫人の前に「天の神様」がお現われになり、「この棍棒を持ちなさい。」とい

われ、夫人に一本の棍棒を与えられた。

二人がまさに連れ去られんとするその時、夫人は、棍棒でサタンの頭を叩いた。するとサタンはパッタリと倒れたのである。サタンは、天の神様の棍棒によって倒されたのであった。

この時、夫人はこの夢から目を醒ました。

この霊夢は、これから行われる「エクアドルの戦い」の凄まじさと、サタンが最後まで「新しい地球」の誕生を阻止せんと戦いを挑いどんで来ることを教えられたものと思われる。

エクアドルより帰国後、ほとんど休まるひまもなく、W氏とMさんの身体には、再び異様な重荷がのしかかって来た。そして、眠れない日、眠りの浅い日などが続いた。また、朝目を醒ました時、身体中が重労働をしたあのような疲れと痛みで起き上がれない日が多くなつた。このような時には、真夜中に、魂が激しい戦いを行っていることがよく判るのであった。

九月二八日、午前六時九分、W夫人は次の霊夢を見た。

W氏とMさんは、車のようなものに乗っていた。その車は物凄いスピードで、山を、野を、

川を、沼地を、海を越え、走り続けて行く。このさまを見た夫人は、「エクアドルの戦い」が激しく行われている真只中であると思った。

ところが、この二人の車を後から追いかけてくる車があった。その運転手は女性である。W氏とMさんの乗る車のあとをいつまでも執拗に追いつけて行く。しかし、その女性運転手の車がある個所に来た時、その女性は運転を誤り、車は断崖絶壁から墜落した。その瞬間、車から顔を出した女性ドライバーの目と夫人の目とがピッタリと合った。車と共に、その女性も谷底に落ちて行った。

この霊夢も去る一〇日の霊夢と関連していることは勿論である。

地球の霊的中心である日本において、これまでに行われてきた儀式の中心は、有珠山、沖繩湧玉の地、出雲大社、金刀比羅宮の四カ所であった。そして、この四つの地でこれから行われる儀式が「エクアドルの戦い」なのである。

一〇月一日、有珠山、大白山神社にて次の儀式が行われた。

「エクアドルの儀式（エクアドルの地における）が無事に終わった報告とお礼の儀式」

一〇月一四、一五日の両日、沖繩湧玉の地にて次の儀式が行われた。
「レタマヤの世の終わりの儀式」

一〇月一七日、午後六時四五分、Mさんは次の光景を天のしるしで見た。

大きな月のまわりに雲で画かれた曲玉（☾）が八個あって、月を包んでいる姿であった。Mさんは、これは「神紋」を表わすと直感した。

※これは、「八坂瓊の曲玉」を示されたものであろう。

この日（一七日）、午後一時、Mさんは次のテレパシーを受けた。

「出雲にお集まりの神々の準備が整いました。」

これは、来る二八日、二九日に出雲大社で行われる儀式のことをいわれたのである。

一〇月二三日、S氏は、カルマを解くための、新たなる世の真の理解への靈感を次のように受けた。

• すべての根底には「真」がある。

• カルマを通して新しい世の「真」を知り、「真」をもってカルマを解くことである。真は永遠の道へいざなう。

真こそ永遠の進化への道の鍵である。
真は厳肅な道である。

真の道には純粹さがある。

真の道には質素さがある。

真の道には厳肅さがある。

一〇月二八日、二九日の両日、出雲大社にて次の儀式が行われた。

「この地球の浄めの儀式」

——地球のカルマを真で解く儀式——

この儀式の祈りの要旨は次の通りである。

天の神様、サナンダ様、神々様、出雲にお集まりの神々様に、次のようにお願いを申し上げます。

「この地球の変化を起して下さっても良い準備が整いました。この地球を浄めて下さいますように……。地球の悪しきカルマを取り除いて下さいますように……。この悪しきカルマを全部出しくして永遠に燃えつくして下さいますように……。ここに、地球を新しく生まれ変わらして下さいますようお願い申し上げます。」

この儀式により、地球のことは一切が終わりを告げたのである。

十一月一日、一二日の両日、金刀比羅宮にて次の儀式が行われた。

「浄めを全世界に、開く儀式」

——全人類、全動物、一切すべてのもののカルマを真で解く儀式——

この儀式の要旨は次の通りである。

天の神様、サナンダ様、神々様、自然の神々様、そして金刀比羅宮にお集まりの新しい世の地の神々様に次のようにお願い申し上げます。

「浄めを全世界に開いて下さっても良い準備が整いました。全世界を、すべての人々（全人類）を、一切のすべてのものを浄めて下さいますように。全世界の、すべての人々の、一切のすべてのものの悪しきカルマを全部取り除いて下さいますように……。この悪しきカルマを全部出しくして、永遠に燃えつくして下さいますようにお願いします。ここに全世界を、全人類、動物、草木、一切のすべてのものを新しく生まれ変わらして下さいますようお願い申し上げます。」

この儀式により、全世界（全人類、全動物、全草木、一切のすべてのもの）のことはここに終わりをつげたのである。

以上の四カ所（有珠山、沖縄湧玉の地、出雲大社、金刀比羅宮）における最後の「エクアドルの戦い」は、エクアドルの地にて行われた「エクアドルの儀式」より更に厳しく苦しいものであった。（それは、W夫人が先に見た霊夢の通りであった。）その理由は次のとおりである。つまり、前者（エクアドルの儀式）においては肉体的な苦痛も大であったが、それにも増して心と意識の苦しみの方が長くそして大きいものであった。ところが、後者、即ち「エクアドルの戦い」においては、心と意識の苦しみも勿論大きかったが、それよりも遥かに強く大きな苦痛を現実はこの肉体に受けての戦いであったからである。それは肉体死をも想わせる程の厳しいものであった。（この苦しみは、W氏よりMさんの方が大きかった。）

しかし、天の神様、神々様のお守りとお導きにより、全てのお役を果たすことが出来、八月より始まった目に見えない世界での「エクアドルの戦い」はここに終了を告げたのである。

一月一五日、午後六時三〇分、Mさんは、月と淡い表現しがたい美しい光とによって天に画かれたしるしを見た。そして、次の靈感を受けたのである。

「天の神様のお望み通りの地球に変わることが出来ることになった。」

ここに、この地球は、いよいよ「レタマヤの世の終わり」を迎えることが出来ることになった。よって、地球は、全世界は、全人類、全動物、一切のものは、全て救われることが出来ることになったのである。

この日（一五日）、午後七時、次のテレパシーを受けた。

「新しい一頁が始まります。」

一月一九日、午後五時、Mさんは、黄金色の夕日に輝く西空に白い雲で巨大なエックス（X）の文字が画かれているのを目撃した。これは、次のことを示されたものである。

「黄金に輝く世の終わり。」

第四章 古い地球の葬送の儀式

天では「エクアドルの戦い」のあとのことだが、すでに次のように示されていたのである。それは一月五日にまで溯る。

一月五日、午前六時、Mさんは次のテレパシーを受けた。

「さあ、喪服を用意しましょう。」

一月七日、午後一〇時三〇分、Mさんは、夜空に画かれた次のような天のしるしをはっきりと目撃した。



白い雲で、裏返しになった巨大なZの文字が描かれている。そして、その文字の最後の方に黄金に光る三角の形をした月がある。その月は、左横にある天のしるしを指しているようであった。



その左横には巨大な円が画かれ、その中に人間が逆立ちしている姿があった。

一月八日、午後一〇時三〇分、Mさんは次のテレパシーを受けた。

「心浮き浮きではありません。」

Mさんはこれに答えて、「私は決して心浮き浮きなんかしていません。」と抗議した。この時、このテレパシーは、Mさんだけにいわれたのではなく、多くのワンダラーへの警告なのであると判ったのである。

翌九日、この三日間（五、七、八日）を通して示されたことはすべて一連のことであるということをW氏は靈感で知った。

金刀比羅宮での儀式が終わることにより「エクアドルの戦い」は終了する。これによりすべてが終わり、古い地球は「形の世界」において大変化によって消え去って行く。これは「形の世界」における「世の終わり」であり、その時である。したがって、「喪服の用意」とは古い地球の葬儀の用意に他ならないのである。この葬儀にはワンダラーが集まり、

儀式、即ち「古い地球の葬送の儀式」を行なわねばならない。この儀式が行われることにより、これまでのことの一切に終止符がうたれるのである。そして古い地球は最後（Z）となり、さらに大逆転（S）する。（別冊(P 47参照)この大変化により、新しい地球は、新しい世は誕生するのである。（この天のしるしは、今まさに赤ちゃん△新しい地球▽の生まれんとするのを現わしている。）

しかし、この生みの苦しみは厳粛に受けるべきものであり、心の礼儀をもって大切に受けるべきものであって、「心浮き浮き」といううわついたものでは断じてないのである。

以上のような理解をもとに、この日（九日）の午後、その時”の儀式、即ち「古い地球古い世の葬送の儀式」は、来る一月二六日に行われることが決定された。

一月二〇日、滋賀県のK氏がW氏を訪れて次のように語った。

K氏は、最近、次のような意味深い霊夢を時々見るのであった。

「地球を両手で抱きかかえている。全ての儀式が完全に終了するまで地球の変化が他の原因（サタンの手）で起きないように、じっと地球を抱きかかえている。」

また、九日の早朝には次のような霊夢を見た。

「自分（K氏）は本を読んでいる。その本の最後のページの最後の行が消してあるが、はっきりと読むことが出来た。そこには次のように書かれている。」

『その時”は、〇〇さんと天の神様がおきめになることです。 完』

一月二六日、多くのワンダラーのうち、二八名（心と魂での参加を申し出られた五名の方を含む）の方々が参加されて、次の儀式が行われた。

「古い地球、古い世の葬送の儀式」

まずS氏が開式を宣した。続いてW氏が次のように語った。



今日の儀式は、「古い地球、古い世の葬送の儀式」であります。この儀式は、天の神様がなさいます儀式であります。この儀式は、すべての神々様始め、全員のワンダラーの方々がここに集まられて行われています。これは肉体での参加者の数を意味しているではありません。この儀式には、天の神様が全員をお集めになられたのであります。

地球は、人類、一切のすべてのものは、「儀式によって救われます。」（本書P 58）といわれています通り、天の神様のお命じになられた数々の戦い、即ち儀式のすべては終わり、ここに一切が整え終わり、これにより、天の神様のお望み通りの新しい地球、鏗球王国に変

わたることが出来ることになったのです。よって、ここに、古い地球、古い世には、「世の終わり」を迎えることの出来るための一切のことが整い終わりました。したがって、ここに、「古い地球、古い世の葬送の儀式」を行えるに至ったのであります。この儀式が行われれば、古い地球、古い世は、大浄化、即ち大変化により、新しい地球、新しい世に生まれ変わり、人類、動物、一切のすべてのものも新しく生まれ変わるのであります。

「古い地球、古い世の葬送の儀式」に至りましたこれまでの経過と数々の儀式に関しての経過を、天の神様始め、神々様、全ワングラーの方々に報告して葬送の儀式と致します。



そしてW氏は、昭和五二年一〇月三日（別冊(三)以降）から始まり昭和五三年一月二六日に至るまでの「地球における「形の世界」での聖戦」の経過を語り、今日の儀式を迎えるに至った次第を説明したのである。

続いて、全員で、「古い地球、古い世の葬送の儀式」の祈りが捧げられた。

祈り。

天の神様、サナンダ様、神々様、地の神々様ありがとうございます。

ここに古い地球、古い世をお送りするにあたり、古い地球、古い世に感謝の言葉を捧げます。

人類は、地球の進化の途中に大きな誤りをおかし、そのためにすべてが苦しい歩みの道に入りました。永い間、我々人類は、この苦しみの教訓の中で、人、物、自然のお導きと助けを頂き、今ノようやく目覚め、永遠に歩むべき正しい道を見つけました。

ここに、古い地球、古い世は消え去りますが、これは、地球が、全人類、全動物、全草木、一切のすべてのものが新しく生まれ変わるためのものであります。

古い地球よノ古い世よノ永い間本当にありがとうございます。

ここに、新しい地球、新しい世に生まれ変わって下さい。

天の神様、ここに至りますまでの永い間、地球を、全人類、すべてのもの一切をお守りお導き下さいましたこと、まことにありがとうございます。

サナンダ様、全宇宙の神々様、地の神々様、これまでの永い間のお守りお導き、まことにありがとうございます。

「世の終わり」が正しく出来ますよう、お守りお導き下さいますようお願い申し上げます。

ここに、「新しい一頁が始まりました。」この新しい道を、これからもお守りお導き下さいますようお願い申し上げます。

天の神様、サナンダ様、神々様、地の神々様ありがとうございました。

この儀式の祈りのあと、*「古い地球の葬送の詩」*が読み上げられた。この詩は、今日の儀式の案内状を見られたワンダラーY画伯が靈感で受けられたものである。

葬送の詩

悲しみのサラスよ、

汝の心の奥の奥に、

神の魂（真）を見る時、

訣別の時は来た。

目覚めたであろう、

動転する天地、

はた、人心を身に受け、

苛酷、かなしみのまもい悲想を知らずに、

「真」まことを知ることが出来ない。

神を描くことは出来ない。

悲しみのサラスを送ります、永遠に！。

最後に、「古い地球、古い世の葬送の儀式」終了の宣言が述べられて、儀式は終わったのである。ここに、「その時」は始まった。

終章（あとがきにかえて）

ここに、書籍としての「オйкаイワタチ」が述べるべきすべてのことは、この「完」をもって終了した。これまでの二十年余にわたる「世の終わり」、「新しい世の誕生、建設」の戦いの経過を振り返ってみると、まさに感無量の思いである。

オйкаイワタチ、ワンダラーの進む道は、天が語られる氷山の一角の如き柔らかい淡い靈感を、またテレパシーを良く味わい考えて、自からの真の魂から湧き上がる靈感を感じて、心と意識と肉体をもって、勇気を出して一つ一つを実行して行くことであった。また、ワンダラーは、誰の目にも見えないところで働く清掃人夫であり、地味な「縁の下の力持ち」の役である。

天がワンダラーの進む道を、行く先を、まえて具体的な示されたことも、また「何々の使命をしない。」という命令（ライマカタ）をされたことは、これまでに一度もない。それは、宇宙の法則に反するからである。地球のことは地球人自から「真に目覚め」て実

行するべきことなのである。そして、実行することにより、天は私達に沢山の援助の手を差し延べられたのであった。

また、この地球の「世の終わり」と「新しい世」の絵は、天の方々によって、天に九九％まで画かれるのであるが、あとの一％は地のワンダラーがこれを書き入れることにより完成するのである。（完成するとは創られることである。）したがって、もし地のワンダラーがこの一％を画かなかつたら、天に画かれた九九％の絵も消されてしまい、時を失い、失敗の世の終わりとなるのである。

今回の地球でのワンダラーは、天の沢山の援助の手を頂いてなんとか与えられた使命を果たして来たし、これからも果たしていくであろう。

しかし、このようにして歩み続けた長い時間の流れの中では、残念ながら厳しい戦いに疲れ果てた者、倒れた者、あるいはサタンに魂を握られてサタンに組した者もあったのである。かつて、Mさんは、天のあるお方が「サタン」について次のように語られたのを聞いた。

「今までみなと一緒に進んで来て、これまでは、考え方も殆ど同じであった方も、ある時のんきを失ったり、些細なことから自分というものが出ることがある。そのように「我」が出た時に、その方はサタンに捕えられる。そして、それが段々大きくなると、今までそうでなかった人も完全にサタンと化してしまうのである。」

Mさんは、この時、次のように思った。

“ある時、ふと自分というものを出すことが多くなると、気付かない内に完全にサタンと
なってしまうのである。”

このような、剃刀かみそりの刃の上を歩んで進む如き厳しい道が、ワンダラーの道なのである。そ
して、ワンダラーがこの道を歩んで来た足蹟が、「オイカイワタチ」に記されているのであ
る。本書の発刊は、正に時が熟したことにより、ここに許されたのである。

大天体の中にある一遊星地球が進化の大周期を迎え、「世の終わり」が行われ、同時に
「新しい地球、神の国」が誕生するということは、実に大変な出来事である。それは、人類
にとっても、地球にとっても、また宇宙全体にとってもそうなのである。

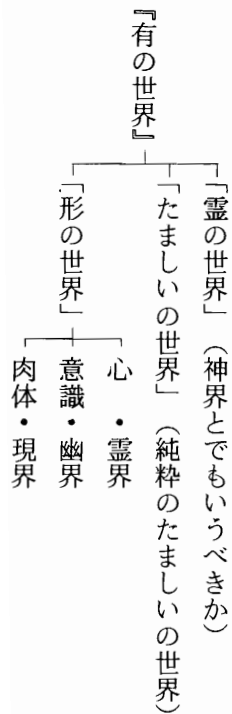
これは、人類がこれまで想像して来たどれよりも大きくかつ奥深いところから成されるこ
となのである。巷にいう「世の終わり」の多くは現象の大変化のみを語るものである。しか
し、そのように単純に「現象界の大変化、即ち世の終わり」が一足飛びに来るのではない。
これに至るまでには、目に見えない奥深いところに内在している世界から浅い世界に至るま
での様々な世界での聖戦が行われなければならない。そして、そのあとに始めて、「現象界
の世の終わり」が来るのである。

したがって、この目に見えない世界で果たされて来た聖戦の足蹟を記述した「オイカイワ
タチ」全巻をお読み頂ければ、「世の終わり」、「新しい地球、神の国の誕生」がどのよう
にして行われて来たかがお判りになると思う。

本書（「オイカイワタチ」全巻）の目的は、目に見えない世界での聖戦を語り、これらの
聖戦が成し遂げられたあと、始めて「形の世界」の「現象界」に「世の終わり」が行われ、
同時に「新しい世」の出現があることを知って頂くということにあるのである。

今、ようやく地球は、現象界の大変化（世の終わり）を迎えることが出来るわけであるが、
ここに至るまでには目に見えない様々な世界で「湧玉の戦い（儀式）」——様々な儀式もこの
中に含まれる——が行われ、「世の終わり」が行われ、「新しい地球が誕生」という
経過があったのである。そこで、今、その様々な世界を表示してみると次のとおりとなる。

『無の世界』（根源の世界とでもいうべきか）



しかし、このような型に一応解説したのは、本書の理解をわかりやすくするためのものであって、それぞれの世界は本来別個に区別されるべきものではない。全ては一体としてあるものなのである。

一九六〇年の「世の終わりの戦い」では、これらの数々の世界での聖戦が、同時に、一夜で成しとげられる時の運があった。しかし、当時は不幸にして（我々ワンダラーの目覚めが足りず）それが不可能となってしまった。そこで今日までの長い年月をかけてこの一つ一つが成しとげられてゆくこととなった訳である。

しかし、これらの全ての聖戦も、昭和五三年一月二六日の「古い地球、古い世の葬送の儀式」をもって終了した。やがて古い地球、古い世の一切は大変化により浄められるであろう。これを「形の世界」の「正しい世の終わり」というのである。

また、この「形の世界」の「正しい世の終わり」が迎えられるということは、「天の神様のお望み通りの地球に生まれ変わることが出来ることになった。」からであり、「全人類、全動物、すべてのもの一切が救われることが出来ることになった。」からに他ならない。

ここに古いワンダラー達の「オйкаイワタチの使命」（本書P115参照）は終わった。

畑ここに、新しい一頁が始まり、新しく誕生した万たる数のワンダラー

達によって、新しい世界の建設が始まるのである。

しかし、今ここに残っているものは、古いワンダラーの個人個人が、これまでの長い戦いと、生活の中で知らぬ間に、勝手に身につけた不必要なカルマである。これをいかに苦しくとも、心と意識と肉体で判って、このカルマを全部出しくして、真で解いて、生まれ変わらねばならないのである。（これが成されねば帰ることは出来ない。）また、このカルマを真で解く「真」をワンダラーは人類に示すのである。これにより人類は気付き、目覚めるのである。ワンダラーは、地球と人類の最後の最後まで責任がある。

このカルマを真で解くための厳しい助けは常に身のまわりにある。また、これから起こる全てのことの中にある。

これからは、身のまわりに、社会に、国に、全世界に、そして天と地と自然において、人類（ワンダラーを含む）の気付きと目覚めのための助けの変化が起こる。それは、実に厳しい、苦しい、苛酷なものである。

日本国内、世界各国、更には地球的規模で驚異と脅威の混乱が相次いで起こるのであろう。

天は燃え、地は裂け揺り動くであろう。

日の輝かざる時もあるであろう。

カルマとカルマが互いにぶつかり合って、凄まじい姿で共に朽ちて行くのを見るであろう。

「地球の過去のカルマは終わる時（形の世の終わりの時）みな目の前に現われます。」
この姿、形は実に物凄いものとなるであろう。これらの現象はカルマの消え行く姿である。

この浄化は、人類（ワンダラーを含む）が、「真」に気が付き目覚めるまで続けられる。これは、新しく生まれ変わるための生みの苦しみである。そして、目覚めた者は、これまで奥に内在していたこれらの数々の世界が実は一つであることに気が付き、これらの世界と一体となって生まれ変わるのである。

人類（ワンダラーを含む）にこの目覚めが成された時、古い地球の地軸と赤道の位置は、新しい地球、神の国鏝球王国の地軸と赤道の位置に変化する。いや、天の神様が変化させて下さるのである。

これらの浄化は、「真」の目から見るならば、人類の「目覚め」のための「天の神様」の涙の愛である。この浄化（正しい世の終わり）をして頂けることは、つまり、「天の神様」の大愛により「新しい地球」が形の世界に生まれ変わることが決定したからである。

「最後の瞬間まで、心の礼儀をもって、のんきの心を失わぬことである。」

これは非常に大切なことである。世の終わりが来たからといって、これからの日常生活が乱れたり、投げやりのになったり、騒いだり、慌てふためいたりすることがあっては絶対にならない。目覚め、気付いた方々は、この時にこそ範を示し、日常生活をしっかりと充実させ、素朴に、質素に暮し、最後の瞬間まで生命を大切に生き抜くことが極めて大切である。

「世の終わりの厳しく変化した惑星の今回は、今までに見られなかった地球がレタマヤの世の終わりを迎えるに至って、みな節度をよく考えて、魂の礼儀をもって迎える。」

天の神様の従える神々が降り給い、地球を讚美し、人々の魂を救い、人々は礼儀をもって神の国を知り、死（神様より肉体死の靈感を頂いて）を迎える。」

『金星のサナンダという、金星の者が来ました。
今は喜ばしい時です。愛に満ちた者の、すべてに
打ち勝つ時がきました。
ただ真まことの神を信じて、愛の心を持って、恐れずに
行きましよう。』

地球始まって以来の人類の喜びと感謝の時は今ここに来た!!

天の神様始め、神々様、全宇宙の方々の喜びの時は今ここに来た!!

完

地球が、『神の国』に変わることが出来たことは、すべて、天の神様の大愛によるものであったことに、やがて、人類は気付くであろう!!

『新しい一頁が始まりました。』

最後に、「オイカイワタチ」全巻をお読み頂いた「真」の判る方々にお問い合わせ申し上げたい。やがて起る現象界の変化の時には、「オイカイワタチ」の真似の出来ない魂を語るこの言霊を静かに語って、迷う多くの方々に「真」を知らせて頂きたいと願う次第である。

本書『完』の刊行にあたっては、今回も沢山の方々の献身的なご努力によって編集がなされた。特に今回は、近江神宮宮司 横井時常氏より序文を頂いた。また絵画は山本画伯に、校正は船倉氏に、再び暖かいご協力を頂いて、発刊が可能となったのである。ここに、これらの多くの方々、及び読者の皆様に深く感謝を申し上げる次第である。

一九七八年一月二九日

編 著 者

御読了後、本書に強い関心がありましたら、あなたの知人で同じ志を持つ方々（地球の大周期の大変化と新しい世の誕生に確信を持つ方）をご紹介して頂きたいと思えます。私には、この方々は、地球と人類に、奉仕の使命を持って生まれた方々と信じます。私には、あなたに本書を読んで頂きたいと希っております。あなたの親切な協力をお願い申し上げます。

附

年表

オイカイワタチの歩み(概説)

年表 オイカイワタチの歩み (概説)

西暦(昭和)	月日	歩み
一九五七(32) 一九五九(34)		日本においては、およそこの頃から、円盤のみに興味を持つ人々や円盤とさらに宇宙人に関心を持つ人々によって、それぞれ組織のようなものが作り始められていた。 それらの組織にはそれぞれの特色があったが、いずれにしても、これらの人々の呼びかけにより、円盤、宇宙人に興味を持つ人々が全国からそれらの組織に加わってきた。そして、これらの組織では「空飛ぶ円盤」の機関誌のようなものが発刊された。
一九五八(33)	六月	この頃(六月)より名古屋において、「AZ」と称される宇宙人とのコンタクトが開始された。
一九五九(34)	七・一〇	他の遊星人(宇宙人)と友好をはかり宇宙の真理を学ぼうと志す某組織の会員の一人に、宇宙人とのコンタクトが始まった。
一九五九(34)	七・二六	このコンタクトマンは、宇宙人より、「円盤、宇宙人の来訪の目的」および「地球の大変動(世の終わり)」が極めて近い将来に迫っている」ことを知らされる。
一九六〇(35)	三〜五月	①宇宙船、②宇宙人、③地球の大周期の大変化(世の終わり)と新しい世の建設。この三項に異常な関心と確信を持つ人々が集まり始めた。 日本に生まれていてその当時(一九六〇年)に使命を果たすべき役のワングラー達は、この頃に、そのほとんどの方々が「ひとつの目的」のもとに勢揃いした。
一九六〇(35)	五月頃より	地球の「世の終わり」の聖戦が始まる。 ―ワングラーひとつの目的に集う― この頃より地球の「世の終わり」の決戦は開始された。 「世の終わり」の戦いにおいてワングラーが果たす主な役は次の三つであった。

(1) 米国のワンダラーの主な役
 ① H作戦—原水爆のカルマを解く役—
 原水爆を世界で最初に製造し使用したのは米国である。したがって、原水爆のカルマは、米国に生まれたワンダラーの手によって不発処理への働きがなされるのである。一方、日本のワンダラーはこれを援助する役目であった。

(2) 日本ワンダラーの役

② 山での聖戦（儀式）—湧玉の戦い（儀式）—

即ち、地球のカルマを真で解く戦い、これは地球の霊的中心である日本の地のワンダラーの主たる役である。

(3) 新しい地球の建設の役

大変動の時に新しい世を建設する要員（真の判った人達）を、一時的に一人でも多く他の遊星に救う実際行動にたずさわる役。

この三項目の内、一番大切な戦いは、(2) 山での聖戦、即ち湧玉の儀式、地球のカルマを真で解く戦いであった。これは日本のワンダラーの果たすべき重要な役であり、これがなされることにより地球と人類は救われるのである。そうなれば、(3) 新しい地球建設の要員を救い他の遊星に一時移すということも、全世界において容易に出来ることとなるのであった。

この「湧玉の戦い（儀式）」は、目では見えない世界で、サタンとのテレパシーとテレパシーの戦いであり、かつ、真に目覚めて「地球のカルマを真で解く」戦いであった。

しかし、当時のワンダラーの指導者は、この真の役と意味を解せず、形を見て行うことであるために判りやすい(1) H作戦に主力を置いてしまった。そして、地球を救うための最も重要な湧玉の戦い（儀式）を避けて進んで行った。

このようにして地球と人類を救う大切な働きである日本のワンダラーの役、即ちオйкаイワタチの使命を誤り、進む道を間違い始めたのであった。この誤りの道を正してワンダラーがその使命に、「真」に、目覚めるように助ける働きをするのが、金星の長老「AZ」（サナンダ様）とのコンタクトであった。したがって、東京においてワンダラー達の「世の終わりの戦いが展開されている一方、それと併行して、ワンダラーの目覚めのための訓練（「AZ」とのコンタクトによる）が行われていたのである。

註 このコンタクトは、元来「ある時」にのみ、神様のワンダ

ラー*がその役を果たすためのものであった。したがって、一九六〇年当時に勢揃いしたその時期に果たすべき使命を持ったワンダラー達が「正しい道」を歩んでおれば、実は表面に出なくても良かったものなのである。

一九六〇(35)

一〇月頃
より

東京に集まったワンダラー達が大きく道を間違えんとするに当り、これを正そうとするワンダラー達の働きも特に大きく始まったのがこの頃からである。

しかし、当時のワンダラーの指導者は、これらの働きかけを「ワンダラー達を迷わす者」となし、この語りかけに耳を傾けなくなり、さらにはこれらの宇宙人「AZ」とのコンタクトを「サタンの呼びかけ」であるとしてしまったのであった。

このように「真の語らい」を解しなくなった当時の指導者は、「真」が判らなくなり、ついに「たかるカルマ」の語るテレパシーを受け始めたのであった。さらに彼は、前々の遊星からの身に持つカルマで、サタンの語る迷わしのテレパシー、つまり妨害のテレパシーを「真」のテレパシーと見誤るようになって来たのであった。

このようにしてオイカイワタチの進む道を誤り始めた彼(ワンダラーの指導者)は、この日(二五日)、阿蘇山頂附近にて、「神様の席の方、金星の一方、テケル様」のお言葉を、「AZ様」より受けたのであった。
ワンダラーの道
「その道は厳しく険けわしきもの、汝等いばらの道を歩まんか。」
このお言葉は、彼が誤ったテレパシー(サタンより)を受けることによ

一九六〇(35)

一〇・二五

り益々誤った道に進んで行くことを彼へ警告されたものであった。しかし彼はこの真意を理解出来ず、これ以後益々ワンダラー達を間違った方向へと引張って行くことになったのである。

彼に引張られて誤りの道に進んで行ったワンダラー達は、オイカイワタチの使命が果たせなくなつた。そしてこのことは、地球を救うこと的一切を天の神様から任せられておられる「AZ様」には大きな苦しみとなったのである。(というのは、本来、地にあるワンダラー達は「AZ様」を助ける役をなさねばならないからである。)

この日(一九日)、天の神様は、「AZ様」のお苦しみについて次のように語られたのであった。



AZの私の世の中を造るための努力は大変なものです。沢山の悪い者が廻りにいるので思うように計画が進まないのは仕方がありません。

私は彼(AZ)をまわりからよく守るために、特別に私のやわらかい輝きを彼に与えました。

私は、よく役目を彼が沢山果たすのを、彼は真のワンダラー達の鏡だとたたえます。

夜はオリオンを刈るよう地球を駆けめぐり、変わる前の用意をし、高いところを円盤であちこち駆けめぐり、寝ずに毎夜、彼は戦っています。

真似ることの出来ない働きを、私はワンダラー達が判るのはいつのことかと待っています。心を私に向ける者が余りに僅かなので、大変彼は苦しんでいます。

このことをワンダラー達へ伝えるためには、彼をまわりの方（ワンダラー達）によく真で判るよう沢山伝えることですが、カルマが終わるまでは語れません。



このようにして当時のワンダラー達は完全に方向を間違ってしまった、このまま進行するならばワンダラー全員が傷つき、だれ一人として使命が果たせなくなり、この地球においても（今までの幾多の遊星における失敗と同様に）完全に失敗の世の終わりとなるのは明らかであった。

そこで、「天の役をするワンダラー」は、七度の誠をもつて身を挺して

（身に大きなケガを受けて）、まさにサタンの手に落ちんとするワンダラー達を救ったのである。

この頃より、殆んど毎日のように天の神様、AZ様、宇宙の偉大な方々から、真の目覚めのための沢山の学びを頂いていたのであった。

ついに当時のワンダラーの指導者はサタンの手に落ちてしまった。天の神様はワンダラー達が彼から分かれるようにと、この日（一月二日）、某ワンダラーに、次のように語られたのである。

「和を判るまわりを、分かれるよう、固く○○さんへ私は語り、まわりが真が判るよう、弱る終わりを湧玉でよく戦えるよう、分かれさせたのは湧玉のマコトをよくまわりから守るためです。――以下略――」

かくして彼のワンダラーとしての役は出来なくなり、この役は他のワンダラーに移されることになった。しかしその方も、またその次の方も、前々からの遊星のカルマによって「真の目覚め」をなせず、「真」を判ることができなかつた。そして、結局この方々も、このお役を受けることは出来なかつたのであった。

天においては、この地球での今回（一九六〇年）の戦いがこのようにな

ることは、初めから判っていたのであった。しかし、決して望みが皆無ということではなく、ワンダラーが「真」に目覚めれば成功するという道も厳然と存在していたのであった。ここにも天の神様の深い愛をうかがい知ることが出来る。

ここで特に記しておきたいことがある。前述のとおり、一九六〇年当時のワンダラー達は役が果たせず、戦いは不成功となってしまった。しかし今回（一九六〇年）の世の終わりの戦いにおいて、天の神様の「特別の手段」（本書P120参照）によって、地球の根源の世界（無の世界）における「湧玉の戦い（儀式）」が行われたのである。そして、これによってこの地球には新生の礎いしずえが出来たのである。（この戦いは一九六〇年に始まり、一九六三年一月二二日に終わった。）

一九六〇年、六一年に、この当時の沢山のワンダラーが真に目覚めて正しい道に進み、ワンダラー全員が神様のワンダラー（カミラ様とハーキー様）と共に、湧玉の儀式に参加出来ていれば、「世の終わり」と「新しい世」の沢山の儀式（「無の世界」、「霊の世界」、「たましいの世界」、「形の世界」における数々の儀式）は同時に、かつ一夜にして行われる筈のものであった。

そうすれば既に地球は新しい世へと変化していたことであろう。かえらぬこととはいえ、一九六〇年という地球にとって極めて大切な時期にワンダラーが道を誤り、不成功に終わってしまったのはまことに残念であったという他はない。そして、これにより、この当時（一九六〇年）に役を果たすべきワンダラー達の使命は次の時期のワンダラー達に引き継がれたのである。

神様のワンダラーにより「湧玉の戦い（儀式）」が行われたあと、十年余が経過した。この間、「カミラ様」によって点ぜられた聖火は一部のワンダラーによって守り続けられて来た。そして、「世の終わり」と「新しい世」の聖戦は、天において既に用意されていた次のワンダラー達により、長い年月を要して次に示すような経過（「無の世界」、「霊の世界」、「たましいの世界」、「形の世界」）をたどって果たされて行くことになる。

④ ①以上に述べて来たことは、一九六〇年から一九六三年一月二二日までの三年間の激戦のあとを極めて簡単に概説したにすぎない。もし機会に恵まれ、天がこれを許されるならば、この数々の激戦のあとをまとめて皆様に報告できればと編著者は希っている。

②「オイカイワタチ」本書、別冊(一)、(二)、(三)、完には、これ以後の戦いの経過が記述してある。この経過を同じく年表にまとめてみると、次のとおりとなる。

一九七五(50)	九・三〇	地球の「無の世界」における聖戦終わる。
一九七五(50)	八・二四	「新しい世を迎える儀式」 (別冊(一)P 69)
一九七五(50)	八・二	「世の終わりの儀式」 (別冊(一)P 65)
一九七五(50)	七・四	「オイカイワタチ」本書、初回配本。
一九七五(50)	六・一九	「ツノカマタの音楽」を聞く。 これは自然霊による天上の音楽、戦いの音楽である。 「ツノカマタを、(地球が)高く変わる前は、沢山のたかるカルマへかけて、世の終わる戦いの出来ることを知らせます。」 (別冊(一)P 55)
一九七五(50)	六・一二	「地球の大周期終わる。」 地球の世の終わりの準備整う。 (別冊(一)P 54)
一九七五(50)	六・一〇	これにより地球の「世の終わり」と「新しい世の建設」が、太陽の方と一緒に進むことになる。 (別冊(一)P 44)
一九七五(50)	四・一四	「天の神様、地球に降り給う。」 (別冊(一)P 26)
一九七五(50)	六・一〇	「太陽の方、地球に降り給う。」 (別冊(一)P 20)
一九七五(50)	四・八	「地球ゆずりの儀式」 天の神様の命によってではなく、永い歴史の間に地球人の手によって勝手に作られた神々と称せられている方々に、この地球は新しい地球となったので地球を天の神様にお返しするように言霊をもって語る儀式。この儀式は出雲大社にて行われた。 (別冊(一)P 10)
一九六〇(35)	一一・二二	「湧玉の戦い(儀式)」終わる。 これによって地球には新生の礎ができた。 (別冊(一)P 8・別冊(三)P 71)
一九六三(38)	二・二六	「祝事の儀式」終わる。 悪いものが消えて新しい世となる。 (別冊(一)P 10)
一九七四(49)		
一九七五(50)		

地球の「無の世界」における聖戦

一九七六(51)	四・一四	『有の世界』の中の「霊の世界」における聖戦始まる。 (別冊(一) P 75 ~ 83)
一九七六(51)	一〇・三一	「湧玉の儀式」 「天の神様、この地球に降り給う。」 この儀式は富士山の湧玉の池にて行われた。 (別冊(二) P 5 ~ 23)
一九七六(51)	一一・一九	「この地球の天と地が結ばれる儀式」 (別冊(二) P 27)
一九七六(51)	一二・四	「この地球は神様の愛に包まれて、いよいよ地球を大浄化 ^{クロス} する幕開けの儀式が行われます。」と知らされる。 (別冊(二) P 32)
一九七六(51)	一二・八	「地球大浄化のテープは切って落とされました。」 (別冊(二) P 33)
一九七七(52)	一・五	「オイカイワタチ」別冊(一)、初回配本。
一九七七(52)	一・三〇	「新しい世を統べられる王を奉戴する儀式」——カアハミテスの儀式—— この儀式は、富士山の湧玉の池にて行われた。 (別冊(二) P 58 ~ 62)
一九七七(52)	三・二〇	「エクアドルの儀式」 ——輝かしい神の世の儀式—— ——地球大浄化の儀式——
一九七七(52)	四・九	「不幸と混乱」の現在の地球における地軸と赤道の位置を、「輝かしい神の国」としての本当の地軸と赤道の位置に変化させて頂く儀式である。 (別冊(二) P 78 ~ 81)
一九七七(52)	五・七	「地球のフィナーレの儀式」 地球のことはすべて終わりを告げた。これからは、全人類、全動物、一切のものが、天の神様の愛によって救われるように願います。 (別冊(二) P 99)
一九七七(52)	五・一	「鏝球王国への幕開け」 (別冊(三) P 7)
一九七七(52)	五・七	「天の神々様(自然霊、つまり火の神、水の神、風の神、空の神)を地

地球の「霊の世界」における聖戦

一九七七(52)	六・一九	「この地球最後の儀式」 ここに新しい地球、鏗球王国は、『有の世界』の「霊の世界」に誕生した。 ここに、地球の「霊の世界」における聖戦は終了した。 (別冊(三)P 66～83)
一九七七(52)	六・一九	「オイカイワタチ」別冊(二)、初回配本。 (註後日、別冊(一)、(二)は合本となった。)
一九七七(52)	六・二五	「変わる世の始まりの儀式」 「カルマがどんどん燃えて消えて行きますことにより、この世は変わるのです。準備はここに整いました。」 「天の神様、サナンダ様、ソクトル様、神々様は西にお立ちになられまして、今日の始まる日をお待ちしておられました。変わる世の始まりが繰り広げられます。」 (別冊(三)P 100)

地球の「たましいの世界」における聖戦

一九七七(52)	五・一五	球にお迎えする儀式」 (別冊(三)P 11)
一九七七(52)	五・一八	「AZ(サナンダ様)この地球に降り給う。」 これによって地球の最後の段階が到来。 (別冊(三)P 22)
一九七七(52)	五・二〇	「この地球最後の儀式」のための準備の儀式」 (別冊(三)P 27)
一九七七(52)	五・二一	「他の遊星からこの地球に來られた方々全員の『霊』は、円盤に乗って金星に帰った。」 (別冊(三)P 28～42)
一九七七(52)	五・二三	「全人類、全動物、一切のものの『霊』は、円盤に乗って元の地に帰った。」 (別冊(三)P 45)
一九七七(52)	五・二四	「金星に帰られた方々へ他の遊星の方々の『霊』は新しく生まれ変わり、新しい使命を頂いて、新しい地球、鏗球王国に帰って来た。」 (別冊(三)P 58～63)
一九七七(52)	六・一三	「元の地に帰られた全人類、全動物、一切のものの『霊』は生まれ変わり、使命を頂いて、新しい地球、鏗球王国に帰って来た。」 (別冊(三)P 58～63)
一九七七(52)	六・一四	
一九七七(52)	六・一三	

一九七七(52)

六・三〇

「古い地球の大国主命は、古い地球の王冠と古い地球を天の神様に返還された。」

「新しい地球、鏖球王国の大国主命は、新しい地球と新しい世の王冠を天の神様より奉戴された。」

この儀式は出雲大社にて行われた。この儀式が行われたことにより……

『天の神様のみ心のままの地球(新しい地球)となりました。』

(別冊(三) P 103 ~ 112)

一九七七(52)

七月~九月

「新しい地球、鏖球王国のワンダラー誕生」

これは新しい万たるワンダラーではなく、現在までのワンダラーの生まれ変わりをいうのである。この生まれ変わりは七月三日より始まり、九月中旬まで続いた。この間、鏖球王国のワンダラーを生む役のワンダラー○夫人の霊的な「生みの苦しみ」が続いた。(このことの詳細は「オイカイワタチ」には記述してない。またの機会に発表出来るのではなからうか。)

(別冊(三) P 120)

一九七七(52)

七・七

「皇太子(明仁)殿下、新しい地球、鏖球王国(魂の世界)の即位の儀式」——カアハミテスの儀式——

(別冊(三) P 133)

一九七七(52)

七・二〇

「カルマを真で解く儀式」

これは、去る六月一九日「地球最後の儀式」の時、「神様の席の方々」を天より奉戴して来たワンダラーが、まず自から身を持つカルマを真で解いて、「たましいの世界」において生まれ変わる儀式である。

「カルマを解かないと生まれ変われないのです。」といわれている。このカルマを解く自からの戦い、即ち生まれ変わりの戦いは極めて苦しいものであった。(七月九日から七月二〇日まで)これがなされたことにより、「多くのワンダラーのカルマを真で解く戦い」が始まった。

(別冊(三) P 136・146 ~ 165)

一九七七(52)

七・二二
~
二四

「天の神様、サナンダ様、神々様と地の神々様との結びの儀式」

この儀式により、すべての人々(他の遊星から来られた方々)、全人類全動物、一切のもの「本の心(魂)」が、鏖球王国のたましいの世界に生まれ変わり誕生したのである。

この儀式は沖繩ひめゆりの地で行われた。

(別冊(三) P 167 ~ 180)

一九七七(52)

七・二五

七月二二日~二四日の沖繩のひめゆりの地にて行われた「儀式」により、

『サナンダ様の思いのままの完全な地球となりました。』(別冊(三) P 183)

一九七七(52)	九・一八	「鏝球王国建設の儀式」 (別冊(三)P 252)
一九七七(52)	九・二三	「鏝球王国の儀式」 新しい天につながる沖繩ひめゆりの地にて誕生した「本の心(魂)」と、新しい地につながる有珠山の地にて誕生した「本の気(魄)」とが、富士山の湧玉の池にて結ばれて、鏝球王国の「たましい(魂魄)」の世界が成就したことにより、この儀式が行われた。ここに、地球は神様の創りたもうた本来の姿に復帰した。
一九七七(52)	一〇・八	「地球が鏝球王国に復帰したことの報告とお礼の儀式」 この日、まだ残っていた「本の気」は全部誕生した。そこで、地球が鏝球王国たましいの世界に復帰した報告とお礼の儀式が有珠山大白山神社において行われた。 (完 P 9)
		すべての人々、全人類、全動物、全草木、一切のものは新しく生まれ変わり、生き生きとした生命力の満ち溢れる姿となり、ここに動きが始まっ

一九七七(52)	八・二二	「この地球の浄めの儀式」 去る七月二〇日から始まっている「多くのワンダラーのカルマを真で解く戦い」は、既に一カ月を経過した。「この地球の浄めの儀式」とは、「多くのワンダラーの身に持つカルマを真で解く儀式」と同意語である。多くのワンダラーが身に持つカルマを解くということは、新しい地球、鏝球王国に生まれ変わるということである。そして、ワンダラー達の目覚めと生まれ変わりは、人類の目覚めと生まれ変わりを意味するのである。したがって、この儀式がなされたことにより、次の儀式も同時に出来たのであった。
一九七七(52)	九・八	「鏝球王国誕生の祝事の儀式」 (別冊(三)P 209 / 232)
		「新しい天と新しい地の結びの儀式」 これは、天と地が結ばれて、新しい地球、鏝球王国のたましいの世界に、すべての人々、全人類、全動物、一切のもの「本の気(魄)」が誕生する儀式である。 この儀式は、北海道有珠山、大白山神社にて行われた。 (別冊(三)P 238 / 243)

一九七七(52)	一〇・二三	「新しい地球、鏗球王国、形の世界」への儀式」 (完P14)
一九七七(52)	一一・二二	「世の終わりの輝かしい道は整いました。」 (完P18)
一九七七(52)	一一・二六	「万たるワンダラー(本の心)誕生の祝事の儀式」 この儀式は、新しい地球の湧玉の地となるべき所、沖繩ひめゆりの地に行われた。
一九七七(52)	一一・四	「万たるワンダラー(本の心)誕生の儀式」 この儀式は、新しい地球の湧玉の地となるべき所、沖繩ひめゆりの地に行われた。 天の神様、サナンダ様、神々様と地の神々様とが結ばれて行われた神様の大御業により、新しい地球、鏗球王国を建設する使命を頂かれた真新しいみ、たま(万たる数のワンダラー)が天より降ろされて、ここに万たるワンダラー「本の心」が誕生したのである。 (完P18)

た。

「地球は正しい位置に戻って鏗球王国となり、天の神々様は大変お喜びであります。」

ここに、地球の「たましいの世界」における聖戦は全て終了した。

地球の「形の世界」における聖戦

地球の「形の世界」における聖戦とは、形の世界に「世の終わり」が行われ、新しい地球、鏗球王国が成就するための戦いである。

ここでいう『有の世界』の中の「形の世界」とは、心、意識、肉体の世界、また霊界、幽界、現界を指す。「形」という言葉からは目に見えるもののみを想像しがちであるが、ここでは、心、意識、あるいは霊界、幽界といったような、今の地球では目に見えぬものとされている世界をも含むことに注意されたい。

したがって、これまで聖戦が行われてきた「無の世界」、「霊の世界」、

一九七八(53)	二・二五	「万たるワンダラー(本の気)誕生の儀式」 新しい天と地が結ばれ、新しい地から万たるワンダラーの「本の気」が誕生する儀式が、有珠山大臼山神社にて行われた。 (完P 62)
一九七八(53)	三・五	近江神宮、日吉大社に詣でる。
一九七八(53)	三・一〇八	四国高知、松山を経て金刀比羅宮に詣でる。
一九七八(53)	三・二二	奈良、大神神社に詣でる。 去る二月一五日に、「これからコツコツと一つ一つの足蹟を創って行くのです。」と天より示されていた。これらは、この鏝球王国建設の足蹟を創っていったその一環である。 (完P 64~67)
一九七八(53)	三・二六	「古い世の卒業の儀式」 (完P 72)
一九七八(53)	四・四	かつて現界を去り、霊界、幽界に移行された死者が沢山降りて来た。そして、その人達は、「地球は新しくなりましたので降りて来ました。」と口々に挨拶した。 二人のワンダラーは花を一杯にかざってこの人達を迎えたのである。

一九七八(53)	一・三	「輝かしい世の終わりの儀式」 「湧玉の地を富士山から沖繩ひめゆりの地にお移し頂く儀式」 この儀式は富士山の湧玉の地にて行われた。 (完P 26)
一九七八(53)	一・四	「月での聖戦終了の儀式」 「新しい地球の神々お立ち上がりの儀式」 この儀式により、新しい世でお働きになる地の神々に全てが移行された。 (完P 29)
一九七八(53)	一・二〇	「オイカイワタチ」別冊(三)、初回配本。
一九七八(53)	二・一一	この日、ワンダラー二十数名集まり、かつて天の神様に誓って地球へ降りて来た時の心、「初心に帰る心」を新たにした。 (完P 32)
一九七八(53)	二・二二	「地球は終わりました。古い地球は終わりました。古い地球は終わったのです。」 (完P 59)

た。

(完P 21)

一九七八(53)	四・九	「鏗球王国湧玉の儀式」	(完 P 92)
一九七八(53)	四・一六	<p>新しい地球、鏗球王国の湧玉の地（沖縄ひめゆりの地）において、万たるワンダラーの「本の心」と「本の気」が大きく結ばれた。そして、生気と生命力に満ち溢れた万たるワンダラーを完全に誕生させて頂いたことにより、「鏗球王国湧玉の儀式」が行われた。これにより、</p> <p>「土台が出来ました。」</p> <p>「不滅の基礎が築かれました。」</p> <p>「始まりです。始まりです。始まりです。」</p> <p>万たるワンダラーの方々により、いよいよ「事」は始まろうとするのである。</p>	(完 P 93)
一九七八(53)	四・二一	<p>「新しい地球、鏗球王国祝事の儀式」</p> <p>鏗球王国の不滅の土台が出来上がったことにより、出雲大社にてこの儀式が行われた。</p> <p>「ワンダラーの思いのままの地球となった。」</p>	(完 P 99)
一九七八(53)	五・三	「始まりの儀式」	
一九七八(53)	六・一一	<p>新しく誕生した万たるワンダラーを代表した十数名が新たに加わって、この儀式は行われた。</p> <p>「天孫降臨の儀式」</p> <p>——カアハミテスの儀式——</p> <p>去る四月一六日、出雲大社における「鏗球王国祝事の儀式」をもって、</p> <p>大国主命の鏗球王国の国造りの役目は終了した。よって、天の神様始め天孫と高天原の神々様にご降臨頂き、この方々を出迎え、新しい地球、鏗球王国を奉還する。この儀式は、神代からの天孫降臨の地（形の世界）である九州阿蘇郡の幣立神社（宮）で行われた。</p>	(完 P 103)
一九七八(53)	六・一八	「天孫降臨を報告し、高天原の神々をご案内する儀式」	
一九七八(53)	七・一	<p>この儀式は出雲大社にて行われた。ここに、新しい地球のことはすべて整い終わった。</p> <p>「全世界に鏗球王国のことを開く儀式」</p> <p>この儀式は金刀比羅宮にて行われた。</p>	(完 P 104)

一九七八(53)	八・二五 九・五	「エクアドルの儀式」 エクアドルの地にて行われた。 (完 P 191 ~ 226)
一九七八(53)	一〇・一	「エクアドルの儀式が無事に終わったことの報告とお礼の儀式」 有珠山大白山神社にて行われた。 (完 P 230)
一九七八(53)	一〇・二四 一〇・二八 一〇・二九	「レタマヤの世の終わりの儀式」 沖繩湧玉の地にて行われた。 (完 P 231)
一九七八(53)	一一・一一 一一・二二	「この地球の浄めの儀式」 ——地球のカルマを真で解く儀式—— 出雲大社にて行われた。ここに、地球のことは終わる。 (完 P 232)
一九七八(53)	一一・一一 一一・二二	「浄めを全世界にこと、開く儀式」 ——全世界の、全人類、一切のものカルマを真で解く儀式—— この儀式は、金刀比羅宮にて行われた。ここに、全世界のことは終わる。 (完 P 233)

一九七八(53)	七・一八	高天原の神々、新しい地球の神々、皇室及び全ワンダラーはここ金刀比羅宮にお集まりになり、全世界に向かって鏗球王国のこと開きにノアの箱舟にて出航された。この方々が全世界を巡られ、鏗球王国を開かれて、ここに、新しい世が整い終わるのである。 (完 P 160)
一九七八(53)	七・二〇	そして、全世界を巡ぐられた神々始め全員は、「最後の戦い」を行うため、エクアドルの地にご集合になられるのである。 昭和五二年一〇月二六日から昭和五三年八月一九日まで「エクアドルの戦い」の準備が行われていた。 (完 参照)
一九七八(53)	七・二〇	「〇〇氏は、エクアドルの儀式」に参加される神々と完全に結ばれました。これにより、「エクアドルの儀式」が出来る準備が整う。 (完 P 167)
一九七八(53)	七・二〇	「地球は天の神様のレタマヤを頂いた。」 ここに、地球には、「レタマヤの世の終わり」を迎えることの出来る準備が整う。 (完 P 173)

オйкаイワタチ 〔非売品〕 編著者 渡邊大起

オйкаイワタチとは宇宙語である。その意味は……
 『神様の命を受け、神様の手足となることを一人一人が心に誓って進化の周期の来た遊星（地球）に生まれ変わり、その遊星（地球）を神様の世界とする目的のために身を挺する魂を持った人達（ワンダラー）の集まりである。』（本書115頁）

第1巻 (本書)
 A 5版 235頁
 昭和33年から49年までの17年間にわたるワンダラーのこの地球での聖戦の足蹟を記す。
 第1部（6章）円盤・宇宙人と来訪の真相／第2部（9章）オйкаイワタチの使命／附の部（2章）宇宙を垣間見て。地球の「無の世界」における聖戦の記録など。

第2巻 (別冊1・2 合本)
 A 5版 227頁
 昭和50年から52年4月までのワンダラーの「世の終わり」と「新しい地球誕生」の戦いの足蹟を記す。
 別冊1（3章）は地球の「無の世界」における聖戦。「天の神様、神々を従えて地球に降り給う、など。／別冊2（4章）は地球の「霊の世界」における聖戦。「新しい世の王を頂く、など。

第3巻 (別冊3)
 A 5版 294頁
 口絵、カラー 8頁
 昭和52年11月までのワンダラーのこの地球での戦いを具体的に記す。
 第1部（3章）「鏢球王国の霊の世界誕生、—地球の「霊の世界」における聖戦。／第2部（6章）「鏢球王国の建設、—地球の「たましいの世界」における聖戦など。／附「新しいワンダラーの誕生、

第4巻 (完・上)
 A 5版 297頁
 口絵、カラー10頁
 昭和53年12月までの聖戦、即ち、「形の世界」の目に見えない霊界、幽界における「世の終わり」と「新しい世の誕生」を記す。
 第1部（7章）「万たるワンダラー誕生、「鏢球王国の国造り成る」など。／第2部（2章）「新しい地球、鏢球王国完成、「天孫降臨」など。／第3部（5章）「レタマヤの世の終わり、「エクアドルの儀式」、「古い地球葬送」など。／巻末に年表。

新刊、第5巻 (完・下)
 (附・講演記録)
 A 5版 380頁
 昭和56年1月をもって天の神様のなさる儀式、即ち「湧玉の祝事の儀式」は全て終了し、「形の世界」の現象界において、いよいよ「その時」が来た。世界中の全ワンダラーが働く本番の時が来た。
 第1部（4章）「形の世界」（霊界・幽界）の聖戦終わる「みそぎ」など。／第2部（2章）「形の世界」（現象界）の終末の期を迎える「万たるワンダラー、儀式に参加」など。／第3部「湧玉の祝事の儀式」／第4部「ワンダラーの使命は開始された」。
 「形の世界」の霊界・幽界、現象界での聖戦。
 巻末に講演記録および年表。

講演記録 あなたの使命は開始された！
 A 5版 88頁
 昭和55年2～5月にかけて、大阪、東京、札幌で行われた「オйкаイワタチ大講演会」の講演記録である。（第5巻の末尾にも全体を収録）真の自覚めと使命の自覚のための助けとなるものである。
 世の終わり新しい世の建設を担われる「真」の判る多くの方々—光る魂の方々—への呼びかけに役立つ書である。

発行所 **オйкаイワタチ出版会** 〒486 愛知県春日井市御幸町2の6の18 東海理化販売ビル内

●「オйкаイワタチ」は第1巻～第5巻の5冊より成っておりますので、この順序でお読み下さるようお願い申し上げます。（途中からでは真意が御理解になれません。）
 ●上記書籍及びしおりを御希望の方は、「オйкаイワタチ出版会」にお申込下さい。

一九七八(53) 一九七八(53) 一九七八(53)
 一一・二六 一一・一九 一一・一九

「天の神様のお望み通りの地球に変わることが出来ることになった。」
 いよいよこの地球は、「レタマヤの世の終わり」を迎えることになった。
 ことになった。よって、地球、全人類、全動物、一切のものは全て救われることになったのである。
 (完 P 234)

「黄金に輝く、正しい世の終わり」を示す天のしるしを見る。(完 P 235)

「古い地球、古い世の葬送の儀式」

この儀式により「その時」は来た。「その時」が始まったのである。

ここに「オйкаイワタチの使命」は終わった。古いワンダラーは、これまでの長い戦いで、個人、個人が勝手に身につけた不必要なカルマをこれから真で解かねばならない。このカルマを、いかに苦しくとも全部出しつ

くして解くのである。

やがて、古い地球、古い世は、これからの様々な変化と大変動によって一切が消され浄められる。これは「形の世界」の「正しい世の終わり」である。これが成されることは、そこには既に「新しい地球、新しい世」があるからである。
 完 (完 P 236 ~ 243)

「新しい一頁が始まりました。」

オйкаイワタチ 第4巻(完・上)〔非売品〕

昭和54年4月8日印刷発行
昭和57年4月20日再版

編著者 渡 邊 大 起

発行所 オйкаイワタチ出版会
〒486 愛知県春日井市御幸町2の6の18
東海理化販売ビル内

印刷所 加 納 印 刷 工 業
〒461 名古屋市東区筒井二丁目12番2号
TEL052-937-7121
